死神との絆の世界

ロースト

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
死神との絆の世界

【Ｎコード】
Ｎ２２１０Ｎ

【作者名】
ロースト

【あらすじ】
契約するか、人間。そう持ちかけられたのは神無月の終わる一週間前。地球は温暖化による危機に面していた……などという話ではありません！！ギャグにシリアスに、テンション高くノリだけで生きていけるような、そんな話にしていきたいです。
無関心な少年はある日の夢から面倒事に巻き込まれていく。吸血鬼に勇者に神にサキュバスに。いきなりモテまくり人生を歩む破目になったなんて、初心な俺には迷惑だ！！二次元で十分、もう構わないでくれっ！！

世界はこれからどうなる、俺はどうなっちゃうんだ！？切実に空に願った。空しくも。

落ちる。落ちる。落ちる。

「契約するか、人間」
そう、持ちかけられたのは神無月の終わる一週間前だった。

「あー今日もだるいいいいいい」
べたーと机に張り付くようにしてだらける。
金に染めた髪の毛が陽に照り、余計に暑苦しい。それを本人も自覚していた。
標葉(しんや)は茹だる様な暑さにすっかり参り、汗を額から流す。降参、といってもこの暑さは変わってくれない。
「確かに今年、暑いよな。あと一週間で１１月になるっていうのに」
俺のダチ１号。一匹狼の喧嘩好き不良。更にイケメンさん。
「異常気象ですよ、これは！」
はい、第２号。オカルティマニアの天才眼鏡君。隠れ美少年。
しゅーりょー。
（……友達少なくないか、俺）
いやいや、これは狭く深くであって、別にこの年になって人見知りとか、そんなんじゃありませんよ。広く浅くよりかマシだろう、幾分。
「あーシャワー浴びて帰ろうぜ」
「おっ。いいな、そうするか」
水の冷たい洗礼を浴びるために飛び起きた標葉に対し、冷たい視線を投げる香寿(かず)。眼鏡の奥からの視線はけれど標葉には目じゃない。威力なんてその美少年振りからは感じられない、というのが本音。大きな瞳に睨まれても涙を溜めて見つめられているようにしか思えない輩は多いだろう。標葉もその一人。豊(ゆたか)はどうだろうか、と視線を向ければ香寿からは意図的に視線を逸らしてる。
（そうきたか……）

「僕に、またあれをやれっていうんですか」
低い声を無理矢理に出す香寿。
「帰るまでにまた汗掻くでしょうに」
「うー。そうだけどさぁ。一時的にでも涼しくなんじゃん」
下から見上げる視線に動揺したように標葉は視線を豊へと移した。
「……アイス買ってやるよ」
ポンと香寿の頭に手を乗せて宥める豊には標葉がこう押し通すとテコでも動かないと知っているからの行動だ。普段は不満だけ言って何をするにも無気力。
積極的とは正反対の性格で流れに任せたままピンチになることもよくある程の自主性のなさで、行動や意思を主張する事は皆無だ。
「……わかりました。チョコミント味ですよ？」
「はいはい」
「しゃわー」
背の高い豊を上目遣いに眼鏡の奥から見る香寿とシャワーとしか言わなくなった標葉に親心を抱えて豊は立ち上がった。二人も荷物を持って立ち上がる。
標葉の滅多に言わないわがままに振り回される二人だが、中でも豊は二人の宥め役を仰せ付かっている。これが日常なのだ。平和でくだらない、どこにでもある風景。
（あの夢、何だったのかな）
妙に現実感のある体験だった、と標葉は柄にもなく考え、けれど暑さに集中を途切れさせた。

「何時にもましてウザかったな、部長」
「それはこっちの台詞ですよ、バカ標葉」
「落ち着けって、香寿」
グチグチ言い始める香寿は被害者だ。責められるわけもなく、豊は言葉をかける。標葉が反論しないのは自分の言動のせいだと分かっているからだ。つまり、今回に限っていえばシャワー室を使う権限

を持つ部長を香寿に口説き落としてもらった。
美少女のなりをした男子高校生である。いくら可愛くても、と思いつつそのオネダリには断れないのがモテナイ男の性。別に豊がやったって効果はありそうなのだが、如何せん、フォローは出来ても口車に乗せるということを豊は得手としていない。
（俺がやってもしょうがないしー）
無言で服を脱ぎつつ思う。標葉は自身の容姿に関して不満を持たない。けれど、だからと言って美形でもないのだから、と思っている。口には出さないのでそのことに関して誰も突っ込みを入れない。本来ならば標葉の容姿は見目麗しい、といって過言ではない。けれど標葉はこの学校ではある意味有名だ。だからこそ近寄らないし、彼女もできない。それを標葉は自らの容姿のせいだ、と思い込んでいるのだが。
「なーんでかな、友人の幅が広がらない」
ぼそりと呟きを置いてシャワー室に入っていく標葉を二人は溜息をつきそうになりながら見送った。気付かないとは何とも幸せだな、と感想を持ちつつ二人も個人ブースへと入っていく。
標葉が恐れられている理由。1年半以上前のある事件からだ。高校入学式に始まったその事件は3ヶ月程続いた。けれど標葉は全く気付いていない。引き起こした当人だというのに自覚がなく、事件になっていることもしらない。まあ、過去のことだな、と豊は考えを断ち切った。
標葉は沈黙し、壁に背を預けた。シャワーの音があるから誰もしゃべらない。肌を打つそれに耳を傾け、静かに、眼を閉じていた。
（契約、って何のことだ）
黒い衣装を纏い、目の前に降りたその存在は赤い眼を覗かせて、でも顔を見せず、ただ低い声で持ちかけた。深紅の柄に湾曲した漆黒の刃がくっついたそれを手に持ち、掲げ、標葉の首に宛がった。標葉は言ったはずだ、その時に首が微かに切れ血は漆黒に混じった。
現実の標葉は首に手を当てる。そこには何の傷もない。けれど、

触った瞬間に幻痛を感じた。
「何だったんだろう、あれは」
蛇口を閉じた時にきゅっと音がなった。シャワーの音が止む。他の二人はもう出たのだろうか。ブースから出るのに扉へ手をかけた。
（なんだ？何か、変）
そこには誰もいない。二人は外へと出たのか？ここには扇風機もあるのに暑い廊下へ？入る時には鳴った、扉の老朽化した悲鳴が聞えない。標葉は疑問を抱えながら己の服へと手を伸ばす。

《逃げて。神に見つかる前に》

耳元で、囁くような声。リィン――と鈴の音が鳴ったような気がして、振り返る。
踏み出す。

（え――――）
地面がなかった。ポッカリ、黒い穴。
（落ちる）
体が斜めく。動揺し、何も動けないでいるのは自分らしくない。
でも何かしようにも、出来ないのに気づいた。
利き手に握っているのは服だ。自分はさっきまでシャワーを浴びていたのだから、勿論裸。この場合、どうなるとしても服を着ていなければ完全に変態だ。動けないし、誰かに見つけてもらうにしてもそんな格好ではいけないだろう。つまり、手は放せない。
もう片方の手？そんなのもう、
（おちてるしぃぃぃぃぃ――――――！！）
絶叫。けれど直ぐに終わる。
どぽんん。
標葉は穴の中、何か水の中に潜ったような膜を突き抜ける感覚に、気絶した。

第一夜　湖面の月が微笑む（前書き）

吸血鬼に会いました。
これは夢です。夢です。夢です。
標葉は悩む、怒鳴る、驚く、名付ける、落ちた。
つまりはキャラ崩壊。

第一夜　湖面の月が微笑む

吸血鬼に会いました。

てなわけで、落ちました俺。

目の前に見えたのは真っ暗。ま、当然だな。冬の夕時だ、気絶していたのだからいつの間にか暗いのもわかる。

そしてまず思うのは、

（うん、手ぇ放さずに良かった！）

安堵。そうだ、暗いことに不安を覚えるでもなく感じたのは安心。この場所がどこかとか、とういうことじゃない。何故なら

（尻いってぇぇぇぇ）

服が下になってなきゃ俺のぷりちーな尻が傷を負っていたことだろう。

とりあえず服を着る。暗い中で作業をするのにはちょうどいいことに眼が暗闇に慣れてきた。

ごそごそ、ごそごそ。いてっ　何かぶつかった。

とりあえず、制服のポケットに入れておいた携帯のライトで照らす。ぶつかったものの正体が分かった。

（んぁ？なんだ、これ……）

呆れよりも感心がやや大きく、驚いた。背筋が寒くなる気分、とはこのことを言うのだろう。

箱だ。大きな、棺のような漆黒の箱。十字の紋様が大きく全体に描かれ、その中央に小粒ほどの大きさの紅の宝石が填まっている。そして封印でも施すかのように幾何学的な線による文字の織り込まれた布がＫＥＥＰＩＮＧテープのように巻かれている。その執念深さを表すように上蓋と本体との間の溝にはぎっしりと紙の符が貼られている。一様に古ぼけた、やはり線形文字の書かれたものだ。

（なんなんだよ、ここは……？）

無関心になりきれない。もともと好奇心は旺盛な方だ。それなのに行動力がない。それが俺なのだ。他人がどう見ているからはあまり知らないが、よく無関心だと表現される。否定せずにいたら定着した。それだけの話だ。

今ここで、好奇心を丸出しにしても危険は丸なし。つまり、行動を起こしても問題のない状況。暗いだけだ。得体の知れない封印チックな箱を開けたところで何だかが復活してもそれはフラグだ。襲われるようなことはないだろう。封印を施すって事は死体が入ってるわけじゃない。うん、恋愛フラグ。古の美少女が何者かから身を守るために、という某漫画のヒロインとか吸血鬼とかが眠ってたりするんだ、これは。

「あのー」

あれ、吸血鬼はヤバくないか？いきなり初対面で殺される確立あり。いやいや、そんなわけない。だってそんなのは何かのギャグ的だ。吸血鬼伯爵とか。うーん、その前に俺、男。男の吸血鬼の餌にはならないだろ、餌は異性だし。同性に対して血を飲むとか、ない。だって首筋にキスみたいなもんだぜ？ないって、マジで。

「あのさー聞いてる？」

完全ない。マジで。だってホモじゃん？それ。てかヤバいからさっさとヅラかろう。封印が緩んでたーとかそんなのイラナイし。この際だからフラグもいらない。未練はあっても仕方ない。だって俺、死にたくないし。

「おいよー！」

ああもう、五月蝿いな。……っ！？

「お前、誰？」

真正面、意識を向けたのと同時に視界に入る長い金髪。透き通るような空の蒼。紺碧色の瞳。

「っ」

「ああ、もう。遅いから起きちゃったじゃん」

闇の中に輝く月のような色合いのソレは壁の方へと手を伸ばし、パ

チッとスイッチを入れる。……ん？
（スイッチ、あったのか。しかもそんな近くに。）
なんて近代的なんだ、と思わず思ってしまったのは照らされた空間とのチグハグ感によって更に倍増することになった。何故って、ここが儀式めいた部屋だからだ。携帯のディスプレイなんてちっちゃな光で知ってしまった異様な空間が、めちゃくちゃ再現されてる……！！
床には血のようなもので描かれたらしき魔法陣っぽい紋様。その中央に棺が置かれ、それを縛るように古臭い鎖が四方の壁に釘で打ち込まれた器具によって固定されている。部屋を横断するそれは火の灯っていない燭台を横切り、空から影を落としていた。
その中で現代人の俺はボタンの掛け違えた制服に鞄、手には携帯というあまりにも常識な格好で男と向かい合っていた。銀髪ロンゲ、スカイアイ、中世にでも迷ったかのようなマントと装飾華美なゆったりとした服装、俺よりも少し高い背、端正な顔立ちは女性と見間違えそうな程に整っている。平凡な俺。どこか間違っちゃった感のある美形。不良チックに子羊な俺。美女といって誰でも騙せちゃいそうな麗人。学校のシャワールームから落ちてきたっぽい俺。棺に入れられ封印されてたっぽい男。とりあえず、ボタンをかけなおしまーす。
「本当はさー
『ん……？なんだこの箱は！？
これは――封印？なんて惨い……。
男は夢中で符を剥がしにかかる。古びたそれはたいした抵抗もなく破れ、そして重厚な上蓋はゆっくりと開けられた。
ああ、美しい。なんて美しい人なんだ。眠っておられるのか？
男は眠る麗人にすっかり魅了されてしまった。胸の前で組まれた手は細く、頼りなげに祈りを捧げていた。男はその麗人に手を伸ばす。柔らかな頬は冷たく、けれど薔薇色に輝いていた。
「なあ、何時まで続くんだ、それ」

そして手は首へとズラされる。細い首は今にも折れてしまいそうで、誘われるような鎖骨が眼に入り、男は更に手を下へとズラしてしまっていた。

そして気付く。その麗人は女性ではないことに。けれど男には止められなかった。自らの内に灯った欲望を。そしてそれを表すように麗人の唇へと近づけたのは己の下半――ぐぼぁ！！」

「欲望を表しすぎだこの変態がっ！！！」

思わず突っ込む。いや、ツッコミ。

頭に鞄を振り下ろした。それは無慈悲かつ正確に男の後頭部へと吸い込まれるようにヒットした。運命のようだ。ああ、運命と言えば運命だ。俺たちが出会ったのも運命と言えるのだろう。俺はディスティニーを信じる。ガ〇ダムは好きだからな。いや、あれは男の子が避けては通れないものだ。女の子だって最近は深く浸透している。そういや最近、腐女子というのが棲息しはじめた。（男がそれにはまるのは腐男子というらしい。俺は違う）一部のアレな女子に人気なのだ、ＢＬ。実は俺の姉もそうだ。男と男の恋愛ドロドロを「頑張って！」と応援する結婚できない女だ。仕事では誰も口出しができないようなスペシャルなエリートの中のエリート。悲しいかな、本人は女性にお姉さまとか言われてモテまくっている。親衛隊やらストーカーも多数いる。（実はお茶を飲んで仲良しになった）姉も俺も一人暮らしなので被害は受けていないから現状、口を挟むつもりはない。姉の方も楽しんでいる節がある。

「何しちゃってんだよ！？初対面の眠ってる奴相手にっ！！しかも同姓だぞっ！？馬鹿！？」

思考は変なところに向かいつつも標葉はわりとマトモに突っ込みを入れていた。この不審人物はただの変態だ。いや、ただも何もない、普通に変態だ。ナチュラルに変態だ。もう関わりたくない。いや、前から関わりたくなかった。こんな人種がいる事は昔から知っていたからな。よく、身近に。禁忌という言葉が好きなナルシストな完璧主義者と過剰な程に家族（特に俺や弟たち）へ愛を向ける兄、

セクシャルなちょっかいを出してくる小悪魔天使な双子とか……、理解不明な生物が極身近にいるんだよ。……子は親を選べない。そして兄弟も選べない。――悲しい現実さ。（ちなみに両親は化け物じみた童顔の万能超人スペシャリスト）

やべぇ、俺、家族の中で浮いてる。かなり普通人なんだが、すごい血を受け継いじゃったな。家系もすごいみたいで爺ちゃんは金持ちだ。両親は両方駆け落ち。但し仲は修復されている。孫たちに陥落したか……。

「人の迷惑考えろっ！？」

自分でも何故最後が疑問系になってしまったのかわからないが、一応。だって、ここらに人っ子一人いない。誰もいない。気配がない。いや、ここはどこだ？俺は誰だ？俺は標葉だ。

うん、記憶喪失ではない。記憶の欠落もない。いやいや、電波ではないぞ。電気着く前にきちんと着替えておかなかったらマッパでこの変態野郎に罵倒するほどの地位を獲得できていなかっただろう、とか考えてない。全く。俺は人間として立派なんだ、初対面でキワドイ言葉吐きまくる変態よりかよっぽど人間として出来てる。

「いやいや、俺が期待したから。人の迷惑って、俺だし」

冷静に返す男に自分が悪いような気になってくる。ただの冗談だったか？そう思いつつも言葉は毒舌にツッコミを続ける。俺って素直だなーって改めて思うよ。歯に者着せぬ言い草はストレートに彼への暴言になっているところが痛いところだが、それだけ彼が悪いってことで。

「俺の迷惑だ！！勝手に登場させるなっ！！どこの変態さんだよソレ！俺の役割に当ててるんじゃねぇよっ！？」

なぜかまた疑問。いや、何故って俺の役割といいながらもそれを実行に移さないように考えていたのだから、どうにも。実際の自分は面倒事嫌いーで急がば回れ、みたいに回避しようとしてたわけだしさ。ていうかこの状況、誰かさっさと説明して欲しいよね、ホント。

さて問題。何故俺はこんなところにいるのでしょー。この変態さんはどこの誰さんでしょー。
「なんだ、初心か」
「はぁ！？」
いやはや、思いっきり反応してしまった。予想外すぎた。予想外すぎた……。
男は悠然と自らの入っていた棺の上に腰を下ろしている。
「仕方ない、最初だから俺が懇切丁寧に教えてあげるよ。まずね、フェんぐっ！！」
「もう口を塞げ、永遠に死んでください、本当」
とりあえず、そこらにある千切れた封印の書かれた古布を口に詰め込んだ。限界まで入れさせてもらった。これでしゃべれないだろう。何を言おうとしてやがんだ、この男、非常識だ。いや推測できるけどっ！わかりたくなかった……！ついでに手足も拘束しておこう。それがいい、それが一番安全だ。俺に被害は全くゼロ。（本当は脳内初期化したかったが）うん、我ながら良くできました。男は見事に芋虫状になっている。ついでに蹴って床に転がした。ああ、すっきりした。いい汗かいた。世界的にいい事をしたよ。変態という名の害虫が一匹減った。
……嫌だな、こいつに構っていると俺のキャラが崩れる。ていうか、誰かが起こす前に起きたじゃん、コイツ。馬鹿だ、俺。これのどこがフラグだか。余りにも非現実的すぎて硬直したのが間違いだった。さっさとここからオサラバすればよかったんだ。いや、今からでも遅くないだろ。立ち去ってしまおう。
思い立ったが吉日、標葉は鞄を引っつかんでその場から去ろうとする。
「んっ……んんぅ……っん」
なんだか呼吸音が艶めき始めた気がする。と、背後に視線を移せば頬を高潮させている男。体をくねくねとよじらせている。……見なかった。下半身になんて視線は移さなかったぞ、俺。

「んんん……っ！！！」
「しにさらせぇぇぇぇぇぇぇぇぇ！！」
嘘ですよね！！絶対嘘ですよね！！俺、何も見てませんからっ！
一瞬体が痙攣したかと思うと一気に脱力したようにして甘い吐息を吐いたのなんて見てませんよね！！
俺が見たいのは美女の痴態だ。あ、いや嘘です。本音過ぎました。とりあえず、現状回復のために口だけ吐き出させた。何だこの図、俺が変態異常者みたいじゃないか、と気付いたためだ。全くもって可哀想などと思ってはいない。しかし……どうやってこれを退治しようか。駆除したと思われた虫が復活してしまったぞ。虫が嫌いな紳士淑女も今は多いのだ、ここは俺が殺っとくべきだろう。
ぴんぴろり～ん。標葉は青い炎の殺意を芽生えさした！標葉は攻撃力が上がった！変態は怯まなかった！変態は攻撃を開始した！
「激しいね、君。初対面なのに」
「激しいのはお前だ」
「えっ！」
「そこで頬を染めんな変態」
溜息つきたくなる。何故こうもすんなり会話がスムーズに？いやな符合だなぁ。
「っていうのは冗談で、」
「どこが冗談だ？どこからどこまでが冗談なんだ、ぁあ〝！？」
以上、会話だけでお送りさせていただきました。若干、最後キレましたけど。俺は穏健派。何事も穏便であると宜しいです。
「ヤンキーじゃないでしょ、君。ただの不良でしょ」
「ヤンキーと不良の違い言ってみろやぁ！！」
「言葉からして違うじゃん。君、キャラ変わってるよ」
平常心、平常心。
「俺、吸血鬼だから。ついでに君、契約者ね」
「……は？」
ＨＡＨＡＨＡＨＡＨＡ。

頭いっちゃってるー。俺のノリもいっちゃってるー。
風がピューと通り過ぎたように感じた。密室なのに。部屋だぞ？ここは。近代的な扉がある。開けた先に何があるのかは何故か未だ見ること叶わずにいるが。
しかし、吸血鬼というものがなんなのかこの男は知っているのだろうか。吸血鬼はドラキュラと混同されることが多い。しかしそれは違うと言おう。吸血鬼は名称からいってそれは現世においても存在するといえる。それは吸血蝙蝠と同等として扱われるからだ。吸血する鬼。しかし鬼というのは本来の意味で“鬼”であり、何も角が生えた化け物というわけではない。“鬼”は鬼畜の意味合いだ。つまりこの場合でいうところの、吸血する残虐性を持った生き物というのが吸血鬼である。
対してドラキュラは架空の人物である。小説の中に存在する人物であり、ドラキュラは吸血鬼に対する個体名だ。他にカーミラという女吸血鬼が有名だ。ドラキュラのモデルは実在の人物でありドラキュラ伯爵と呼ばれていたのだが、伯爵の実名がブラドというからブラッドと結び付けて考えられたのだろう。そして吸血鬼の英名はヴァンパイア。ヴァンパイアは何も吸血行為だけで人命を奪うわけではない。……と、こういう知識を引っ張り出してみたのだが、そんな苦労をするまでもなく目の前の男は吸血鬼ではないと証明できただろう。だってこの男は変態で電波だ。言っていることも甚だ可笑しい、変人。棺の中にいたことからも言動からも、怪しすぎて信用が置けない。無視するに相応しい存在。塵に等しい。
「自覚なかったの？もう普通の人間でもないのに」
「人間じゃない？……あー、俺、電波とは話したくないから」
妙なひっかかりを覚えたがこれがこいつの手法か、と次の瞬間には分かった。
（ったく、変態ホモ野郎かと思ったら今度は電波かよ。吸血鬼とか）
標葉は頭痛が痛くて頭を抑えました。ついでになんとなーく近寄ってきているような気のする自称吸血鬼の顔を抑える。ああ、俺の

運命は何故こうも捻じ曲がってしまったんだか。
ガン〇ムも普通の学生が巻き込まれてスーパーエースになって戦いの主軸を歩くことになるんだが。俺もそういう運命だったのか、ジーザス。あ、俺は赤い機体が好きです。宿命の対決って言うのは何時見ても感動するし心が熱く滾る。悲しみと怒りに叫んでるのが一緒に叫びたくなるよ。アレ、しつこくない？すごい語っちゃってる気がする。俺はオタクじゃないんですけど。マニアでもありませんよー。単に目の前の美形から現実逃避したいだけですよー。まじやべぇぜ、おれ。……この美形と視線、合わせらんない。
「身に覚え、あるくせに」
どこか艶めいた言葉。呆然と柔らかそうな唇を眼で追ってしまっていた。やっぱし綺麗。いやいや、自分に男色の気はありませんが、色気が凄くて、……あてられる。
契約するか、人間――。
あれ、もしかしてこいつが……！？
「君の血、おいしく頂かせてもらいました」
ニヤニヤと笑う男。
違うな。よく思い出してみろ、あれはもっと威厳があって寒気のするような、……得体の知れないもの。とりあえず、コイツではない。
男の綺麗さにドキドキするような鼓動は持ってないぜ、俺！アイアンハートですから。……本当はチキンですけど、違いますよ、綺麗な顔に迫られて動悸がするなんてことありませんから。とりあえず、状況が一向に代わりそうもないので外に出よう。男は置いていくことに決定。
「あれ、どこ行くのー？待ってよ」
「付いてくるな」
無碍にあしらう。が、逆に男に溜息をつかれた。心底呆れた、というようにして。本気でコイツむかつく。イラッと来た。イラッと。
「何言ってんの、俺がついてかないと君、痛い目みるよ？」

「は？何言って――っ！！」
（ナニコレ。魔物？え、そうなの？そうなんだよねぇ！？）
パニクッタ。ああいや、混乱だ。うん、当惑。だって目の前に今までに見たこともないような気持悪い生物がいるんですもの。
「あはは、今日、満月だからねー」
（めちゃくちゃ気持ち悪い！！）
どれぐらいって、俺の大嫌いな虫・昆虫・爬虫類の解剖よりも。大量に群れを成している蟻でさえ大量に発生して群れで黒い塊になっていると気持ち悪いのに、これはそんなもんじゃない。緑色の体液に紫の吐息、粘々した口内を晒して触手をウネウネ動かす、黒い甲殻の生き物。地球上に存在していたなんて……、いや、俺の夢の中の産物か。俺の頭はどうなってるんだか、解剖でもして中を覗いてみたいが、それをやると見る前に俺が死んでしまう。断念。
とりあえず、満月だと出現するんだか襲うんだかのこの生物。吸血鬼に倣うならこれは魔物と呼ばれるファンタジーの住人だ。嫌だ、帰りたい。
「一人だと危ないよー？」
今更遅いよ。

＊＊＊
「俺……記憶なくしたみたい？」
起き抜けに、こんなことを言い出しやがった。

とりあえず、蹴飛ばした。身が震える。恐怖で。怒りで。勿論、自称吸血鬼に対してだった。変な生ものに対してではない。気絶している間に己の体に何をなされたかと思うと。ぶるぶる。
実際、眼が覚めた時にこの男、人の半身に顔埋めてやがった。ま

ず、攻撃。身の安全を確保。乱された服、ベルトをしっかり締めた。本当は男が触っただろう部分、というか全身を水で洗い流してしまいたかったが、それもできない森の中。うん、後で水流を探そう。全くないってことはそれこそないだろう。
魔物、らしき生物。命があるだけのモノ。存在してはいけない存在。緑色で黒色で紫色なアレを処理したのは目の前の男だ。しかし、全くもって実感がわかない。そんな記憶は曖昧で否定したくなる。つまり、信じられない。……事実でしかないのだけれど。

「一人だと危ないよー？」と遅すぎる助言をした男は笑いながら、けれど身を挺して俺を生かした。魔物（土毒虫とかいう種類らしい。名前で分かるように猛毒があるんだと）の尻尾攻撃は俺を狙ったものらしい。振りぬかれたそれは見た目に反して素早く、俺は硬直したまま動けなかった。それで男は死んだ。
今は生きている。というか死んだの嘘だった。騙しやがった。相当焦った俺は男にこの場の解決方法を頼ったのが悪かったらしい。嘘をつかれた。曰く「一度目の契約は済んでいる。だから、力を解き放つ二重の契約をかけて」「契約には血液を飲ませること。君の血を俺に――」果たしてそれは実行された。瀕死の重症を負った彼だが、事態を好転させるに俺は無力で彼の方がなんとかなるのではないかと期待を抱いた。だからテンパッた俺は血を飲ませるなんていうので勘違いをし、自ら口付けてしまった。恐らく、男が茶化して誤魔化した眠りの物語のように。

結果。

俺は口内を荒らされ、獣のように息を継ぐ間もなく求められた。この現実に陥った原因である気持ち悪い物体がそこにいるのだ、そんなに長い時間ではなかったように思える。しかし、拷問のように

長く続いたそれは血液という対価も含めて俺の意識を霞にかけた。
そうして男は壮絶な笑みを浮べると、俺を解放し、真摯なぐらいに壁に背を預けさせて楽な体制にしてくれると、一瞬で敵に近づき、蹴った。男は空中に飛んで、虫は飛散した。毒霧は衝撃か風に当たったようにこちらには流れず、虫は形も残さず体液を撒き散らした。一瞬の決着、一撃必殺でもないただの打撃。ボールを蹴るよりも容易く、風船ほどの緩衝もなく、空気ほどの抵抗で、砂山のように無意味な感触のまま、蟻でも殺すようにいとも容易く、命を奪われた。自称吸血鬼の金髪美女風変態麗人が命を奪った。実に呆気なく、事態は収拾したのである。

「は？俺に聞くなよ」
適当にあしらう。眼が合わせられない状況、第二弾。
現実を直視したくない。虫が死んだとか命が失われたとか、そんなことを問題にしているわけではない。世の中は世知辛い。……あんな状況とはいえ、この男にキスをしてしまった。事実だ。変態に。電波に。吸血鬼に血を与えてまで。虫は倒されたのだからいい、とかそんなことじゃなかった。仕方ない、しかたない。
仕方なかった？ああ、そう、うん。仕方なかったのだろう。
けれどコイツはなぜこんなに元気なのだろう。心なしか最初に見たより血色が良い。死んだかと思ったのにこんなにぴんぴんしている。今にも儚く逝ってしまいそうな雰囲気で折れそうな身体が腕の中、胸の前に頭を落としたはずなのに。何故、元気なのだろう。確実に致命傷、良くて毒を受けたはずだ。血を飲んだからなのか、自称吸血鬼め。
「名前付けてー」
そしてこの会話。吸血鬼と名乗るこの男、名乗るくせに記憶はないという。結構ベターにヘビーな事情を話された。以前の記憶はない、自分の名も覚えていない。しかし自分は吸血鬼である。究極の矛盾である、そう思うだろ？

この場に封印されていたらしきことは自分でもわかるらしい。そして満月の夜には魔物が多くなることや必要な動作や契約方法などは覚えている、と。生活に必要な知識の部分だ。己で推察するにこの世に生きるのが飽きて眠ろうと安眠妨害のために封印を施し自ら永眠したのか、誰かに窮地に陥れられたかで魔力が減って封印されたか。とりあえず、今は寝ぼけていて何も覚えていない……ということだ。弁解は以上。

この男おかしい。これは夢だ。ここは俺の、標葉くんの夢世界でございます。あんな気持ち悪い生物はどこから精製したのかと思って自分に気持ち悪くなるが、とりあえず。

カワイソウ。こんなに凝った設定を作ってしまって。本当にカワイソウ。

「適当でいいからー。ねぇ標葉―」

「ウザイ」

切り捨てる。さっさと水源掘り出しに掛かろうぜ、俺！

なんとなく変わってきた目的。森の中をブラブラ歩く。この男、記憶が戻れば使えたかもしれないのに……、ただ付いてくるだけでうっとうしい。しかしまあ、魔物が現われたら任せよう。もうついてくるなとは言えない状況がだけに。

「もうっ認めなよ！契約しちゃったもんはしちゃったんだから、どこまでも付いてくんだからねー？」

はぁっ

「ユエね、ユエ。由来は今日が満月だから、月でユエね」

「――うん！ユエね、俺ユエ！」

湖面に映った月は銀色で、綺麗に輝いていた。だからかもも知れない。夜闇に笑顔を向けるのが何だか月が笑ったように見えて、月――と呼んでしまっていた。

バシャン！！

俺、また落ちるのか？

ドジなことをしたわけでもないのに水に落ち、底へと引っ張られるように落ち続ける。

閑話　平常日常（前書き）

学校生活。

閑話　平常日常

ということで、湖に落ちました。目が覚めましたらこんにちは。……なんてことにはならず、誰もいないシャワールームに立っていた。

うむ、鞄を持っている。制服も着ているようだった。夢での出来事を除外すれば最後の記憶によると俺は確か裸でいたはずだが？まあいい。裸の変態では困る。人もいないので見つかる心配はないが。

（あれは――夢か？）

夢というには現実味があり、しかも時間の経過が若干見られる。白昼夢。うん、そうだ。そうに違いない。……無理あるけど。

無理矢理に自己を納得させ、記憶を繋ぎ合わせて攀じ繰り回して、携帯をパカ開く。既に思考は日常へシフトだ。変態に会ったなんて嘘だ。気持ちの悪い生物が存在することも嘘だ。

『標葉―？どこにいるんだよ？』

『標葉のばか。一人で帰っちゃうなんてヒドイです』

そんなメールが二件、入っている。どうやら二人は俺が先に帰ってしまったと思っているらしい。いやいや、俺ここにいますからね。夜の学校になっていますけど。暗いシャワールーム。裸足の足が森を歩いた足を流す。

液晶画面に刻まれた時間は9時だった。香寿や豊とともにこのシャワー室に入ったのは遅くても6時。まだ部活のやっている時間だし、授業終了して駄弁ってる生徒も少なくなかった。当然の如く空は夜の装丁、暗闇が広がっていた。但し、夢とは違い星やビル灯りに照らされた暗闇なので視界には不自由しない。森とは違う。

俺の当面の問題。

（こっからどうやってでりゃいいの……？）

当然の如く施錠された学内校舎。しかたないので窓ガラスぐらいは学校側に勘弁してもらおう。面倒くさがりで執着心が薄く、無関心

生活を送る毎日な俺ですが意外と行動派な面もあります。運動とか死ぬほど嫌いだけど。妙に身体能力が向上しているな、と思いつつ外に出た。
そういやあの夢では珍しく体力使った。キャラじゃないな、と思いながら都内の空を眺める。ぶっちゃけ星なんて見えない。

一日は終わる。長い、一日。夜。
そして一日は始まる。長いようで短い、朝。

「はよー。標葉。よくも昨日は逃げてくれたな？」
「標葉、奢りって言ったでしょ。貸し二つですからね……」
食べ物の恨みは強かった。何せ教室について一番初めに交わした会話、特に香寿なんて直接的過ぎる。豊はアイスを奢ったのだろうか。香寿からは標葉への要求だったので貸しを追加されてしまったわけだけれど。根が大和撫子のように遠慮深い奥ゆかしい香寿は断っただろうけれど、あれだ「俺が奢りたいと思ったから」とか豊なら言ってそうだ、なんてキザ。……そしてこれは標葉の予測どおり当たっていたのだった。
で、昨日の俺のことを直接聞くには不審すぎるので質問しないことにした。やっぱり、下手に聞いても逆に聞きたくなるので。というかあれはＹＵＭＥ！！
「でも役得だったろ？」
ぎくっ！っていうぐらいに身体を硬直させる二人。が、互いに気付いてない。互いに気まずく視線を逸らしている。答えもない。何でだろ、と不思議に思うくらいに不自然だ
共学だがこの学校は何故か同性同士でくっつく確立が多い。生徒手帳にも校内での不純異性同性交遊は禁止と書かれているほどだ。それに関して思うところがないといったら嘘だが俺には関係ないと思

ってる。友人である二人がそうゆう関係になっても変わらないと思ってる。だから応援しているぐらいだ。
昨日は俺が一人先に帰ったと思っていたのだから、残された二人は一緒にいたはずだ。家の方向が同じなのは俺と豊だが、夕方の暗い時間帯では香寿を一人で帰らせることもないだろう。豊の性格からして確実に家まで送っている。
（……わけがわからないな、二人の反応は）
そんなふうに思いつつも追求することもせず、さっさと授業の準備を始める。もうすぐ担任が来るだろう。……俺は優等生ではないが、何もない限りは反抗期っぽく授業妨害や抜け出すなんてしない。ヤンキーでないので朝からサボるなんてことを日常的にしているわけでもない。いたってマジメに学生生活をしているのです。（昨日はちょっと頭が痛い子になっていただけなんだ、忘れ物だってしないように毎夜次の日の支度をしてから就寝するいい子ちゃんです）

キンコンカンコーン

鐘は鳴る。昼には屋上に上り出て、三人で囲むように座って手作り弁当を披露して、香寿に料理を口頭伝授してやって、スーパーオカンな豊に休日の料理教室、個人レッスンを香寿につけることを約束させて、後は寝てた。二人は話してたけど、俺は寝たフリ。午後の授業もきちんと出まして、委員会だという香寿に護衛の豊をプレゼントフォーユーして俺はさっさと帰る。
昨日よりマシとはいえ外はまだ暑かった。それでも鬼門のシャワールームには寄らない。うん、何の変哲もない。日常だ。非日常と言われるような部分は何もない。指摘されて困ることもないだろう。そう思って帰り道を若干るんるん気分で歩く。暑いのは変わらないんだけどな。
「あ、あの……」

（日常というものはすぐさま崩れ去るものである）
まあ、俺にはそんな非日常歓迎！みたいな性質も何もないので日常を退屈ながら過ごすのだが。ああ、昨日の夢はそこから来たフラストレーションというものだったのだろうか。
「あのっ！！」
うむ、悩む。いくら刺激が欲しいからと言ってあんなエキセントリックな夢を見てしまう自分は大丈夫だろうか。ゲームのやり過ぎ？
「事実は小説より奇なり」という言葉はある。けれど、それを体験したことがないのも事実だった。でもさ、実際に起きてしまうと引く。完全に、絶対に、受け入れられない。だってさ、俺は平凡だよ？何かあっても何も出来ないじゃん。ただお荷物になるよ、絶対。勇者とか、無理。多少喧嘩はできる。武道も竹刀なら握ったことがある。自己防衛に合気道やら空手やらを習ったのは随分昔、６年も前。俺がまだちっちゃく可愛かった時。
「聞いてくださいっ」
何故か破門にされたんだよね。そんなに長い間やっていたわけでもなく、誰かと喧嘩したとかでもなく、ただ試合は仲間内でよくやっていて、それには参加していた程度だ。急に「もう教えることはない」とか来ないでくれーってオーラを出されて困った。行きづらいし、何故だかもわからなかったから。そんなことがあってそれらはすべて止めてしまった。だからスポーツなんてしてない。学校で運動部に入ろうかと思ったが、勧誘がいっぱい来たりして。歓迎してくれるの嬉しいけど暑苦しいし、期待がかかってるようで、俺そんなできませんって言って断念。ほら、スポーツ一本でこの先やっていくつもりがあるなら別だけど、お遊びの暇つぶし程度なら入ってもさ、チームプレイとか苦手だし。
「うぅ……っ」
女の子が逃げ帰った。いや、さっきから視界の端に引っ掛かってた女の子二人組みがいたんだよね。で、誰かに何かを話そうとして訴えかけてたんだけど、そいつは返事してもあげなかったらしくて、

何度も声かけられてた。適当にあしらわれてるようで可哀想だな、と思う。何故そんな冷酷漢を好きになったんだか果てしなく疑問になるね。女の子は結局告白も出来ずに玉砕。泣いて逃げ帰ってしまった。ああ、ファイト！とでも影から応援しておけばよかっただろうか。

（ん？何故か視線が俺に集まっているような）

周囲には帰宅する生徒がまだ大勢いる。この道はまだ分かれ道もないので生徒の半分以上が使用しているのだ。香寿の家は方向が違うとはいえ、まだまだ先の交差点で分かれる。卿はいないんだけどね、他の生徒もそこで分断されることが多かったりする。だからそれまではこの状態。でもなぜこんなに俺に注目が集まってるのだろう。何か悪いことしたかな？

標葉は声をかけられていたことも気付かず、周囲の視線を気にすることもなく、足早でもない普通のスピードで帰宅の道を歩いていった。首は傾げながら。

水溜りだ。発見した。

昨日は雨は降らなかった。けれどここは濡れている。水がまかれたのだろう。夏でもないのに打ち水だ。なんと古風な家なのだろう。それはお隣さんだった。

気にせず、標葉は進む。

《逃げて……》

びしゃ。

標葉は水溜りを踏んでいた。

第二夜　夢と現の境目（前書き）

サブタイトル：勇者に襲われました。
美少女登場！！でも変態。ダブル変態。
でも今回ユエは控えめなのです……。というか彼女が強い！
てなわけで。

第二夜　夢と現の境目

「ってあれ？」
予兆もなく変わった視界。落ちる感覚。一瞬の浮遊感。次の瞬間、足には地面の感触がちゃんとあった。というか衝撃を受けた。
（これって落とし穴か何かか？）
「はあああああああ――――！！！」
「はぁ？」
気合の入った声が後ろから聞え、振り返る。
（っとぉおおおお！？）
身体は状況の認識できない頭を置いて防御動作を行う。到底、それだけでは防ぎきれるような斬戟ではなかったが、腕を顔と胴の間の高さに掲げ、衝撃に対応するように腰を低く下げた。
「っっっっ！！！！！」
吹っ飛ばされる感覚。身体が後ろへ、重力へ引かれるように、けれど横からの力は圧倒的な暴力でしかなかった。

「ぐがぁっ　はっ……！！！」
背後の木にぶつかり、折れる。ぶつかり、折れる。その繰り返し。

「すいませーん。大丈夫っすかぁー？」
のんきな声。野球のボールが金網を越えて飛んできてしまった時やサッカーボールがコントロールを外れて転がってきてしまった時のような具合だ。部活、遊び。そんな程度で済まされるはずもないのに。彼女はそんな調子でやってきた。
（これが大丈夫に見えるかってんだっ！！！）
てか俺、何で無事なの？
木が何本も折れる衝撃にぶつかって、それでも生きてる。俺、生きてる！！軽く感動。

（神様サイコーとか言わないですから。めちゃくちゃ俺チートじゃね？これって超人級……）
つまり、俺最強。
で、暢気に明るい声は女の子のものだ。つまり攻撃を放った本人強っ！でも俺の方が強くね？ろくに防御もせずに防備はピラピラの普通制服で受けきったぜ？
……いや、制服すげー。防御力強いじゃん。まったく切れてなーい。うちの学校、特殊繊維で編みこんでる制服支給してるとか、そんな系ですか。どこの傭兵学校だよ、軍事施設だよ、的な服だなぁ、おい。
「すいませーん、聞いてるっすか？おにーさぁん」
おにいさん呼びに胸キュン。そんな軽い症状でもないんだけど、俺。だって手足痺れて、足腰立たない。その様子に、木の根元に瀬を預けてへたり込む標葉へ前屈み、手を差し出した。
（おおぅ……）
標葉は視界の暴力を受けた。特殊攻撃に精神的ダメージ１００、攻撃力が４０上がった。体力が２０上がった。やべぇ、これ夢！？現実ならこれがリア充かっ！
まぁ、胸の谷間がこんにちわしてたんだけどね。昨日まったく同じ始まりの夢を見たばかりだった。昨日は頭暴走し気持ち悪いのと美人だけど関わるのは遠慮したい感じの人に会うグロテスクな夢を見たが今日は違う意味で暴走だ。
都合がいい。これは完璧なフラグだ。回収せねばなるまい。中学生ぐらいの年の少女だがその谷間は深い。一房落ちた長い髪が余計に大きさを強調している。何気にポニテなのが男心を擽る。ああ鼻血は出さないようにしなきゃ。でもさ、まず言わなきゃいけないことがあるよ。
「パンツ見えてるよ？」
きょとん。ハテナを浮かべられた。いやいやいや、俺こそハテナだよ。何だよその反応。

「隠すとか、ないの？」
取り敢えず聞いてみた。
「いいっすよー別に。勝負パンツなんで」
ほら、とスカートを上げて主張された。
（……なんだ痴女か）
またもや俺は夢の旅で変態を見つけてしまったらしい。
いやしかし、見事なものだ。すらりとした足が白くもち肌、肌理細やかで、黒の総レースなパンツを穿いてる。ぶっちゃけ色気むんむんだった。ヤバイてんしょん上がる！
「戦闘時に気にしてらんないっすよ。いつでも勝負パンツっす」
言ってスカートが下ろされる。残念だった。手を取って立ち上がっとく。
「ちなみに赤か黒っす」
（まじ……？）
沈み掛けたテンションが急上昇した。
「明日は真っ赤な紐パンっす」
うわっまじ見てぇ！
（……あれ、なんで俺明日の下着予告されてんの）
　美少女は変態でも強かった。女性は強かだ。他にも「透け透けなのは好きじゃないっすー。あの、下着という隠す意味を真逆から否定した感がどうしてもダメっす。」なんて言ってくれる。恥ずかしい、という理由でないところが痴女らしい。俺個人では子供っぽいイチゴパンツがいいと思うんだが…定番過ぎるか？
　とりあえず、場を繕う。コホンという堰はたたせず、話を逸らした。
「いきなり攻撃とか、なくない？てか心配それだけかよ」
　いつものツンデレで対応。心理は早鐘打ってますけどね。だって美少女なんだもん。少女に覗き込まれる。距離が近い。息がかかるほどだ、後３ｃｍもない。
「お兄さんが急に目の前に出てくるから悪いんすよ？」

初対面で責任転換された！！……ちょっとびっくりだ。
しかし、年下らしき女の子に助け起こされる俺って……。と思うが彼女、見た目によらず力が強い。攻撃も強いし。
てか何あの攻撃。刃が直接当たったわけでもないのに攻撃来たよ。衝撃波？視覚化されてたし、周囲も風が巻き起こって嵐の後みたいな風景になってんですけど。地形変えるか、ふつー。
「てか運わるいっすねー。超タイミング悪いっす」
やばい、ふつうーじゃないんだった、ここ。女の子も常識無い。
可愛くとも痴女の変態だった。頭のねじも随分緩んでいる。死ぬかと思った体験だったぞ、あれは。それをタイミング悪いだけですませるなよ。溜息つきたくなるわ。
「何、初対面でそんな言う人初めてなんだけど。失礼じゃね？」
てか、俺が常識無いのか？これ俺の夢だし。やっぱし森だし夜だし。
「うちはいっつもこの時間、ここで素振りしてるんすよー？最後だけ魔力込めてるから、他の時は大丈夫だったのにぃ」
「魔力？」
電波の森か、ここは。今度は魔力と来たか……。しかし、この少女の力は一概に否定できるものではなかった。俺が受け止められた、ということだけでスケールを小さくすることはできない。何故ならその影響は列記とした残痕として周囲に散らばっている。風圧になぎ倒された木々、抉れた地面。形のない斬撃は俺にぶつかって尚、威力を失わず体を吹っ飛ばした。普通の少女（じゃないかもしれないが）には出来ない力技だ。あの細腕からは想像もできない。
「このブレスレットで制御してましてー。てかお兄さん、ほんと何でこんなとこにいるんすか。振って沸いたような感じでしたけど」
「こんなとこって……」
改めて見ればそこは森だった。いや、確認する前から分かってたけど。
そんな疑問をされても分からない。ここがどこだかもわからないのに俺は答えを持ち得ない。分かるのは今までいた場所と違うとい

うこと。俺は何故こんなところにいるか、それは俺が聞きたい。深刻に冷静に現実に、そしてとても真摯に――疑問だ。懐疑する、己を。

夢だし。いや、本当に夢か？現実なんてこんなもんだとでもいうのだろうか。それとも南下の影響で異世界？いやいやいや、だって今まで通りの現実世界を俺は生活している。

「答えにしちゃー……容赦しないから」

口調の変わった彼女に眉を寄せれば、後ろに引かれる感覚。抱き寄せられた。

「だめだよ。俺がゆるさないから、あっち行って」

聞き覚えがある。前、夢の中に出てきた吸血鬼がこんな声だった。

ああ、やっぱし昨日のアレとこれは変わることもなく同じ法則の同じモノなのだ。変態という共通点でなく、超次元という部分で納得する。

「お兄さんの何？あんた」

「標葉は契約者。餌。恋人。そして主かな」

大丈夫？と笑いかけられる。見覚えのある人物、自称吸血鬼。美人な電波さん。嘘つきで変態な麗人。強いのベクトルが人間の域を越えて振られた超人。俺の、契約者。

「勝手に名を呼ぶな、変態」

勝手に詰めていた息が正常に戻ってくる。平常に日常に、感覚が慣れていく気がした。こんな非日常が日常へと変わっていく。これが、世界。もう一つの、俺の現実（リアル）。

いきなり雰囲気の変わった少女に緊張して、でも知っている者の声を聞き、体温を感じて、鼓動が脈打っている。変だ、吸血鬼なのに、心臓が動いてる。それに俺も変だ。吸血鬼なんかに、変態に、昨日あったばかりの人物に、安心した気がした。

（ユエ――名前を、つけたから？それとも記憶がないというのを信じて？）

自分への疑問が浮んでもその答えを何一つ持たない。

「そうっすかー契約してんなら危険はないっすねー」
「おい、お前も早々に諦めてんじゃねぇ」
置いていかれる会話、突っ込みを入れることで早くも馴染み始めた自分を自覚する。けれど、確実に違う。俺が俺でない世界。
溺愛気味の超人家族がいて、学校に通って、二人と会話して、恋を応援して、何故か周囲に遠巻きにされてて、冷静で無関心な奴だと勘違いされていて、……そんな日常平常。
けれどここはそうではない。自分が壊されて、でも新しく生まれた。
「お前じゃないっすよ。カレルっす。勇者ですよー。これ名刺っす。以後よろしくー」
「勇者って……」
どこのＲＰＧ？ていうか吸血鬼に勇者に魔力って。
（疲れてるんだなー俺。絶対そうだよ、１０月終わりの暑さにバテバテだし）
そんな信じたくないと思う常識に存在する自分と、これが夢だとは到底思えない自分。痛みを感じ、会ったことのない人物に会って……これは新しい何かだ。命。生きている。鼓動が刻まれている。決してニセモノなんかじゃない。夢であっても、異世界であっても、命は命でしかないに決まってる。尊く、儚く、強くて弱い、大切なもの。
「俺は俺はー？」
「暑苦しい」
ここがどこか、どんな世界か。それはまだ答えはない、けれど
（男が抱きついてくるのはキモイし暑い。暑苦しい。それは世界共通だ！）
「構ってよ。俺、せっかく駆けつけたのにー」
「間に合ってねぇよ。攻撃受けたんだけど」
ぜんっぜん、間に合ってない。いや、得点映像は見たが、いやしかし、うーん。

「いいじゃん、身体強化の影響でダメージゼロでしょ？」
「ゼロじゃねぇよ。全くもって」
（超いた……くはなかった。うん、衝撃波あったけど）
アレ。あれれれれ？本当に人間超えた？
ちなみに吸血鬼は痛みがあるようで（自称）、血が流れていたんだ、あの時は。森の中での一撃。傍から見れば吸血鬼は即死状態。それは不死身ということだろうか。
不死身でも痛みはある。それは他の人が一度だけですむ瀕死・必死の痛みを何度も受けられることに変わりない。痛みが身体に走っても、生きてしまう。地獄の連鎖を続けてしまう。内側から腐る。精神から病む。心が、死ぬ。けれど身体は。死にたくなっても死ねない。生き続けなければならない。死に続けなければならない。
ＲＰＧだけど。ファンタジーだけど。小説だけど。仮想だけど。ニセモノだけど。夢だけど。……それでも、そんな裏側がある。辛い事情がある。
いや、こいつにはないだろ。そんな暗くて闇っぽいの。だって変態だし。
「お兄さんたち仲良しっすねー。妬いちゃいそうっすー」
「仲良くねえだろ、完全に」
ツッコミを入れた。というか何、その口調だけのテンション。ローなんだけど。全然羨ましがって見えないんだけど。
「イチャラブしたいから君あっち行ってよー。標葉が照れるじゃん」
それもかわいいけどー。とか言い始めたユエを蹴りつける。軽いなコイツ。そして俺はユエ（男）とイチャラブなんぞしたくない。何、そのバカップル発言。いつどうやってそうなったの。俺は可愛い女の子と仲良くしたいぞ。例えそれが痴女でも、ただの変態男よりいい。……ユエの容姿はいいけど、男だし、うん、迷ったりなんかしないから、全く。
「まず、自己紹介だけでもしようよ、俺ら」
そうして俺は美少女の名前をゲットした。カレルちゃん。

「近くの町まで案内よろしく頼める？」
自分の意思でここにいるカレルならば大丈夫だろう、と当たりをつけたのかユエが聞く。
「いいっすよー。宿割り勘でいいんならいいっすよー」
「えー？俺持ってないし」
当然だった。この世界の通貨はなんだかすら知らない。というか夢だと思ってたし、二度目だよ？知るわけないじゃん。ここの住人であるユエだって何百年も眠っていて知識なんて吹っ飛んでるか古いかで使えない。つまり、詳しいのはこのパーティーではカレルだけだ。
知り合ってまだ数十分の彼女にたかるのは申し訳ないんだが、いいだろ、別に。カレルだし。勇者らしいし。金はなさそうに見える。
「それは俺が持ってるからだいじょーぶ。旅の資金ぐらいは用意してたから～」
どうやら偶然できたパートナーは優秀らしい。
「旅？お二人は旅してるんすか？」
「まぁ……そうなる、かな」
曖昧に答えてあはは、と枯れ気味に笑う。カレルはそれを気にとめた様子もなく、「そうっすかー」と納得してしまった。「旅は長いんすか？」「どこから来たんだすか？」「何か面白いこととかあったっすか？」などと矢継ぎ早に質問される。それには俺ばかりでなくユエも苦笑した。
「話は歩きながらにしよう」

「じゃあ、れっつごーっす！」
「う、うわぁ……っ！ひ、引っ張るなっ！」
おー！と拳を突き上げるカレル。もう一方の手では標葉の腕を掴んで、ずんずんと歩き出した。山を下るのだ。
（ま、ましゅまろ……）

「マシュマロ？標葉は好き何すか？」
どうやら口に出してしまっていたらしい。その意味までは読み取られていないようで安心した。
標葉が動揺しドモリまでしたのにはわけがある。それはカレルがやっぱり乙女としての恥じらいを持っていたら気付いただろうに、やはり彼女は変態だった。
「白くて柔らかいお菓子っすよねー。うちも甘くて大好きっすよー。」
ヨダレがでるっすー。とか言いながら身体を寄せてくるカレル。ぎゅうぎゅうと腕に押し付けられている感触は消えない。
（う、うれしいが隣からの視線が痛い、ような気がする）
ちら、と見上げれば不機嫌な顔をしているユエ。美形からの睨みは怖い。しかし、それが向けられているのは俺ではない。それには良かった、と思いもするが、状況は果てしなく標葉を困らせたいらしい。ユエは行動に移った。
（ってアレ、気付いたわけじゃ、ないんだ）
俺がカレルにしがみつく様に密着されて鼻の下をだらしなく伸ばしている、ということに対して機嫌を斜めにしていたわけではないらしい。いや、それもあるかと思われるが、ユエは標葉のもう一方の手を掴み、繋いだ。それで落ち着いた。俺も、ユエの身体から（何故か）する薔薇の香りに心落ち着いた。
単に手を繋ぎたかったらしい。単なる嫉妬。侮蔑の視線が向けられたわけじゃないことに安堵。……両手に華？うん、それは認める。だって傍から見れば美女と美少女に引っ張られている。皆に殺気の視線を向けられる前に「ユエはなー、男なんだよ」と、誰かに主張したい。けれど未だ現在地は山中。他に人もいない。誰にも言えなかった。くすん。
ていうかさ、絶対カレルの感覚が可笑しい。だって、勇者って言うわりに警戒心薄いし、服も薄い（軽装備）。
「なあ、カレルってその格好趣味？」

「ん？なんか変っすか？うちは気に入ってるんすけど」
「戦いに向かない、よな」
改めてみるカレルの格好はひだの付いた短いスカートに袖のない上着。靴下は絶対領域というものを狙っているだろう長さ。それだけなら軽装ながらシンプルで動きやすいと納得できるがフリルやリボンがふんだんに使われた装飾。それはゴスロリとか言われる服装だった。
ご丁寧に髪を結わくリボンまでもフリルが使われており、赤と黒の色彩に白い甲冑など所々にあり、似合っているといえば似合っているのだが。
「標葉は女心がわかってないっすねー。うちは勇者である前に女の子っすよ？オシャレぐらいするっす！」
（オシャレ……）
それでいいのか、勇者。防御や攻撃重視しないで、戦闘のスペシャリストって言えるのか？言えるだろう。声に出す前に自分で納得してしまった。
いやだって、防御中心にしたらどうしたって素早さが下がるし。ポ〇モン（ゲーム）で素早さは戦闘の順番の他、大きく関わることはないが実際の戦闘において俊敏さは一番重要となってくる。敵の攻撃が当たらない速度で回避すれば、決して負けない。いくら防御力や攻撃力に欠けていても勝負は決する。速度は大きく天秤を傾ける要素だ。
カレルがそれに当てはまるかどうかは知らないが。少なくとも、攻撃力は異常なものだった。剣を一回振るのみで。それにこの世界では魔力も大きく戦闘に関わるものだ。そして勇者であるからには何かに優れているだろう、カレルは多分魔力が大きいのだろう。魔力制御をブレスレットに頼るぐらいだから。小説なんかでは魔力は濃度とかあったりして高密度になれば視覚化できるとか、物理攻撃に対しても壁になるとか。……うん？防御力要らないんじゃないか、魔力あれば。魔力の応用はいくらでもできると見た！魔法とかあん

のかな？それとも魔術？
　柔らかな感触に意識を向けないよう、無心に、いや考え事に集中していればどうやら町に着いた。取り敢えず、夜も更けているので宿屋に行く。
　気前のいい宿のおっちゃんはこんな時間でも怪しげな三人に部屋を貸してくれるようだ。ちなみに、言葉を繰り返したり何かのイベントに関わったりするようなゲームキャラでもない実在の人物だった。
「じゃ、うちは明日発ちますけど、標葉たちはどうするんすか？」
「特に決めてないからなー」
　何泊、というところには空欄を埋めといた。何も埋まってないんだけどさ。明かりのともった暗くもない廊下を歩く。本当は人が眠ってるかもしれないから余り会話はしないほうがいいと思っていたんだが、……おっちゃんはただの商売魂だった。「最近はどこも商売上がったりだよ」が口癖だということを早くも発見してしまった。それはアピールか？
「うーん。……ねぇ、勇者だしカレルちゃんも旅してるんしょ？」
　標葉はまたもや会話に置いてきぼりにされた。というか、俺って旅してたっけ？してないよな、昨日来て、帰って、今日も似たようなところに来て、……発生って感じが正しかった。あれ、また朝になったら俺帰るんじゃね？
「そうっすよー？次は西のおっきな街に行きたいっすけど。うち、行ったとこない場所は基本、迷子っす」
　迷子！？危ない奴だな、コイツ。それでどうして旅が出来ているんだろう。
「じゃあ、ちょうどいいんじゃないかな？一ヶ月程掛かるだろうし」
　急に振られた。えっと……余り詳しく聞いてなかったというか、サラリと耳を通っていったというか、それよりもこの現状がどうなっているのかの究明が先なんじゃないか？とか……。
「そうだな。カレル、次の街には一緒に行かないか？用心棒お願い

するよ」
標葉は言った。当たり障りのない言葉で、ユエの言いたかったことを。けれど、
（スイマセン。何にも分からないまま相槌打ちました）
何の疑問も挟めずに疑問は疑問のままにしてしまった。
「？いいっすけど……」
「吸血鬼は満月の日以外はただの強弱体質だから」
えへへー。とユエは笑う。
（こいつ、言い切った。言い切りやがった！）
臆面もなく、「頼りにしてますよー勇者さん」とか自分を討伐しようとした相手に弱点暴露してやがる。あーこいつらの感覚に俺はついていけない。

そしてこの日、眠りにつく。
そして次の日、目が覚めた。

「あれ、宿じゃん」
わけのわからない世界。夢なのか現実なのか異世界なのか。
疑問は尽きないまま、標葉は帰れなくなったとさ。

謝罪とお詫び

謝罪とお詫び

ながらく休載していて申し訳ありません。

私事の方がいろいろ立て込んでいた故、遅れましたことを謝罪します。

ごめんなさい。

長々、しみじみしても、あれなんで。下記より　←

――――ダイジェスト！！

進学校に通うお標(しん)ちゃんは放課後友だちと雑談中に一人異世界へ召喚された！

勇者になって世界をお救いください！そうしたらこの国の半分を

さしあげます……なんて勇者になるべく召喚されたはずなのに、目が覚めたのは森の中。どういうこと？と首を傾げる彼女に近づく不審な影――美麗なる吸血鬼登場！

しかしてその目的は！？宇宙から電波を受け取る彼、いや彼女はお標ちゃんの純潔を奪うべく現れた男装のエロエロ魔人だった。

「よいではないか、よいではないか」「あーれー！」と言う間に服をひん剥かれて乗りかかられ、その唇を奪われんかというその時、

「待たれい！」と声が響き渡る。

「我は勇者なり！」

勇者なるその男は顔面が赤く染まっていた。まるで辱めでも受けたように、まるで恥ずかしがるように、まるで激昂するかのように、その顔を赤く火照らせ、――血に濡らしていた。

「人を襲いやがっているのは貴様だな！人外め、覚悟ッ」

ずかずかと歩み寄ると男は指をさす、お標ちゃんに。

「え？私？討伐されちゃうの？」

ぶふぉおあ！！

聞き返した途端に異様な音が出た。勇者の口から。

――いや、鼻、なのか？

「おのれ！姑息な奴め！我にまでその力を及ぼすかッ！しかし、我は未だ負けてはいない！立っている！」

鼻から血をだらだらと流し、荒い息で男は指を指した、お標ちゃんの胸に向かって。

「……確かに、違う所が立っているようだな、勇者」

吸血鬼の目線は勇者の下半身。盛り上がるそこを侮蔑の視線で指摘する。

しかし、勇者の耳にそれは届かない。勇者の意識にあるのはどこまでもお標ちゃんだった。視線は彼女に釘付けである。いや、その晒された肢体に、胸に。

――そう、お標ちゃんは吸血鬼の麗人に服をひん剥かれ、その身

体を月の灯りの下に晒していた。背に壁のある状態、追い込まれた姿勢である。その白い足には吸血鬼の足が絡まり、その胸には吸血鬼の手が揉み解すように掴んでいる。下半身も下着が脱げかけていた。そんな状態で、勇者の登場に硬直していたのだった。

吸血鬼は台詞を放つとともにお標ちゃんから離れていく。そうすると段々と陰になって隠れていた部分までもが月明かりの下に明らかとなって艶かしい姿が晒される。

「きゃっ」

その現状を今更ながらに恥ずかしく、自覚したお標ちゃんは身体を隠そうとする。その豊満なる胸が両腕に挟まれ、男の前で盛り上がる。それが、男の理性を壊すことだとも知らず、無垢なるお標ちゃんは胸をぎゅうぎゅうと押し、深い谷間を造る。

――ぷすっ

柔らかく白い胸に指を突き刺されてお標ちゃんは身を捩らせた。

「いやん！」

そうして、お標ちゃんは快楽の待ち受けるこの夜に身を震わすのだった。

おまけ

「私は記憶を失っているんだよ。けれど、女の子が好きなことだけは覚えてる。さぁ、今こそ愛の逃避行をしよう！と、その前に私の名前を決めてくれるかな」

「我は勇者失格だろうか。こんなにも誘惑に負けて、どこが勇者といえよう……」

そうしてお標ちゃんは変なテンションのエロエロ男装麗人と勇者という名の変態を仲間にした。魔王退治が目的らしきお標ちゃんの旅は今ここに始まる――。

閑話　その関係性（前書き）

三人の日常、第二弾。
新しい人が出てきます。というか、毎話の如く新しい人が出るんです。
テーマは出会いですから。
今回は”恋愛”中心！豊と香寿ですけどねっ！

閑話　その関係性

なんて傍迷惑な白昼夢だ。しかし、これは一体どういうことなんだろうな？
眠っていたつもりもないのに二日連続で同じ夢を見た。異世界なんてテンプレではない、と夢の中の住人が主張していたが、実際の世界ではないだろう、あれは。
つまり、夢。うん、夢だ。
リアルな夢だ。現実感ありまくりで本当に勘違いしそうなのだが、それを真実にしてしまうととってーも嫌な体験記憶まで実際のものとなってしまう。ゴスロリ美少女の勇者と知り合いになるなんて、多少電波だったとしても嬉しいフラグだ。しかし、美女に見える美青年麗人との契約だとか吸血鬼だとかキスだとか、グチャグチャと気持ち悪いうげぇーな魔物だかと戦うとか、そんなフラグいらないって。何度も言うけど、電波だ。
……あれ、俺が電波なのか？こんなん夢に見ちゃってる俺が電波？だって現実じゃないだろ、この21世紀にないって。異世界っていうには毎回毎回、帰ってきてるし。現実世界で時間が進んでるんだよな。なのにあそこは夜だ。コッチが朝でも夜でも関係なく夜だ。つまり、夢。うん、これ決定。認定。
「標葉？」
「どうしたんだよ、そんな難しい顔して」
「いや……なんでもない。最近、夢見が悪くて」
標葉に不安の問いかけをする香寿、ちゃかすように笑ってみせる豊。この二人が友だちで、彼らのいる場所が標葉にとって失くすことのできない日常だった。大切な人なら、他にも家族とかがいるけれど、あれは日常とはちょっと違う次元の人たちだ。いろいろ、輝きまくってるからな。……若干、腐女ってるけど。いい友達持ったな、俺！

「なんだよ、いつも寝てるくせに」
「それならばこの際に授業中など寝るのを控えたらどうですか？たまには自分でノート取ってくださいよ」
「……うん、寝るのは、控えようかな」
呆れたように言う二人に素直に頷けば逆に驚かれる。
　実はさ、昨日夢は驚いたんだよな。夢だ、夢だ、っていいながらも現実じゃないかと危ぶんでいた。だからこそ、シャワー室で落ちて、吸血鬼と化け物を見て、湖に落ちて、夜になっていて、朝が来て、いつもどおりなのに――水溜りで落ちて、勇者な美少女と会って、宿で寝て
……目が覚めても宿だった。
意味が分からなかった。この日常がなくなってしまったのではないかと思った一瞬だった。
戻れないかと思って、思わずユエに状況説明しろ！と激昂してきたんだ。いや、悪かったな振り返ってみて、すぐ気付いたよ……あの夢の出入りは水が関係してるってこと。
　そうとなれば服を着たまま風呂場に駆け込んだ。あわよくば戻れたとしても学校は遅刻だってわかってたからな。
「標葉、本当に大丈夫？」
　その言葉で現実に帰る。
　ああいや、このことばでは再びあの白昼夢の世界にいるようではないか。
「何か、……」
　言おうとして、言葉が続かなかった。とても説明できるようなものではなかった。標葉とて、はっきりと現状を理解しているわけではない。
標葉は態度で否定を表してから、改めて言った。

「すぐ解決するかもしれないから。続くようなら、言う」
「そっか」
「うん」
そんな二人のことを少し羨ましく思う。
「……」
香寿は二人の雰囲気にただ、押し黙った。
二人は幼馴染だ。例え三人で行動することが多くても、香寿は二人の過去を知らない。高校からの友だちだ。家も隣町であり、帰り道も違う。放課後に一緒に帰って、遊ぶことがあったとしても二人との差は埋まらない。
「ほら！標葉が遅刻してくるからもうお昼なんですよっ？さっさか食べちゃいましょう、売店に買ってきますから、何がいいですか？」
「牛乳、チョココロネ」
標葉は即答する。それは好物だ。迷いはなく、否定は許さないと訴える声音。しかし、それに感情は含まれず、平然平静とした無色でもあった。
いつも同じなので豊や香寿も好物なのだと判断するのだけれど。むしろ、好きかは別として、食べる。嫌いなものではないのだろう。他は食を悩む判断材料にも満たないということ。
「標葉、糖尿病の前に虫歯になるぞ」
返る言葉はない。既にその体勢は寝る様子。屋上のポカポカと陽に照らされるコンクリートに横たわる。吹きさらしなはずのそこは毎日の掃除の担当区域に含まれるのでいつも気合が入って綺麗にされているのだ。心置きなく寝られるというもの。三人の定位置だった。
「はぁ……っ。香寿、俺も行くよ」
「――」
豊は声をかけるが、それに香寿はぼんやりとした反応を返すだけだった。その瞳は振り返った豊ではなく、寝転がった標葉を捉え、じっと、何を言うでもなく見ている。どこか虚ろに感じて豊はもう

一度声をかけた。
「香寿？行くぞ？」
「へ？……ああ、大丈夫です。僕一人でも」
まだ、４時限が終わるまで少しありますから。
そう言って一人で行ってしまうのに豊は違和感を覚えた。今の様子はただ事ではない。悩みがあるのならば何か言って欲しい、と思うのだがそれをはっきりと口に出すには豊には香寿に対して持つ秘密が多くあった。つまり、下心。
「豊……」
「ん？」
小さく、けれど確かな意味を持った標葉の呼びかけに対し声を返せばムッスリと顔を向けられる。そして告げられたのは
「馬鹿」
「へ？なんだよ、急に。お前に言われたかねぇよ」
豊も大概鈍いものだ、と標葉は思った。
今の香寿の態度に対して何か思うところがあるのならば、それをはっきり伝えてしまえばいい、と心の機敏に鈍い標葉は思う。複雑な男心も秋の天候のように変わりやすい女心も知らない。だからこそ、素直になればいいじゃないか、と標葉は単純に思う。実際、そうなってしまえば二人の関係性というものはあっさりと落ち着くのだけれど、それがままならないのが人というものである。
「俺は頭良いだろ、補修は単位数の問題だ。てか、鈍感じゃない」
「は？それこそ、お前、自覚なしだろ。お前ほど鈍くないぞ、俺」
互いに互いを鈍いと言う。心の機敏に鈍い標葉と恋愛に疎い豊。どちらも鈍いのには変わりなく、こんなところでそれを言い合っても他に第三者も誰も居ないこの場では詮無き事だった。
「今日、何曜日だ？」
「水曜に決まって……！？やばっ――」
やっと気づいたかのように豊は慌てる。標葉が気づいたというのに豊が気づかなかった。

「さっさと追いかけろ」
ヒュッ！
日差しに反射して銀色の硬貨が輝く。
「渡しておいて」
「すまん！！」
バタン！
慌しく鉛色の扉が閉まり、標葉は視線を空へと戻した。
眺める空は透き通るような蒼さ。余りにも曖昧な雲が遠く、急ぎ足で標葉たち人間を過ぎ去る。向かう先はどこまでも果てしない。無限に回り続ける。けれど地は変形して、色んな地を巡るのだろう。異世界のようなあの夢の世界が現実というのなら、彼らは知っているのかもしれない。その眼下に見下ろしたことがあるのかもしれない。
「かくも人とは己に疎いものだ」

＊＊＊

「香寿！！」
豊は標葉から預かった昼飯代を持って香寿に声をかけた。混雑する中でそれは随分と目立つ行動となってしまったが。
「え――？ゆ、たか……何で」
「あ、いや……ほら、金預かってきたし」
急場凌ぎながらきちんと返答が出来た。随分怪しげな理由だったが。
「ああ……後ででも良かったのに。それに、標葉を一人にしちゃって良かったの？」
それは皮肉のように感じてならない。香寿を一人にしてしまったという罪悪感からか、どこかいつも違うように思える。ニュアンスがはっきりとした悪意。香寿がそんなことを思っているわけがない。

素直に標葉を心配しての言葉。なのに、それを豊の思考は曲解を以って現す。
「別に良いだろ、俺らがいつでもお守りしてなくても。男なんだし、どうにかなるよ」
　緩む頬は香寿が嫉妬のような想いに駆られているのではないか、と考えたためだ。そしてそれは実際に的確な思考であるが、豊は自分自身でそれを否定する。
香寿が自分にそのようなことを抱くはずがない、と。もしあるとしても、それは標葉に対してだ、と思う。そこで至る。もしかして香寿は標葉を好きではないだろうか、と。もとから考えれば標葉が話しかけたという。それから今日に至るまでこのように何をするでも一緒に行動する仲になる、というのはそれなりの理由があるものだ。それも身内には甘くとも、周囲に対しては無関心が過ぎて冷酷になる嫌いのある標葉と初対面から仲がよくなるなどというのは驚愕に値する。二人の出会いのきっかけはその場にいなかった自分は知らないのだ。
……とまあ、なんともズレた思考のまま考えていく豊だが、前提の時点で間違っているのだと気づかないのも豊である。核心に極めて接近している、というのにも関わらず。自分が愛情を、他人からの恋愛感情を向けられるはずがないのだ、と思い込んでいる節がある。それは標葉にも言える事だ。それは二人の過去に由来するものだけれど、とにもかくにも人を信ずることは出来れども恋愛事という面に関しては全く向けられるとは考えたことすらない二人。
特に豊は始終標葉という存在を横に置いているものだから、自分自身に疎い。正面きって伝えられることはしばしばあっても、駆け引きなどとは無縁なのだった。奥手な香寿の態度から自身への好意を素直に感じ取れ、というのは無理だった。
「でもさ、」
「いいじゃん。それとも俺、来ないほうがよかった？」
　募って言葉を重ねる香寿に豊は安心させるような軽い声音で応対

する。しかも形式は意地悪なことに問いかけだ。その瞳は不安げに、表情は蔭りを見せる。一瞬前まで香寿自身が見せていた表情だということに気づかず、香寿は驚き慌てる。否定に顔を振った。

「そっそんなわけ……っ！ない、よ。嬉しい！」

「そそそ、そう、か」

笑顔で最後を強調してくる香寿。それは途中、呼吸を置くようにゆっくりと言葉を出したことから取り繕う為の言葉ではない、本心だと豊にも伝わる。そのことに逆に豊が動揺する。同調するようにどもった豊に香寿はきょとん、とした顔を見せた後小さく笑う。声を出して。

――ふふふ。と可憐に笑みを零す香寿は眼鏡をしていたって可愛いと思う。というか、俺がダメだと思う。

しかし、なんとしても今日は香寿一人を売店に行かせてはいけなかったのだ。豊は今日の曜日を確認する。水曜日。水曜日の悪魔が香寿に接触しようとするのを防ぐ。そのために豊はついてきた。そうでなければいくら豊であっても過保護すぎる、と自分を自制する。校舎内にうろつく狼は赤ずきんさながらに無垢なる香寿を襲うかもしれない。けれど、その心配は今だけのことではない上に現在は眼鏡を使用中だ。外した後と外す前とで同一人物だと特定されているわけではないのが唯一の安心。そしてもう一つ、学校内であれば豊と標葉の顔で融通が聞く。

それだけの影響力でもって香寿の不可侵条約が成り立っていた。どんな意味にしても手を出せば制裁。見せしめになった者たちが実際にいるからこそ、恐れられる。脅しじゃなく、警告。この三人グループは学内では近寄らず、とは訓戒となって生徒教師の心に深く刻まれている。しかし、厄介なのはそれ以外。――学生でも教師でもない、学外の人物。

「香寿！」

「あ、誓さん」

無邪気に返事をする香寿は悪くない。けれど、男は悪い。

「ち……っ」
完全なる殺気を込めた目で“誓さん”と親しげに呼ばれた男を睨む。男も感じているだろうが、無視。まったく気づいていないように振舞うが、このナルシスト気質のある男は嘲笑うかのようにこちらを煽る行動をする。意図的なのは丸分かりだった。
「今日は何買いに来たの？」
「チョココロネと牛乳と……」
この男は豊の大事なものに手を出そうとしている、虫。そして敵だ。香寿の素顔を見たことがあるわけでもないのにやたらと構い倒す。気に入っている、と行動で示す。だからこそ厄介だ。学外の人間にしてもただのチンピラならば睨みを効かせば退散する。だが、この男は違う。手馴れている。人から奪う、という行為自体が好きだと見える。しかしそれ以外の部分に本気で香寿を見ている部分がある。危険だった。香寿を悲しませ、傷つける。確信を持っていた。何せ、この男は自身が香寿を気に入っているにもかかわらず、それはゲーム感覚として、本気のものではないと思っている。ただの遊び、ちょっとしたからかい。そんな認識が豊にも伝わってくる。
「――豊？」
問いかけられて、思考が分断する。そうだ、こんな男のことなどどうでもいい。豊にとって大事なのは香寿である。求められた答えを返す。
「ああ、俺はコーヒーと焼き蕎麦パン」
「じゃあ、それください」
「はい、ちょっと待ってね」
誓は香寿の答えに応じて手を動かす。売店の人だ。客足は少なくなってきたとはいえ、到底残りの販売員だけでは裁ききれていない。本来なら誓も最高速度で処理を行い、次の客へと店の回転率へと貢献すべきである。しかし、男はそんなことを気にすることもなく、特別鈍く香寿へと接客する。
「そういえば、香寿は今週いつか空いてる？放課後でいいんだけど

……」
「空いてません！！」
他の客、特に女性客から熱い視線をもらいつつそれを無視して、豊の存在をも視界から除去して香寿へとプライベートなことを話し始める誓。そしてそれを止めんとする豊。傍から見れば混沌とした状態だ。ましてやその間でおろおろとする少年が原因などと誰が思えよう。
「何で、君が言うのかな？俺は香寿に聞いてるんだけど」
若干棘ついた声音。
「香寿の放課後はあんたにあげられない」
「俺が一緒いるだから、あんたとは行動しませんよ」
決定的な言葉を、豊は放った。

「漸く？」
すべてを聞いた標葉は呟いた。けれど、それは誰にも聞こえなかったようだ。
「それで、……標葉はどう思います？それって、脈、ありですよね！？」
「……」
「でもでも、豊は天然が入ってるので、あまり期待しすぎちゃ、後で困るよね。でもさ、これって、一応、確約になったよねっ！三人で帰るにしても、いつでも、一緒って」
「……」
「明日、なんて顔すればいいんだろぅ？いつも通り？それとも何か、リアクションした方がいいのかな。でも、下手にリアクションして望みがないなら『何だろ、変だな』とか思われるし、恥ずかしいし、でも逆に考えれば好機だよね……ここで態度にはっきりと出した方が意識してるって、伝えられるし、」

「――」
何だろう、この嫌になるほどの乙女は。
標葉の自室。上がりこむのは香寿。昼、標葉が屋上で見たのは豊が強引な仕草で香寿を引っ張ってくる姿だった。予想していた事態ではあって、動揺も何もなかった。大方、あの販売員が何かしたのだろう、そのために二人は変な沈黙を落とした。そしてそれは事ここに聞くに当たって、半分は推測どおり、半分は的外れだったことが分かる。
沈黙は豊によって作り出されたものだ。思いっきりがいいのか、煮え切らないのか。結局、そんなにはっきりと独占を示したにも関わらず、豊は自己嫌悪なのか己の内側に引きこもって、その後の会話に参加しようとせず黙々と食事をして黙々と授業時間を過ごし（これは普通なのだろうけれど）、黙々と放課後を三人で帰路に立ったのだ。ちなみに、三叉路では標葉が空気を読んだのか、タイミングがいいのか、珍しくも『送ってく』と一言を発して三人で同じ道、香寿の家まで行ったのだ。そして、別れた。最後まで、豊は黙々と、静かに動いていた。
「……悩むなぁ」
そして現在、電話の向こう側で、香寿は身悶える様子を安易に想像させながら標葉へと話をする。昼の出来事、これからの豊への対応。それは出口の見えない迷路。ずっとループしているそれは、標葉を限界まで追い詰めていた。主に腕。
「豊も、煮え切らないな」
「え？」
小さく呟いたから、聞き取れなかったのだろう。もう一度、標葉は言葉を紡ぐ。
「二人とも、さっさとくっ付け、と言ったんだ」
「……」
電話越しに伝わる、香寿の様子は、この沈黙の意味は、赤面。今更に恥ずかしがっている。いや、妄想しているのかもしれない。

どちらにしろ、標葉には関係がなかった。問題なのは自分のことだった。

最近の変な夢。リアルな夢。それは水に関係するところで起きている。だからこそ、家に帰ってすぐのお風呂はあまり安心して入れたものではなかった。あの数日前の夏日の日照りがどうしたのか、と思いたくなるほどに急激に涼しく、もとい寒くなった気候で早風呂というのは標葉を不満にさせていた。それに加えてこの電話である。すっかり湯冷め状態、鳥肌の立った薄着のままの身体へと適当に布団を巻きつけているのが現在の標葉だ。

そろそろ本気で電話を強制的にショートさせたくなる頃合である。しかもその内容といえば惚気のような、悩みのような、愚痴のような、惚気だ。電話をたたっ斬ってやる、ぐらいには思う。それも、豊がはっきりとした態度を取らないのが、原因だけれども。

……今はこのままでいいや、とでも考えているんじゃなかろうか、あの朴念仁。

「豊には一言、いっとくから」

「頼んで、だいじょうぶ？」

不安そうな声音。それは標葉が信用できない、とかそんなものではないのだ。単に、心配。

それは標葉の様子がいつもと違う、という今朝の話に由来するものである。悩みを抱える標葉に更に悩みをぶつけるようで、心が痛む、というもの。それに標葉は一人きりの部屋で、苦笑した。誰も見ていないからこその表情だった。

「この後電話する。明日、思いっきり普通に接してやれ。発破かけとく」

「……いじわるだね、標葉って」

そうかな？ととぼけて電話を切った。そして豊へとコールする。

「はいはい、何の用かな、お姫様は。珍しいじゃないか、かけてくるなんて」

「香寿が今日のお前の発言をすごい気にしてた。どういう意味か、

って頭悩ましすぎて今日は眠れなさそう、だってさ」
「ええ――！？」
「それだけ。じゃ」
「な、おまっ――」
プツっと切る。
これで朝になって必死に取り繕うとして自爆する豊が見れるはずだ。普通に対応するはずの香寿に対して、相当の焦りを感じるだろう。冷や汗をかくだろう。顔を蒼白にするかもしれない。いや、見ものだ。見逃せない。
そのためにも今日はさっさと寝ようか、とお腹の空かない身体をベッドに横たえて、ガバッと身体を起こす。風呂に入り直そう、と思い至ったからであった。
「……大丈夫、だよな」
一回大丈夫だったんだ、問題がないはずである。しかし、不安は大きい。風呂に入る、ということは服を脱ぐということだ。初日のシャワー室でも分かったことだが、あの時は暗い部屋の中で衣服を身につけた。つまり、このタイミングで夢の向こうに行ってしまうと、確実に通報されるような自体が待っている。森の中へ移動していてくれれば、問題はないが、それは期待できない。最初の森と昨日の森では違う場所だからだ。いつでも森というわけではないかもしれない。……町とか、往来とか、人の前とか、シャレにならない。
露出の趣味はないし、そんなことはしたくない。
「いっそのこと、服着たまま、風呂に入ろうかな？」
口に出してしまえば提案は甘く自身の内側へ入ってきた。どうせ、他に誰も居ない。洗濯機もすぐ傍にある。風呂に入ってすぐに脱げばいいだけだ。
そうしよう、と浴室の扉に手をかける。足を踏み出し、ピチャン――。
先がなかった。道は踏み外された。

《来て……私のそばまで――》
微かな声が、三度、聞こえた。

第三夜　現実性と否認（前書き）

サブタイ：サキュバスに懐かれる。
二人目の女の子です。今回はシリアスも混じり交じり。

第三夜　現実性と否認

放り出された場所はやっぱり森だった。といっても、森というより林に近い。公道横の木々に隠れるようにして落ちた。効果音はたぶん“ベシャ！”

何故なら、流石に三回目ということで、落ちることにも慣れ、ある程度の予測もありつつ標葉も行動を起しているわけで、つまりきちんと着地する予定だった。しかし、予定は未定――足を木の根に滑らし、そのまま頭を打って倒れた。

気絶していたのは一瞬だったみたいで、意識の遠のいていた標葉の周囲には誰もいなかった。それはもう、契約したら主のいる場所に自動的に引き寄せられる、とか愛の力で見つけ出す、とかのたまっていた吸血鬼――ユエさえもいない。当然の如く、美少女勇者カレルもいない。

……侘しい気分になる。

嫌だ、夢だ、と拒絶していたわりに“ここ”にいる間の賑やかなところは気に入っていたみたいだ。けれど、それは“ここ”を認めたわけではない。この場所は不思議だ。水を媒介にいきなり飛ばされるというのはどうしたって魔法の力だとか、そんなものに結び付けたくなる。けれど、それが異世界だとか、そんなことは信じられようはずがない。ありえない。これは夢に違いないのだ――。

すくっと身を起こす。雨は長く降っていなかったようで、滑って密着していた地面は乾いていた。そこかしこについてしまった落葉や土を払うと立ち上がった。幸い、今回は服装に関しては慌てる必要がなかったのだ、それ以外のことに思考を傾ける。

……といっても、どうすることもできない。

選択肢は二つ。ここでじっとしているか、歩くか。ここで突っ立っていることに意味はあるのか。いいや、ないだろう。吸血鬼は来ない。来るとしても、ここを移動したからといって不都合はないはず

だ。そして町はすぐ傍にあるらしい。公道が目の前にあるといっても、人気はなさそうだった。
「――歩こう」
誰ともなく、呟き、足を踏み出した。
今日の夢は何故だか明るい。今まで二つが真夜中の闇を持っていたというのに、今は朝方の光を持っている。けれど、どの道、暗いことには変わりなかった。
――夢と現実では数時間のズレが生じているらしいことに気づき、けれど標葉はそれを認めたくなかった。認めてしまえば、一気に現実感が増すことになるだろうと、分かっていたから。無意識のうちに、思考を凍結させた。標葉が必要としているのはファンタジーでも異世界でも召喚でもない。ただ、平穏の平和の、平凡の内にいることだけを標葉は思う。

――字は読めなかった。
町の入り口には衛兵が立っていたが、彼らは入場制限をしている様子はなかった。この夢の世界では珍しいだろう、標葉の服装にもまったく興味がないらしく、視線も遣されないまま町に入れた。そろっと彼らに近寄ってみる。
「ん？なんだ、用でもあるのか」
「あ、いえ。なんでも、ないです……」
あんまりにも無視されるので、もしかしたら見えてないんじゃないか、とかファンタジーノリ気で様子を窺ってみたのだが、そんなこともないらしい。町名が書かれているだろう、看板の文字はわからない。けれど、話せる。何故だろう。彼らは特別日本人でもなさそうなのに。
彫りの深い顔立ちに、黒以外の色彩を持つ髪。もし彼らの中に日本人の血が混ざっていたとして、それは他の血筋に圧倒的に負けているだろう。
ぶらぶらと町を観光気分で歩く。人気は、やはり少ない。朝方と

いうのは案外、合っているのかもしれない。静けさが身を突き刺す寒さと同調する。

――

ふと、何かが聞こえた気がして、立ち止まった。標葉の行動を不審がる者はいない。人の疎らな町は開いているお店さえ少なく、ひっそりとしていた。聞き耳を立てて、何かを感じ取ろうとする標葉に構うことなく、時間は過ぎていき、その内に人々は慌しさを伴ってくる。早朝の緩やかで清廉な空気から、人々の活動する活発としたものへの移行が標葉だけを置いてなされる。

――

断続的な音色は、人体から発せられるものではないように思える。けれど、それは歌声として、成り立っていた。呼気を伴う、リズムの乗った穏やかな調べは標葉をそこへと向かわせた。

――

それは異様な空間であった。
開けた場所、噴水の淵に少女は腰かけていた。
真っ黒の長い髪が背に流されている。ひんやりとしているだろう、冬の冷たい水に手の先をつけて、少女は口ずさむ。近寄って、段々とはっきりして聞こえてきた歌声は、しかし、何と言っているのか不明だった。今でもなんといっているのか、聞き取れない。発音が悪いのでも、活舌が悪いのでもない。それは凄く奇麗な音色であって、人の声と呼びたくないような、言葉にならない音。

――

それに聞き入るように、人だかりが出来ていた。皆、男だった。ぼんやりとした様子だ。けれど、一様にその瞳はどこか熱狂的で、少女を、食い入るように見つめている。

粘々とした、性質の悪いソレが少女へと、向けられていた。なるほど、彼女は美少女である。そして豊満な体を持っていた。艶かしい黒髪が彼女を妖しく彩る。女性らしい体つきは服の上からでもよく分かる。通常なら同性から妬まれるだろう肢体は、けれど媚びない印象の少女に尊敬を集めるかもしれない。

けれど、少女は構わず、歌い続ける。それこそが防波堤だとでも言うように、ただただ歌い続ける。

――

けれど、終わりはいつか来るものだ。始まりに追随し、夫婦のように寄り添い、表裏のように決して相容れない。少女の顔色は、悪い。青白いその肌は見るからに体調が悪そうで、けれども無表情が鉄火面の如く張り付いている。

少女の視線は男たちにある。そして男たちの視線もまた、少女だった。

獲物を狙うかのように窺い見る男たちの様子はやはり、おかしい。異常だ。集団催眠にでも掛かったかのように、統率されていて、けれどそれほど覇気に欠けるわけでもないのだからどうしたのだろう、と標葉は首を傾げる。そんな視線を向けられている少女はたぶん、動けないのだ。伸びやかに唄っているようで、どこか旋律に緊張感が潜んでいることに気づいた。機会を待つ獣に隙を見せんとするように、音色は紡がれる。

けれど、唐突に音が止む。

揺らぐ体に、伸ばされる幾多もの手。近寄る獣たち。その瞳が彼

女を映す事に、標葉はなぜか不快に思う。そして

「……え？」

声を上げたのは、自分でも思いがけない行動をした標葉。けれど、驚きは、それではない。少女の、金に縁取られた瞳は、まるで猫科のように瞳孔が開き、小さな唇から小さく、二つの刃が見えたからだ。射抜く視線は弱い。掠れた声で、何かを言うので、耳を近づけた。

「あなたは誰……？」

力ない少女は虚脱して、意識を標葉に預けた。

＊＊＊

――どうしよ。

男たちから浚うようにして寸前で抱きとめた標葉は今、男たちに囲まれて逃げられなくなっている状況、ではない。

タイミングの良さに拍手を打って拝みたい登場をした、吸血鬼によってその危機は脱したのだ。ただし、危機、というか問題は運ばれてくるものである。今回の場合は標葉自身が少女と同じく抱え込んでしまったのだけれども。

「サキって呼んで」

べったりと張り付く少女にたじろぐ。

――いやだってさ！あれだよっ！？

密着する身体。

――俺、悪くないからっ

再び自身の内側で自己弁護する。けれど、現実に手振り身振りでノーと示すが、全く効果はなく、ユエに睨まれている。美人だからこそ、迫力がある感じで。

……これでユエが女の子だったら、めちゃくちゃいいのに。嫉妬

の視線なら大歓迎。
「それはいいけど、とりあえず離れて。さっきのアレは何？囲まれて――」
「知らない。勝手に向こうが寄ってくる」
あ、もう一つの頼みは無視ですか。
「君の本質、というか種族の問題でしょ、サキュバス。いい加減に標葉から離れないとキレるから」
横から引っ張り剥がすユエに今回ばかりは感謝した。このままだなんてどんな王道主人公。でも俺はそんなものにはなりたくなかった。どんなに可愛い女の子に出会えたからといってもこんな夢を夢として認識できないようでは人間として駄目だろう。現実はそんな甘いものではない。ここは酷く曖昧で不確かな場所だ。夢でしかない。
「標葉は、違う」
「無視――？」
真剣な声、真剣な眼を向けられて戸惑う。ユエは当然無視だった。何故だろう、不思議な響きだ。彼女の歌と同じ、強い力を感じる。それにしても歌で相手をけん制するというのはどんなもんだろう。例え少女に寄り付く奴らがいるとしても腕っ節の強い人に追い払ってもらうとか、人目につかないようにするとか……あ、いや人目につかないところだと強行されたらやばい。完全アウトだ。ろくな抵抗も出来ずに捕まってしまうだろう。婦警に頼め、女性の警官。それならば彼女の魅力に惑わされるということもないだろう。しかし、男どもがこぞって彼女に集まるというのはどういう仕掛けだ？ユエは種族といっているが。
「ユエさんも苦労してるんす。気遣ってあげてくださいよ、標葉」
――わかってる。わかってるさ、ユエが苦労していることは。青筋立てているんだもの。だから君も間に入って止めようとしてくれ。被害の行っていない彼女にそんな視線を送っても面白げに見るだけで彼女は彼女でこちらに自身の主張を押し付けてくる。つまり他二

人と同様だった。せめて言わせてほしい。
――何、このカオスな空間。
完全に話がごちゃまぜだし。
自分の主張ばかりの人たちで集まって何をしているのだろう。ああ、サキの種族といえば、男を惑わす美貌の種族――サキュバスなのか？だからサキですか、さいですか。
「隣、安心する。標葉の甘い匂い、嫌いじゃない」
俺は甘い匂いなんてしません。甘いものは好きでも普通の男子高校生の汗臭い匂いがするはずですよ。
……いや、汗の匂いはしていてほしくないぞ、自分。普通の、無味無臭がいいじゃないか。
ソレともなんですか、サキさんの甘い発言はそういうことじゃない、と。もしかして本性とやらのはなしですか？ユエと同じ吸血属性とかもってたりするんですか。それとも淫魔と呼ばれるサキュバスだから人間の精気がお好きだとか。……それは冗談でなく食料として見られてる！？好かれてるってこの場合、あまりよくないんじゃあ……？
「私とも、契約」
何故か弱々しい声。瞳は翳っている。体重は預けられたままで、低い体温と病的なまでに白い肌が“保護して”と動物を飼う如き容易さで理性に訴えかける。いや、動物を飼うのは大変だけれど、人間を買うのとはレベル――というか次元が違う。命の重みは同じなのに、何故違うのか。それはやっぱり価値観だろう。根底から覆らない限り、魂から刻み込まれたが如き人間至上主義は変わりそうもない。それだったら何故もとから動物に例えたのかという話になるが、それはそれ、可愛らしいからに他ならない。尤も、理由としては庇護するべきか弱さが顔所に合ったからか。
「駄目。絶対、駄目だからね」
言葉にしようとした言葉に、ユエの念押しが被さって、強固になった意志はサラリと事実を見落としたまま言葉にされる。

「そんなに簡単にしていいもんじゃないんだろー？やめとけって」
何気なく、肩に手を置く。
ゾッとした。
上げた視線は氷のように冷たく、けれどそれは絶対零度なのではなく水の透明さだった。普通ではありえない、俺の“世界”とは全く違う色合いを持つこの場所の住人たち。ユエは金髪碧眼。色合いとして文字に現せばそれは珍しくもないが、実際には金髪は銀糸のように煌く月色の眩しいそれで、青の瞳は字の如く緑に近い。カレルの髪色も金といえば金なのだろう。あえて口に出すことは憚られたが、その赤みがかった、というより赤に金が混ざったような髪色に瞳も赤。これも地方独特のものだろうか、赤眼はある美のが当て嵌まる。紫外線に弱いそうで、日の下は辛いのだと。ここで朝を過ごすのはこれで初めてで、この冬の時期に早朝という時間帯で彼女が本当に陽が眩しいと感じているかどうかは図りかねるのも現実だった。
そしてサキ。黒髪だ。そして瞳は水色だった。海よりも薄い。水よりも濃い。不思議な色を湛える瞳は透明な青というのが表現としては適切かもしれない。そういや、気を失う前に見たのは金の瞳だったような気がしたけれど、気のせいか？
……どちらにしろ、誰もが俺の生活圏内で見かける色合いを持たないということだった。いくら世界中には似た色合いがあるとはいえ、この夢はやけにファンタジックだ。吸血鬼も勇者もサキュバスも、魔物と称される変な生き物も。町の人たちも眩しいぐらいに彩りに囲まれている。ちなみに髪程度の色合いは染色剤が売られているので気軽に変えられるとの事。
――けれど、本能のように分かっていた。
彼らの色は本物でしかない。夢の中でありながら、どこまでも現実で、……もっと曖昧でいいのに、と自分の感覚を呪う。

「イラナイなら、別の人」
「――サキ？」
様子のおかしいサキ。立ち上がった身体はふらりとした。
まだ出会ったばかりで、機敏に聡いわけでもない自分が、それでも感じるサキの不調。怪訝に声をかける。けれど、そのまま、立て直した身体で扉を押して出て行く。
その背を見送って、けれどやはり心配なので着いて行こうと立ち上がる。
「止めなよ。どうにも、出来ないよ。標葉は出来ても、しちゃいけない」
「ユエ？」
「あの子、もう関わらない方がいいっす。もう、駄目っす」
その真剣な声に心が震えた。何故、ユエまでも真剣なのだろう。夢に真剣さはいらない。
笑いを深めたカレル。彼女はけれど、何かを隠しているのだろう。偽りの、楽天さを見せ付ける。勇者の彼女は、けれど本質的には正義感が溢れているというよりもモンスターを憎むハンターのようだった。純粋な悪意、敵対心。真白な害意で敵を叩く。魔王を倒すことを目的とし、その属性を持つ、モンスターを切り捨て、主人のいない魔族を敵視する。カレルは何故、サキに冷たいのだろうか。答えは考えずとも既に出ていたというのに。
――駄目とは、何が駄目？
サキはサキュバスだ。契約を持ち出したということは、彼女に主人はいないのだろう。

昨日と同じ場所。噴水の淵に腰掛けている。その体が、揺れる。
「サキ！！」
バシャッ――！！
歩くたびに増えていく男の群に異常な光景と遠巻きに着いて来た自分をこれほど呪うことはないだろう。その身体が地面に崩れ落ち

るのを、手を出すことも出来ずに見送った。
急激に狭まった包囲網に走りこみ、人の群を書き分けて中央に進めば倒れた少女は身体を数人に押さえつけられている。辛うじて意識はあるようで、口が動き、旋律を口ずさむ。腕は蠢くようながらも、抵抗するほどの力も残っていない彼女にそれ以上、手出しが出来ないでいた。

――倒れたのは何故？
顔色が悪いのは何故？皆が真剣になる理由は？自分だけが彼らと同じようにならないのは何故？何故サキは自分に契約のことを話した？
考えれば考えるほど気づいてしまう。気づきたくない。自分は夢の中にいるのに、何故気づかなければならない。現実とは違うのだ、自分の都合のいいように進んでくれたらいいのに。
現実とは違う。でも現実と同じ、夢の世界。考えたくないのに、事実は叩きつけられる。それが痛い。痛みが伴う夢なんてみたくない。これじゃあ、まるで悪夢。まるで、現実――
「標葉、私――」
言葉を最後まで紡ぐことも出来ずに意識を失う少女は呼吸さえしていないように思えた。浅い、深い息にこちらの呼吸が止まるような気分だった。
標葉にとっては先ほど会ったばかりの少女でしかない。問題ごとしかなさそうな未来を見せ付ける少女は目の前で倒れている。これ以上関わっていいのだろうか。標葉は混乱の中、自らに問いかける。けれど、結局、現実とは違う自分としていられても、根本は変わらないのだ。
「サキ！サキ！生きてるよな？返事しろよ。どうしたんだよ、何でこんな――」
標葉はこの少女を見捨てることが出来ないでいる。
人はそれにも関わらず、二人を引き離そうと腕を掴み、体を押し、胴に触れる。

標葉はサキだけを見て、ほかに目を向けないようにして、手を振り払う。抵抗し、サキの身体から引き離そうとする。神聖な雰囲気をまとった不思議な少女。けれど、意識を失って尚、その身体はどうしようもないほどの隠微な雰囲気を醸していた。
「サキ、サキ、サキ――」
標葉は必死に呼びかけ続けた。身体を揺さぶり、意識を浮かすようにする。けれど目ぼしい効果はなく、人形のようになすがまま、人の形を保っているだけの入れ物のように感じられた。

――偽物の、意志のない、ただの器。
それは誰のこと？

「標葉」
いつの間にか傍にいたユエの呼びかけに標葉は顔をあげた。漸く、現実に戻ってきたような、様子で、男たちが自分を、少女を掴んでいないことに今になって気づく。
「ここは離れるっす。このままじゃ切ないっすよ。また、集まる」
カレルの言葉に血の気の失せたサキを抱き上げる。軽い。先ほどよりも随分軽い。何故だろう、それほど時間が経っているわけでもないのに。人は意識を失うと重くなるという。けれど、意識を失った彼女は軽い。けっして幼子でもないのに、同年代の少女のはずなのに、それはとても人と呼べるほど重くないのだ。――とても、軽すぎて、サキュバスの食事は何だっただろうか、と頭に過ぎる。
標葉は迷子の子供のような顔でユエを見上げて、ただ、口を開く。
「何をすれば、いい？俺は、何を」
泣き笑いのような顔でいる標葉に、ユエも同じく困ったような笑顔で、告げた。
「契約、した方がいいんだよ、標葉」

「ユエ！こんな時に何言って……それにお前、反対したじゃないか」
瓦解する。
感情が暴発して、一瞬の内に縮こまった。熱気が冬の寒さに凍結したように、萎んで、現実は晒された。

「なのになんで今更――」
知っていた。知りたくなかった。
分かっていた。分かっていなかった。

「確かに、反対したけどね。……こんな時だからこそ、言ってるんだ」
真剣な声なのに、困っているのだと分かった。
そうだ。ユエは反対したのだ。それなのに、こう言うのは、標葉が望んだからだ。契約には、逆らえない。

「サキュバスは契約者がいないと、死の危険と隣り合わせなんだよ」
サキュバスは人の精気を食べる。そのための契約者なのかもしれない。
標葉にサキの影響がないのは、特別抵抗があったからではない。単に素養があったのだ。契約者としての、――“魔力”の担保。

ユエは記憶喪失の美麗な吸血鬼。その顔立ちは人というにはおこがましいほどの神秘的。身に纏う色はは現代にありそうでない、月色に空色。その運動能力は人の範囲を軽く超える。今まで見たこともない生物――化け物も存在した。
カレルは勇者を名乗る少女だ。一人旅を続けていただけあって、強い。常人のそれとは違う、何かしらの力が備わっているのは、身に浴びた木刀の衝撃波からも分かる。その赤味がかった金髪に赤い瞳は現代にありそうで、身近には決して見たことのない色合い。服

装も、現代のものに防具をつけて帯剣している。
二人は多少夢見がちな、電波でよかった。それで間に合っていた。多少無理矢理でも、それで話は終わっていた。夢で、いられたのだ。
けれど、化け物は存在していて、サキは人を惹きつける。
美少女だから、なんて理由では到底説明しきれない。

「今、その子は特に弱ってる。だから、契約しないと、ほんとにもう……」

「……っ！！」
少女は契約という言葉は発したが、自らをサキュバスと名乗ることはなかった。契約者がいないサキュバスはこうなるのだ、話せなかったはずだ。無闇に自分に引き込もうとしなかった。標葉が拒絶したから、関わりを深めようとはしなかった。巻き込みたくないと、思ったからなのかもしれない。
――自分は、いつまで目を逸らし続けるのだろう。

「標葉、僕個人の思いとしては契約に反対だ」
負担のことを言ってるのはわかる。契約に掛かる、負荷。契約者が多ければ、それ相応のものになる。今の俺は既に契約をしている。
――――けれど、
標葉にはユエの本心が伝わってくる。契約の、血の盟約が心を繋げる。それは全てを晒す扉で、サキを見殺しにしたくないという想いと契約者を大切に思う気持ち、独占欲みたいなものまで読み取れて、読み取れてしまって、
「でも、契約者が傷付くようなことはできないんだ。俺も、標葉が傷付くところを見たくない」
それでも、と告げるユエの瞳は悲しげで、複雑に揺れている。そんな顔は見たくない。それがとても嫌だと感じた。

「選択するのは、標葉だから」
……最後の選択だけを任せるのか。
頭の中がごちゃごちゃして、どうにもならない。どうにもならないから、
「契約しよう、サキ」
――真白になった。

「俺は、異世界人の標葉はサキュバスのサキと契約をする」
もう、どうだっていい。考えるのは、後だ。
だって事実は変わらない。歴然と真実は横たわっているものだ。
ユエの差し出したナイフを手に取り、掌を真一文字に切り裂いた。

派手に飛び出た血を口に含み、サキの口に含ませる。
「ん……っ」
意識がないはずのサキは、けれど本能からか口内を荒々しく舌を動かす。
「標葉……？」
何故、と問いかけるようなサキの口調。それは詰るようでもあり、その開かれた眼は金色に光っていた。
「――よかった」
微笑んで、――バシャン。
水の中に引きずられる感覚に、意識が落ちた。最後に腕が伸ばされたのを、見ないまま。

閑話　彼の不振はいつもから外れた過去のこと（前書き）

シリアス続き～。
さあ日常生活に戻ったぞ！……なんて切り替えが出来るほど人間で来てませんですよ、標葉さんは。
ということでーＧＯ！

閑話　彼の不振はいつもから外れた過去のこと

「えーでは、朝集会をはじめ――」

カチャッ

扉は開かれた。そのことにより幕開けの言葉も尻切れとなり、そこにいる生徒・教師たちの注目がそこに向けられる。

静かに入ってくる生徒は明らかに不良と思われるような容姿だった。しかし、この学校は校則が緩いために指摘できない、と歯噛みする教師たちはこの状況に喜ぶ。遅刻してきたのだ。堂々と生徒指導に持ち込み、彼らの姿勢を根本的に強制（かえ）してしまおうと企みが膨らんだ。

それは柏木標葉だった。

真っ先に注意をしようと入り口傍の教師が声をかけようとするが、標葉にはそれが見えていないかのようにその軌道がズレていく。向かった先は彼の担任。

指摘するためのお鉢が回ってきたのでこれ幸い、と担任は勇む。が、

「まっちゃん」

逆に呼びかけられた。

そして至近距離で立ちどまって手を伸ばされた。

「まっちゃん」という呼び名は気に食わない。馴れ馴れしい。だが問題はそこではない。もちろん至近距離で拝められた柏木のその顔でもない（少し顔がいいからっていい気になるな、といいたいぐらいだ）。けれど、そんなことを思っていても身体は体温が上昇する。

白く細やかな柏木の手は伸ばされ、ゆっくりと首に近づく。

何をされるのだ？俺は。もしかして、もしかしてなのか？やられ

ちゃうのか？こんな大勢の前で、“生徒の集まる朝集会で生徒が教師に暴力！”とか新聞に大きく載っちゃうのか！？有名人になっちゃうのか！？……いやいや、嬉しくないぞ。新聞に載ってもそれは醜聞だからな、逆に風評が悪くなる。けれど、そんなことになったら是非写真を取る際は声をかけてくれ。きちんと装いを正す比梅雨尾があるのだよ、こちらには。

つらつらとそんなことを思考に流しつつも身体はメデューサにでも魅入られたかのように動かず、ただ柏木のことを見ていた。そして相手も同時に己よりも低い背で、長い睫毛が縁取る瞳が見あげていた。二人だけの世界、とでも勘違いしそうになる思考にノイズを混ぜるようにして思考の方向性を変える。息の感じられるほどの距離というにはまだ少し遠い。けれどもその息はどんなだろうか。花の香りでもしそうな華やかな容姿をしている。甘やかな香りがしているのは柏木が甘いもの好きという噂を「まっちゃん」の中で強固にする。可憐な唇から小さく洩れる息はどうしようもないほどの艶やかさが感じられて、衝動的にほっそりとしたその身体に手を回してしまうことを考えさせる。

手を伸ばせばすぐに届く距離、腕の中に収め囲い込んでしまうことも可能だった。

その行動は時の流れに従っていて、実に明快に、はっきりとした動作であった。俊敏でもなんでもないそれに、けれど誰もが一挙一動に注目していた。何がされるのだろう、何が起こるのだろう。そんな好奇が空気に流れる。皆が静観して見守る中、しゅるっと解かれるネクタイ。――ネクタイ？

疑問は彼だけではなかっただろう。場違いに過ぎる。

しかし次の言葉で理由はすぐにわかった。

「曲がってるよ、ネクタイ」

何気ない風に言って、きちんと巻き直す。

呆然だった。皆が未だに静寂を保つ。

「はい、ちゃんとできた」
太鼓判を押すように標葉はその部分をぽんっと叩く。

何故か反応ははっきりしない。ぼんやりとしているというか、唖然としているというか。
（そういえば、他も静かにしてる……）
首を傾げた。
あれ、もしかしてさぁ、この雰囲気――
「遅刻しちゃった？」

標葉が口に出してそう問いかけて、ようやく事態は動く。凍ったように動かなかった世界が、人々が、凍った大地が春の最初の洗礼を受けるがごとくして徐々に解け始めた空気。一番に回復した誰かが言葉を紡ぐ。
「っそ、そう――」
「いいえ。ぴったりですよ」
柏木の言葉に肯定しようとした「まっちゃん」はいきなりマイクから割り込まれて二の句が告げなくなった。生徒の注意も一斉にそちらを向く。その先、立っていた人物は、そこにいるべき人物で、誰もが今何をすべきかを思い出す。
マイクを握る生徒会長。彼は「ほら、」と壁に設置された巨大な時計を指してみせた。

カチッ
それはちょうど３０分に鳴った。設定された機械的な擬似チャイムが鐘と称して拡声器から洩れる。この体育館に関わりのある全ての者が集まっているというのに、全校舎に流される。それは無駄遣いだろうか、それともご近所への何らかのアピールかもしれない。

毎日同じ時間に鳴る音というのは往々にして好き勝手に合図へと変更されるものだ。特に主婦の間ではその音で何かを判断し、家事の全てを止めて慌しく家を出るためへと動きを変更させるかもしれないし、朝食タイムだとこれまでの行動を一時中断して寛ぎへと空気を動かすかもしれない。もしくはさあ二度寝だ、と開き直る者もいるかもしれない。――そんな鐘音。

「では、集会を始めましょう」

生徒会長が笑顔で促し、皆が直った。興味は既に自分から逸れてしまって、今までと同じ、何処にでもいる無価値で平凡な自分が、誰にも注目など受けよう筈もないしょぼい自分がやってきたのを自覚した「まっちゃん」は、最後に仕方なく、標葉へと声をかけるのだった。

「今度からは五分前に来るように」

しかし小さく、注意というよりもアドバイスのような具合に。

なんたって彼は怖かったのだ、生徒会長が。今期の生徒会長は始終笑顔でいるくせに手腕は優秀。笑顔で切り捨てられる恐怖というのを味わったのはこれが初めてだった。笑顔のプレッシャー。無言の圧力。どんな言葉にしても、結局は同じことだった。

＊＊＊

「なあ、今日どうしたんだ？」

豊の問いに最初、標葉は答えようとはしなかった。だが援護するように香寿が言葉を繋げる。

「遅れるならもっと遅れてゆっくり来ますしね」

「……あんまり、眠れなくて、歩いてたらなぜか遅れた」

フラフラと。

そんなことを思って、けれど思い至った。そうだ、昨日自分は香

寿や豊になんと言ったか。ぎこちない態度を取った二人に、豊に罠を仕掛けてけしかけて、香寿に後押しするようにして声かけて。――今朝会った二人はどんな風だっただろうか。

いつもは三人の道を、二人で歩く。しかもタイミング的は、豊が独占宣言をしてしまった後だ。一番もどかしい距離で、ハニカミと気恥ずかしさと、どうにも煮え切らない相手の態度。そんな思いを二人は抱えて、二人で登校した。

……見たかった。さぞ面白かっただろう。

二人の後ろを下手な尾行でもしただろう。恥も外聞もなく、二人にばれていると分かりながら、つけたはずだ。もしそうならば、ギャグで済ませたかもしれない。空気に少しながら緩やかなものが流れ、二人の距離はぐっと縮まるだろうはずだった。

けれども現実は違う。

実際には、二人は甘い雰囲気ながらも、姿の見えない標葉に疑問と、今日は寝坊で遅刻だろうかと考えながら、けれど嫌な予感を感じていた。

遅れて来た標葉は完全にいつもとは違っていた。他の誰にわからなくとも、二人には分かっていたのだ。タイミング的に全く予期しなかった時に訪れた標葉はいつもより、ぼんやりと、現実を見ていなかった。深い悩みでも抱えているのか、地に足を着けていないかのようにふわふわとしている。前を見ているようで、どこか遠くを見ている。――そんな標葉をほっとけない気持ちが強く出て、二人からは昨日の事柄が頭から吹き飛んでいた。

「悩み、あるなら聞くよ？」

香寿がそう言って気遣っても、普段を装うばかりの標葉に、豊は以前のことを思い出した。

「“あの時”みたいに変なことに巻き込まれてるんじゃないだろうな？」

それは核心で、確信だった。

ガタ――ッ
「し――」
「ごめん、一人にさせて」
突然、弾かれたように椅子から立ち上がった標葉は、逃げた。その背が、豊の疑問を肯定しているようで不安だった。香寿が横で息を呑んだ。顔を見れば蒼白だ。信じたくないのは、同じだった。あの時から、時が経ったとはいえ、何かが起きるには余りにも短い。ぞわぞわと背筋を這い登る暗い闇の感覚に、豊は固く拳を握る。まだ、事件が終わっていないことは、知っていたのに。終わるはずのない、始終付きまとう事だと知っていたのに。
――標葉は特別なのだ。

「豊――」
微かに唇を震わせ、豊に呼び掛ける香寿。握り締めて真白になった豊の手を傷つく前に、そっと冷えた手で包む。震えは伝わる。二人が考えていることが同じなのだと、伝える。二人の脳裏には以前の記憶、“あの時”と暈かした時の記憶が蘇っていた。
絶対的な力の差が恐怖に変わった瞬間だった。生死の境目を辿ったアレは、けれどほんの数時間の出来事でしかなかったはずなのだ。――命のやり取りなんて、それが初めてで。
「香寿。俺たちも、授業サボろっか」
肯くことしか出来なかった。豊は提案通りに行動する。香寿の手を逆に包み、引っ張って教室を出た。入れ替わりのようにして担任が教室に入るが、そんなのはもう気にしない。優等生として通る香寿も今回だけでなく、二人に連れられサボったことが幾度かあった。向かう場所は、――やはり屋上。

標葉がいることを承知で、それでも話しかけることなく、三人で並び、そっと手を繋ぎあった。それぞれが記憶に意識を飛ばす。標

葉は眼を瞑っていた。
「夢を見るんだ」
「変な夢で、小説とか漫画とかにありそうで、すごいリアルで」
まるで生きているようで。自分の夢で、なのに知らないことがいっぱいある。ご都合主義なんて存在してなくて、自分の知らないところで勝手に物語が進んでいる。彼らには自分の知らない人生があって、それを積み重ねて今がある存在なんだって――気づかされて、そう思わされて。“それは夢じゃない、現実だ”――そう常に言い聞かされるようなものだった。
「だから、勘違いしそうになる。現実だって。ファンタジーが本当のことだって。ずっと、訴えるようだから、間違えたくなくて」
間違えては駄目なのだ。
それは夢でなくてはならない。今が今であるためにも、それは現実ではいけない。

「それだけ」
言葉はそれでおしまいだった。これ以上、語ることもない、と身を起こす。開けた視界に赤い燃えるような光が入ってきて、一瞬身体が震える。それは眩しさのせいだ、と理由付けて、血のように真っ赤な空から視線を逸らした。冬の気候へと移ってゆく空気に身体を抱きしめた。
「偽物だよ」
その背に、暗いような、真剣なような、どっち着かずの声音で香寿が投げた。
「本当じゃないって思うなら、それは本当じゃない。標葉は自分を信じたら良いんだ」
それは、香寿が二人に出会う前、自分に言い聞かせるように言っていた言葉だった。受け入れたくないのなら、それは現実じゃないと拒否すればいい。自分しか知らないことならば、それは夢で終わ

るのだ。誰も知らないことをわざわざ現実化することはない。辛いことならば、なおさら。――そうして見落としてきたものはいくつあるだろうか。

「でも、少しでも現実と認めてしまうなら、それは本当なんだよ……」

それでも、それでなければ自分は自分を保てなかった。香寿は後悔など欠片も持っていない。いや、全て、受け入れてしまった。あの頃には夢であったけれど、今にはもう、昇華した。

記憶は消せない。だからこそ、認めた。現実として、そうすることで出会えたことがある。そうすることで見えてきたものがある。今の標葉にはそれが必要なのだ。今はまだ、そっとしておけばいい。いつか、拒絶しない日が来るはずだから。

「俺は、今が好きだ」

「だから、認めない。今を壊すものは、認めたくないよ」

頬にポツ――、とまるで涙のように落ちる雫。秋空は真っ赤な夕日を掲げ、雲はどんより雨を伴った。それに手を伸ばしかけたところで

《神が来た》

――物語は急速に幕を閉じ始めた。

幻聴とは言い切れないそれに、屈せざるをえない見えない力に、いっそ冴え冴えと、現実が降りかかる。身体が下降する感覚に、瞳に映った二人の驚愕するような表情。ぐちゃぐちゃな心を持ったままの標葉を引きづっていく。もう、誰にも止められない。

どれが本物でなにが偽物なのか。判断のつかない事柄はこの世界に数多散らばっている。曖昧として、人によってことなるもの。認識の違い。情報量の違い。そんなことから来る。だが、

――それは本当に夢なの？

地面に落ちた雨は次第に早足に、深い闇色へと染め上げていく。

そして標葉の心にも、疑問は水が染み渡るが如く、広がっていく。

第四夜　不合理に歪む現実（前書き）

サブ：神との遭遇。
幼女出ましたです。
けれどメインはそこじゃない！
ユエさんに対する標葉の生。

第四夜　不合理に歪む現実

「あーきもちわるい」
あんな場所から、こちらへ来た為に落ちる感覚はそのまま屋上ダイビングと重ねあわされる。自殺した気分だった。

「ってユエ？」
目の前にいるユエ。その壮絶な美形が微笑みを立てていた。見ればそこは室内だ。いつものように森ではない。着地が失敗しなかったのは功績だ。手が、何故かユエに繋がっている。
「良かった……」
心からの言葉に、涙で潤んだ眼で見られることに、その場の雰囲気に、俺は抵抗できなかった。ぎゅっと抱きしめられる。俺より長身で、けれど線の細い奴。華奢とか儚いという言葉はコイツのためにあるのではないかと思うぐらいの、美しい吸血鬼。俺だけの、魔物。
「よかった、って俺気持ち悪いって――……ユエ？」
金とも銀とも区別のしがたい、輝かしい髪がふわりと薔薇の香りをばら撒く。幾分低い場所である俺の肩へと顔を埋めるユエは、繰り返す。
「ほんとに、よかった」
安堵を確かめるように小さく可憐な声音でため息とともに呟き、俺を押し倒す。
（おいいいいいいいい！！）
背中にスプリングの利いたベッドがある時点で心の中だけで叫んだ。何処からどう考えても危機的状況。もがもが、と手を繋げたまま体の拘束を解こうと身動きする。
「ちょ、おい、ユエ。どうした」

何の抵抗も無くそれは外れ、俺は漸くユエの様子に気づいた。いつもと違う。声をかけても返事がない。冷たい手。力のない体。呼吸も深く、ひどくゆったりとしている。

（――意識がない？）

先ほどまでは逃れようとしていた身体を、抱き上げ、その顔を見た。薔薇色の頬は、薄く、青ざめている。熱か、と思い額に額を合わせる。

「ん……っ」

身動ぎし悩ましげな吐息を零すだけで意識は戻らない。

ただの眠りなら、杞憂ならばいい。けれど病気か何かだったら？

――吸血鬼の生態など知らない。人と同じように接しているけれど、この“夢”の世界ではこいつは吸血鬼なのだ。人であるという疑いは晴れずとも、それがルールだ。吸血鬼が、魔物が人と同じ病気にかかるとは分からない。どのように対処すれば分からない。わかるのは、詳しいのは、――同族だけ。

（そうだ、サキ――！いや、駄目だ、何処にいるか分からない）

今ここに着たばかりで、この部屋が何処なのかも、なぜユエがここにいたのかも分からない。状況も分からないまま病人と離れるなんて危険なことは出来ない。

「――血」

そうだ、血だ。

契約時に血を飲ませたのと同じにすれば――あの時のように復活ができるのではないか？

膝の上に寝かせ、唇を歯で噛み切って血を口に含む。寄せる顔は血の気を失っているの息を呑む美しさだ。普段により一層磨きが掛かったように見える。カレルは抜群の美少女だし、サキもその性質上見目はすばらしく整っている。けれど、吸血鬼であるユエは――その美しさは飛びぬけている。ここまで美しい生き物を見たことが

ない。危うい均衡の上の、壊れそうな美しさ。人を惑わせる妖しい魅力を放つサキュバスとは似て非なる、人を狂気に走らせる美しさだ。無闇に関わったら硝子細工のように、壊してしまいそうな気にさせる。

「……ひとまず、大丈夫か」

バサリと音が鳴りそうなほどに豊かな睫毛に隠された瞳は閉じられたまま、その空色を見せてはくれない。けれど眠り姫のように今にも深い眠りに落ちてしまいそうな雰囲気は無くなった。呼吸は通常の速さを取り戻し、整えられていく。顔色も徐々に戻っているようだ。

……転がしておこう。

二人のことも探さなきゃいけないし、ユエのことも聞いた方がいいだろう。うん。

気恥ずかしくなったことをそうして一人無理矢理理解・納得させて次の行動に移る。まずは女子を探さなければ。そろっと窓から外を窺えばそこは町だった。ここはたぶん宿屋なのだろう、とあたりをつける。ならば主人に聞くべきだろう。どうせ隣辺りだろうが。

「標葉だけど、今いい？」

コンコン、とノックをして尋ねるのは常識の範囲内だ。そして礼儀でもある。けれど、それをまったく何とも思わない奴もいるわけで、かく言う俺も対して気にせずに、ただ習慣として行う程度、たまにはそんなこともしない間柄というものもある。その認識を変えたのはいつでも礼儀正しい香寿が友人となってからだ。

「あっ丁度良かったっす、入ってきて下さいっす。」

……多分、常識を求めた俺が馬鹿だったんだ。

もしくは俺じゃなくユエなら良かったかも知れない。けれど頼りの吸血鬼はこういうときに限って倒れている。

パタッ

開けた瞬間時が止まったようだった。正しくは俺の脳がショートした。目の前の光景は今までで一番の衝撃だった。「扉はちゃんと閉めてほしいっす」なんていうカレルからの全うな言葉を聞いても尚硬直したままで考えることもできず言われたことを忠実にこなした。つまり俺はこの非常識な空間とともに取り残されたのだった。

「深夜はどれがいいと思うっすか、今日のブラジャー」

平然と聞いてくる痴女。手に持つのは強烈な赤のブラ。しかし視線はそこじゃない。隠されもせずにいる肌。「どれにしようっすかねー」と言って選ぶ動作にぷるんぷるん震えるものに目は釘づけだ。朝からあらゆる意味でショッキングな光景に目線を無理矢理にずらせば、視界に入る、白い肌。。痴女(カレル)よりも一回りでかいそれは尖った先だけ隠されていて逆にエロい。なのに表情が若干恥ずかし気に頬を染めたものなので目眩がした。

＊＊＊

「ああ、それは魔力切れっすよ」

なんともあっけなくカレルは言った。驚きもない。ということはあの状態を分かっていて放置していたのか。何とも非情だ。

けれど、カレルは勇者だ。ユエは契約しているとはいえ魔物。倒すべき相手であるのだろう。ならば当たり前の反応か。けれど、サキがこんなにも冷静でいるのは同族としてどうなんだ。俺は付き合いも短く、種族も違うらしい変態相手にあんなに心配したのに。

実はなんでもなかったのか。あの容貌が過剰に辛そうに見えただけでそれほどでもなかったのか。微熱を風邪と言って平然と病院に通うほどに厚かましい存在であったのだろうか。病は気から。うーん。

「契約してるから、倒れるだけ。死なない、弱る」

……弱る、というのは実力じゃなくて身体的なものですよねーぇ。

それってやっぱり危ない状態だったんじゃ……？あの容姿だし、

あの見た目だし、町とか宿とかいう人の眼に触れるような場所にいて大丈夫じゃないだろう。ろくな抵抗も出来ずにあわや、……いかんいかん。思考が毒されている。

アレはいくら容姿がよくとも、ただの変態である。ただの電波である。ただの、記憶喪失である。――余計心配な要素出てきた！

「毎回毎回、探してたっすからねー。そりゃ疲れるすよー」

青ざめる標葉に何を思ったのか、フォローというかあの状態になるまでを説明するカレル。

「探してた？何を」

「標葉」

なんと、ユエがああなった理由は俺にあるらしい。というか探されていたらしい。契約主へのアンテナがあるのだと思っていた。いつでもどこでも現れるから。実際は地道な努力なのか。

「突然現れては消えてなんで、標葉が一人寂しくないようにって、いつでも魔力の糸を伸ばしていたようっすよ」

糸、と呼ばれて己の掌を開いた。あの時、豊たちに伸ばした手は、こっちに来てみればユエに繋がっていた。それに安堵しなかったといえば、嘘になる。

自殺するかのようなあの落ちる感覚の中、しっかりとした掌の感触が自身の心を形地面に打ち付けなかった。気分自体はジェットコースターのようでシェイクされ気持ち悪くなったのだけれど、心は救われた。前回のように、森に一人なのはもう嫌だ。

――あれは孤独だ。

何も知らない世界で、知る人が誰もいない場所で、自分が自分でなくなっていく感覚。見失う、自分も大切なものも。そんな不安に押しつぶされそうだった。

痛いほどの静寂も人気のない町も、どこかの映画でみたような世界の終わりを思い出させた。津波のように襲い来るものが、全てを覆ってしまう前に――歌が聞こえた。

いろんな人に支えられて、今ここにいるのだ。

「それにしても、ユエさんは魔力が高いっすから、普通はないんすけどねー」
どっかで魔力を大幅に消耗することでもありました？と聞かれて、
「あ」ユエに最初に会った時のことを思い出した。
「ユエ、俺を庇ってデッド（瀕死）した」
「「それ」っすね」
うぐっと詰る。
「魔力は契約者の傍にいるだけで早く回復するっす」
傍についていて上げてください、というカレルはいつもよりちょっとだけ大人だった。

それで、と話を元に戻す。今が町にいるのは分かった。けれど、ユエはこの状態だし旅はどうなっているのだろう。
「何と！この町は魔王の住む城のある町なんすよ！」
「魔王の住む城のある町」
はあ、と適当に相槌。何の説明になっているのだろう。
「そうっす！城下町っす！勇者（うち）の旅の目的っす！」
勇者といえばそうだろう。それ以外ないだろう。ならばさっさと倒してきたらいい。
それとも何か？俺たちは勇者の旅の仲間で、全員が回復してからじゃないとラスボスには会えないとか言うイベントでも発生したのか？もちろん、ステータス以上の時に戦いに行くほど間抜けな奴もいないだろうが、それでも情けない話だがおれは戦いなんて出来ないわけだし、他の仲間を集めてくれ。正式なパーティになった覚えはない。非戦闘員だ。俺たちは荷物もちにでも決められた言葉しか話せない町の住人のアルファベットのひとつに紛れる。
「それでおめかしして、きちんとしないと、と二人で選んでたっす」
「魔王、気難しくない。でも、キレイ好き」
……キレイ好きが何だ。戦闘で汚れるだろ。

というか、勇者のドレスアップはレベルじゃなくて気分でできるのか。旅費はここで使い果たす気か。帰り道に路銀が無くなって行き倒れるのかよっ！それとも武勇伝を聞かせて優しい誰かに馬車でも乗せてもらうのか。そもそも、武勇伝なんて知れ渡ってから出ないと意味もないだろう。戦ってやってすぐなんて無理な話だ、魔王が倒されたことさえ誰にも分からない。

「やっとお役目が果たせるっすー」

――それとも何か、魔王の城の財宝を私的有用するのかっ！？それじゃ悪徳業者じゃねえかっ！日本の昔話の桃太郎は実は鬼を懲らしめた後取られた財宝を独り占めしたんだぞっ！子供の心に傷を刻む行動するなよ、仮にも勇者なんだから！

「えーっと、案内するのか？サキが？」

とりあえず冷静に、冷静に声をかける。魔王って言ったらサキュバスのサキも逆らえる存在ではないだろうに。案内するのはいいのか。というか実はこのパーティは魔王の配下ばかりだぞ。サキもユエも属性は勇者に味方していないぞ。それなのに戦闘に出すつもりか。

「他国との親交、大事」

「……カレルって、勇者なんだよな」

「そうっす。今回は魔王さんとの人口増加の問題について話しあうっす」

……親善大使？

そういや、名刺を渡されたんだった。ただの電波じゃない。俺の思考がぶっ飛んでいたのか？

――うん？普通だろ？

「とりあえず、うちらだけで行って来るっす。ユエさんはすぐ回復するはずなので、町でも観光しててていいっすよー」

自問自答を繰り返す標葉に二人はさっさと出て行った。

とりあえずユエのところに戻っておく。

一人ぼっちで放り出された世界に、ユエが同じように一人ぼっちでいた。二人になって、でも一人になった。俺がいない間、ユエはずっと一人でいたのか。記憶もないのに、ただ一人、契約した主を探して、ずっと疲労困憊で倒れるまで。カレルと出会っても、安心できなかっただろう。三人でいる時はいい。でも、二人になったら？敵同士だ。狩る者と狩られるもの。サキと一緒になって？同族が増えた。けれど、それは同じ主を共にするライバルだ。主に危険を冒させた存在でもある。

――記憶喪失のくせに、変な意地張って、弱音も吐かないから、だから大丈夫だと思ってしまう。あんなに儚い存在だと、見た目で分かるから、触れてみて、話してみて、その強がってる心に、期待してしまう。大丈夫なのだと、無責任な安堵を感じてしまう。

「ユエ――眼、覚ませ」

長い睫毛の影が落ちる頬へと指を滑らす。

陶器のように滑らかで、柔らかで、冷たいのが悲しくなるほどに胸に迫ってくる。

人形のような精巧な造りの顔。銀糸のような金髪に指を絡める。これが男なのだというのは、事実を知る今でも疑ってしまう。性別を越えた美しさ――美の集大成。美の女神アフロディテを嫉妬させてしまうほど美しいナルキッソスでさえも、ため息をつくような美貌ではないのだろうか。口を開けばただの変態だが、１０歳を過ぎ

れば神童もただの人、２０を過ぎれば天災もただの人――この男にもただ美しいだけの時があったのか。
「ユエはユエだ」
俺の知るユエは変態のユエだ。大人しい、ただ美麗なだけの存在はユエではない。今のユエでなければ、人形のように美しいこの吸血鬼は、本当の人形になってしまう。

「嬉しいことを言ってくれるね、標葉」
ぱっちりと、言葉に反応したように起きた吸血鬼。その軽口は当然、眠り姫でも白雪姫でもない。いつもの、ユエ。
というか、聞いてたのか。聞いてたのかよっ！独り言だぞ。聞いてないよな、勿論。聞かれてチャ独り言にならん！人がいるところで、それも病人のところでわざわざそんなことを言っている俺が馬鹿だ。数分前の自分に馬鹿なことは止めろ！と辛気臭く考え込んでいる自分に怒りたい。駄目だしよ。というか自分が打ちのめされたぞ、変態（ユエ）なんかに！
「……具合は？」
照れ隠しに尋ねるような口調になってしまったぶきっちょな自分を責めたい。何故なら今の俺は単に落ち込んでいるだけだからだ！反省してます。もし変なこと口走ってたらどうしよう。頭の中垂れ流しとか、完全、変態じゃん？ユエのこと何も言えないし。というか、ユエのことを考えていたわけだから余計に恥ずかしいのであって、ユエのことについてなんて深く考えるな自分！こいつはただの電波な変態吸血鬼なのだ。迷子のような心境を抱えて、子犬のように飼い主を探し回る記憶喪失者なんかじゃない！
……　ｏｒｚ
「ちゅーしてくれたら治るよ」
「そうか、じゃあ今日の出かけるのは無理だな。じっくりと休んでろ？」
「標葉が看病してくれたからもうバッチリ！」

……転身が早い。
そしてやっぱり馬鹿だ。笑顔で言い放ったユエに笑顔で返したら笑顔で即答される。なんとも、花が飛んでいるような光景だった。そんな時に、ノックもなくドアが開かれる。

こう、バーン！と両開きだったっけ？と問いかけたくなるような迫力だった。実際は内側開きの片ドアなんだけれども。
「今日は都合が悪かったっす。いなかったので明日になったすよ」
いきなり本題来た！
というかいいのか、親善大使にそんな適当な扱いで。いないからまた着てね、って。だが、カレルは事前に連絡を入れていたのだろうか。入れてなかったんじゃないか。それなら予定入っててもしかたないよな。
……でも魔王の仕事って？人間狩り――なわけはないだろう、勇者を親善大使としているぐらいだから。うん？魔王の脅威に対応するために勇者なのか？それとも平和を築いた人物としての勇者なのか？そもそも今の和平ってどう成り立っているんだ？
そんなことを考えて、けれどまったく違う場所からピンポンと音を立てて閃いた思考。
――留守、って居留守じゃないよな？
いや、まさか。まさかまさか。違うよな、違うよ。うん、違う。予感は告げるが、まさか。

「城に泊まらないか、ということなんすけど」
その前に町をみんなで散策するっす！とか発言するカレルに引っ張られ、俺ら四人は町に繰り出た。標葉の嫌な予感は続く。

「えーと？」
神とエンカウントしちゃったらしい俺。何故だ。普通に歩いていただけのはずなのに。

いやいや、振り返ればこんなことが今までにも……。後ろに連なる旅の供たち。ついでに俺の物語を軽く振り返る。
？吸血鬼の封印解いちゃいました→無理矢理キスされ契約者になって人間やめることに
？勇者にいきなり攻撃され、用心棒ついでに世界の案内をお願いしたらそのままダラダラ
？サキュバスが襲われてるのを助けて懐かれる→またもや緊急事態で契約者になってしまう
あれ、めちゃくちゃエンカウント率高くね……？
改めて気づく異常性というのはこういう時に使うものなのだろう。そもそもの前提が間違っていることにも気づかないで。だって、この世界自体、俺にはエンカウント（偶然のなせる業）だろ？
「みつけちゃった」
「あー。みつかっちゃった？」
とりあえず言葉を返す。

白衣に身を包み、ぶかぶかにさせている美少女。いや、幼女は言った。
見つけた、とこちらを見て指差し確認するので必然的にその言葉の対象は指の先、見事に向けられた俺である。
……お母さんに人に向けて指を指しちゃいけないと教わらなかったのか。
これだから最近の母親は。いや、父親の場合もあるかもしれない。主夫という言葉が出てたのはもう随分と前になるが、それが産休や子育て休暇など有給が取れるのが女性だけに限らず男性にも適用されるようになった社会体制。そんな中では、こんな言葉を訓戒と教える者は今となっては古いもの、数少ないのかもしれない。
けれど、常識として言わせてもらおう。人に習っているようでは駄目なのだ。自発的に、自らを諌めなければならない。そうでなければ職難民の多い現在では生き残れない。ニートになるのか。いや、

ニートを馬鹿にしてはいけない。株やら宝くじで稼いでいる人だってニートに分類されてしまうことがあるのだから、ニートは偉いのだ。簡単になれるものじゃない。最強に環境が用意されていなければ単なる自殺志願者になること間違いない。

今回の場合では“行儀が悪い”やら“自分が人にやられては嫌だ”などと考え付かなければならない。けれどこの思考は俺の中だけのものであって、幼女にはまったく影響がなかった。

だからだろうか、次の行動が迅速かつ危険だった。

「僕、逮捕しちゃう」

幼女はその天使のような外見ににやりと、笑いを貼り付けて指を振り上げた。

「逃げるぞ？」

蒼白な顔に引きつった笑いをして標葉は言う。当たり前だろう。唐突に出現した多数の魔力弾らしき放電する球体は目標を定めているようだ。後はＧＯサインを待つだけの状態。

幼女は相も変わらず楽しげで無邪気な笑顔を――とは言っても悪意の塊のような壮絶な表情を――見せて瞳は獲物を見つけた獣のように純粋に爛々と輝く。

本来はそのまま放たれるはずの膨大なエネルギーをすべて押さえ込み自らで膨らませ威力を蓄え続ける攻撃態勢に何の苦労も感じていないらしい。それが容易でないことも、またそれが“現実にはありえない”法則に従っていることも明瞭だ。「これは夢だ」と逃げてしまうのは簡単だ。けれど、けれど、命はどこでも誰にでも一つしかない。

「――っ！ユエ」

「うんっ！」

短い警告にユエも顔を固くして頷く。どんな挙動も見逃さない、

と視線を固定して瞬きさえ憚られる沈黙を作る。

「攻撃しまーす！」

幼女は指揮をするように腕を下した。

ユエが背後から標葉の身体を掴む。そして、跳躍。

寸前までいた場所に砲撃が打ち込まれる。

「標葉――」

「大丈夫！」

心配の声をかけてくるサキとカレルを制して前を見据える。

あの攻撃は本気じゃなかった、と標葉は分かる。属性の知識はない。けれど少なくともあの攻撃は雷や電気系のもの。ならば光の速度で突進するだろう。しかし、そうではなかった。ユエの能力が高くとも標葉を連れては光速から逃れる術などない。思い浮かぶのは一つ。

――どう考えても、手加減だ。

幼女の癖に、とは言わない。そんなことを言えばユエは、カレルは、サキは……と人外なる旅の仲間たちにも適応されるだろう。本気でない、ならば何故こんなことをして見せるか。

今も尚、幼女はこちらを見ている。笑顔で、じっと、何も言わずに、瞳だけが穏やかな知性を湛えて、妙に老齢した印象を抱かせる。まるで観察しているようだ、と標葉は思う。

そもそも、自分は何かをしただろうか。あったことはないはずなのに、知られているということは何らかのことに標葉が関わりあったということだろう。狙われる人物が自分じゃないにしろ、それにしたって“狙われる人物”には関わりがあるということだ。

何らかの嫌疑がかけられている。そしてそのことはユエたちには関係なく、標葉にのみ関わりがある。――そんなもの、一つしかないだろう。

「この世界とアッチを渡ることに関係する――」
「正解！」
思い浮かんだのは声。そしてあの夢だ。
契約を持ちかけた黒衣の存在。深紅と漆黒の大鎌を持つ赤い瞳。
今思えば、あの問いかけに自分は応、としたのだろう。どんな内容かはわからないが、それにしてもこのような事象が起きているということは“そういうこと”なんだろう。
この世界に誘ったと思われる存在は、水を起因にしてこちらとあちらを繋ぐようだ。その“声”は標葉にいくつかの情報を警告として伝えてきたように思える。
「逃げて」――何から？
「神が来た」――神から逃れたい？
そして、この目の前の存在は――「神さまだよ！」

心を読むタイミングで幼子は言った。思考に上るよりも早く、読み取った。それが神の偉業だというのならばそうなのだろう。あの攻撃にしても神ならば出来るだろう。
けれど、神ならば出来るというだけで他の存在に出来ないとは限らない。推測だって立てられるし、読心術もある。何より単に名乗っただけともいえる。タイミングが良かっただけで。攻撃にしても、この世界の法則は知らないが、あれは魔力と呼ばれるものによって起される現象によく似たものだ。勇者であるカレルだって、未だ知らぬ魔王にだって威力は考慮にいれなければ真似事は出来る。――
「神であることの証明――でもそれって自分を自分って証明するのと同じで、誰にも判断材料がないよね？」
またしても、心を読むタイミングだ。これを偶然と呼ぶことも出来る。必然とも、神であるからとも思える。けれど、……そんなことは標葉には関係のないことの一つである。
（心が読めるか読めないかはどうでもいい。神であるかどうかさえ

も関係ない。ただ、）
「そうである、という事実だけが必要？――面白いね、標葉って」
死神が選んだだけの事はある。
神は漏らした。
「あれ、神とは認めてくれるんだ」
形は幼女である。名乗りは神だ。ならばその存在を指す上でどちらを選んでも一緒だった。共通認識でさえあればいいのだから、そんなことは些細なことに変わりない。
ユエたちはこの心の会話を知らず、ただ神が一方的にしゃべっているようにしか感じれないだろう。
つまりは、神にしても幼女にしても独り言の大好きな奴でしかない――。
「意外と辛口批評だね……でも！反論すると！僕は一人じゃないんだからっ！」
一人は一人である。やはり幼女。言語的に失陥が……
「神さまね！一杯いるでしょっ！死神も神の一人なんだよっこの身体をみんなで共有してるんだよっ！だって僕らは人には見えないからっ！」
必死に反論する様は微笑ましい。理論が理論として成り立っていないことも微笑ましい。電波に洗脳教育でも受けたかな。
「標葉、可哀想だよ」
「そうっすよ。神さま、ちっちゃいし淋しいんす。遊んで上げないと駄目じゃないすか」
「家、どこ。送る」
「いいけどさ、別に。信じてもらえなくても、目的果たせれば」
完璧に俺以外の奴らからも信じてもらえてなかった。それもそうだろう。幼女なんて身体をテイストするからだ。例え神にしてもそのセンスを疑う。お前は変態か、と。どんな嗜好だろうと、自分に被害がなければ許容も（自負して）みせている標葉にしても何か一言を突っ込まねばならぬような倫理がそこにはある。

――しかし“目的”とはな？

「置いてくなー！僕もみんなと行動するもの」

……昔の人の言葉にこんなのがある。「君子危うきに近寄らず」

いきなり攻撃を始める相手に、それがたとえ幼女であるとしても、不用意に近づくことは避けたい。面倒事に巻き込まれることなど十分に理解しているはずではないか、身に染みて。

「だって、あの子が接触してきてくれないとどうにも出来ないし」

疑問には無視をしてその謎な思考を一つ零れさせた。

つまりは“あの子”――死神と思われる――が標葉に接触を図る機会を狙って何かをするらしい。それはあの攻撃性を見てから言えば、良くて抵抗を悉く削ぎ落とした後での拘束。悪くて、死――。果たして死神に死という観念はあるのか、神が命を奪うことをよしとするのか。

「面倒じゃん？検索かけて追いかけるの疲れたよー！！」

標葉の心の問いなど分かっているくせに意味深な笑みを浮べたまま、またしても自己弁護の都合を持ち出す。今まではユエが標葉に対して行っていたアンテナのように大規模な検索を掛けて死神を追い回していたのだろう。尤も、先回りが出来なければ“世界”という大通りでは路地裏に追い詰めるなどということも出来ず、ただ追いかけっこを延々続けていたのかもしれない。それをどのくらいの期間行っていたかはわからないが、少なくとも標葉がここに来るようになってから既に四度目、四日が経っているのだ。

待ち伏せという方法が思いつかないなど、いや、そんなはずは……。仮にも神を名乗る存在がまさか今更そんなことに気付いたなどと……。

「いいんだもんっ。僕は美少女だから許されるのー！！」

そして幼女で僕っ子なのは狙っているのだろうか。

「僕っていうの言い方可愛いじゃん。だから使ってるだけだよー？」

「それに僕、神だよ？神様に性別はないもんね」

幼女という表現も考えねばならぬらしい。ということはただの餓鬼か。

「……それ、何気に一番傷付いたな」

えい、と言って神は手をちょん、と何もない空間に触れさせる。

その、寸前

《嫌――っ！！》

その声は、胸の潰れるような悲痛を叫び、標葉の視界はぐにゃり、と捻じ曲がる。

閑話　ひっくり返す以前

標葉はその時立てなかった。
体中が沸騰するような熱さを感じ、けれど全身から血の気が引いたような眩暈がした。身体は平衡感覚を保てず、膝が地面にぶつかる。腕を着きたてたにもかかわらず、ふわふわとした感覚で、何も考えられず目の前さえチカチカした。意識が薄れようとして、薄れることが出来ないでいるようだ。グァングァンと耳の奥の方で鳴っている。世界の認識が上手くゆかない。
それはきっと、全身の血が沸騰したかのような感覚で、熱に魘された身体は意識する間もなく力が抜けて身体を地面の冷たさに預けた。

それからどのくらいの時間そうしていただろう。時間間隔などあの状況ではかれるはずもない。けれど漸く気分が良くなった時に視界を開き辺りを見回してわかった。
――血を媒介に世界を渡ったのか。
何も水でなくとも良かったらしい。世界の橋に必要なのは液体、ということか。それが日常で使われるならば、一般的には水が一番だろう。以前までの数回を回顧しても他に液体というのはなかったように思える。それを、今回は標葉の身体の中にある血で行った。
神が何らかの動作をしたのに対する反応だった。悲鳴のような声で、拒絶が聞え、――ここにいる。
それは多分、時間がなかったのだろう。
神が何かをする前に標葉を神から移動させる必要があったのだ。だからこそ、水の媒介がないあの場で、最終手段として血でもって渡ったということだろう。
（そういえば、……二人はどうしただろう）
目の前で友人が消えて――それは夢なんかじゃない。現実のもの

と教えられる。
圧倒的に、それは虚構なんかじゃない。自分ひとりだけが関わっているのならばそれで住んだ世界が、けれど決定的なまでに現実感を持ってしまった。

「標葉――！！」
それは遠くから聞えた、確かな声。
香寿だ。どこにいるのだろう、と周りを見渡す。見ればそこはもといた屋上だ。何故か時間はさほど変わらないようで、夕方の橙色が視界一杯に映り込む。
手摺から身を乗り出すのは出来れば遠慮したかった。屋上からのダイビング（偽）を思い出しそうだ。しかし、下の方から声が聞こえたのだから、しかたない。覗き込む。
「香寿――っ！！」
叫び、目に入った。小柄な影。
素早く顔を上げた香寿に場所も考えず前のめりになった。だって、涙を溜めていたのだ。その大きな瞳に、視界が見えなくなるんじゃないほどの涙を溜めて、頬に流し、泣き声交じりの叫び声。香寿はびっくりしたような顔をして、涙を止めたが驚いたのは標葉の方だ。近くには豊がいない。こんな状態の香寿を一人にさせるべきでない事はわかっているだろうに。そんな危険は冒すべきではない。
香寿の素顔を知る者は少ない。しかし、だとしてもこの状態は非常に危険だ。――以前の愚を犯す可能性がある。痛みと理不尽、不満ばかりを一方的に与えられた事件（トラウマ）。
（そんなに走り回って、泣きまわって、豊と別行動をするほど……それほど不安にさせたのか）
――これは参った。
誤魔化すことなぞ、出来ない。一部始終を語りつくすことは免れない。それが誠意であり、巻き込んだ“責任”だ。
「か――」

ズルッ――
滑る音、腕だ。身体が前に、虚空へと近づく。
「標葉！」
香寿の声。身体は反射的に素早く動き、バランスを取――れた。
「っぶねえ――！」
ぐいっと身体が後ろに流れる感覚がして視界が半回転、空を向いた。
豊の声と背の感触。腕が腹に回っている。仰向けに、二人で倒れた？
「あ、れ……豊、いつ来た？」
「……最初に言うことがそれかよ」

「標葉！豊！だい、じょ……ぶ、ですっか……！」
タンタンタン！――バダンッ
余程急いできたのか、屋上までの階段を全力で上がってきた香寿は途切れ途切れに問いかける。豊の手を自分から解き、解き……としていた標葉は顔を上げて立ち上がる。ヒラヒラと手を振って笑顔を見せ、大丈夫の意を告げる。
「よかった……ぁ」
へなへなと、安堵の溜息をついて膝を着く。先ほどまであった悲しげな様子は拭い去られ、今は脱力に全身を軟体動物のようにしていた。……体力がないから。
ちなみに、標葉もスポーツタイプではないので、体力はそれほどあるわけではない。グランドから屋上まで走ってきたならそれなりに疲れるし息切れもする。煙草を吸うような不良ではないが、肺活量が少ないのだ。しかし、運動神経はそれに比例するものではない。この三人の中では一番動きのいいのが標葉だった。
（……でも、今のは――）
豊が駆けつける前に自分は体制を治していた。それは、本来なら出来ないはずの動作だ。

けれど、あの時は咄嗟に身体が動いた。いつも以上に、反射神経とかの問題以上に、正確で義務的な落ち着いた動作をして見せた。
（――どこかで、わかっていたような気がする。もう、“否定”できないんだって）
契約――したじゃないか。
あの場所で、幾つ言葉を交わした？どれほどの時間を歩んだ？何一つ、信じていなかったというのか？――彼らの存在を、本当に現実にないものと考えていたのか？

「香寿、豊」
脱力した香寿に手を出し引っぱり上げ、もう一度先ほどまで立っていた場所まで行った。
地面を見下ろせる手摺の、そのすぐギリギリの場所。
「……ここから今、落ちかけた」
標葉の様子を読み取ってか、二人は静かに話を聞く。
「でもさ、大丈夫だった」

「俺、――もう、“一般人”じゃない」
吸血鬼と契約して、サキュバスと契約して、勇者の一撃も防いだし、神様にも会った。
――死神とも、契約をした。

「……話がある。聞いて、ほしい」
もう、戻れないところまできてしまっているような気がした。
「俺たちも、話しがある――この一日、どこで何をしていたのか」
「え……？いち、――に……ち？」
うそ、だって、……え？

「１０月の３０日の夕方。……標葉が僕らの前で突然いなくなって、丸一日」
「何があった？いや、何に巻き込まれてるんだよ、お前」
厳しい声が重なり、問いかける。
混乱する。だって、一日なんて経過――嘘のようにしか思えない。あっちで過ごした時間はこちらにも作用する。だが、それにしたってまるで誤差がない。現実に、どこか海外にでもいたかのような時間差しかない。夜に落ちて、朝に目覚める。現実に？この地球のどこか別の場所？――ゲームの中でも夢でも、異世界でもない……この世界で？
（馬鹿げた空想だ）
ドでかい虫のようなモンスターに吸血鬼に勇者にサキュバスに神様。話じゃ魔王だっているらしい。話す言葉は同じで、でも文字は読めなかった。制服は驚くに値する格好じゃなかった。黒い髪に黒い瞳も、多種多様なあの場所で目立つ事はあっても特異ではなかった。
そんな存在を嘘だとは言わない。でも、この世界に、“同じ場所”にあることだって？
――あの事件のことを髣髴とさせる。
標葉が人々に嫌煙される切欠ともなった、事件。現実に非現実の混じった、過去一度だけあった交差点。現実に起きた、ファンタジーのような、事実。

「神前玲菜」
香寿はその名を口にした。
弾けたように豊は見たが、香寿の視線はあくまで、小さく肩を揺らした標葉だ。小さな挙動。予想していた、辿り着かれると分かっていた。
「標葉は頭がいいから、きっと分かってた。僕らに彼女のことを思

い出させたくなかったんだよね……」
だから標葉は二人に隠していた。何も話さず、黙っていた。“思い出させたくないから”
「――そう、なのか標葉。今回のことに、“魔術師”が関わっているのか」
始まりは一年半以上前、この高校に入学した時からだった。
神前玲菜――彼女は香寿と同じ小学校、中学校だった。高校でも同じ。二人は友人ではなく、けれど以前はいつも一緒にいた。香寿はずっと、彼女に虐められていたし、パシリのように扱われていた。ずっと、標葉たちに会うまで。

「何やってんだよ、お前ら」
「イジメなんて入学して早々、ないんじゃないか？」
不良なんかじゃないのに、見た目が派手だから不良に見える二人はイジメと思しき現場を見た。通り縋っただけだ。なのに、春にもかかわらず不幸で陰湿なその影が気に食わなくて標葉は口を出していた。豊もそれに合わせてくれる。
「なんだよ、文句あんのか？関係ねぇだろ」
代表して口を開く男は上級生のようで、けれど二人は引くことはなかった。何故上級生がイジメなんてものをしているのかなんて関係ない。学年なんて生れたのが早かったから、というだけで威張ってもらっては困る。どこぞ出踏ん反り返ってるただの馬鹿にしか思えない。コレで体型が横広のオデブだったら、もっと笑いものだ。お前は加害者して被害者に見られるタイプだ。悲しいかな、小者の雰囲気も出ていない。ゴマすり上手の豚で十分なのだ。
そのくせリーダー格を貼っているのはどういう了見だろう？
「かわいそうに。中身が幼稚で上級生なんて威張れないな」
彼らの間から見えたのは小柄で、細っこいのを気にする標葉よりも華奢な、それこそ中学生にしか見えないような少年。大きな眼鏡

をかけていたが、驚いたようにこちらを見た瞳は大きく、涙で潤んでいて、思わず
「そんな美人に手を上げるなんて、人類の宝を潰す気かよ！」
「は？」
思わず、怒鳴った。
呆気に取られる彼らを前に豊は標葉のことも彼らのことも気にもせず右ストレートを放つ。
標葉が馬鹿に馬鹿なことを言って気を引いている間にあっけなく勝敗を着け、王子様は出来上がったのである。……三人の始まりの物語だ。
そして、同時にそれは標葉を巡る物語の土台を作った。

閑話　昔事（前書き）

過去に迫りまっす！

閑話　昔事

「ねえ香寿。私ね、思うの。何でアンタが標葉さんたちといつも一緒にいるのか」

唇に手をあて、ほんの少し首を傾げる。そんな動作の似合う子だ。

「　っ」

サラリと揺れる髪に、ピンクの綺麗な爪。派手な化粧をして異性の気を引こうと必死な同級生たちとは一線違う、綺麗な存在。お高く留まっているわけでもなく、その性格はただ、純粋に――歪んでいる。

笑顔で殺戮を犯す殺人鬼。無感情に狂気を振るう犯罪者。――神前玲菜とはそういう存在であり、香寿にとっては絶対的な存在だった。

刷り込みのように恐怖を刻まれ、逆らえない存在へと何時しか変わっていた。彼女の笑顔が、恐れを引き立てる。

「ねぇ、――香寿？私、わからないんだぁ……君があの二人の傍にいて、私は違う。どうしてなのかなぁ？」

「――っあの、ふたり、は……やさしく、てっ！だから――っ」

カツ、と靴の音が鳴るのに紡ぐ言葉を忘れた。震える唇は何の音も出さない。

「私、標葉さんが好きよ？豊さんだって。カッコイイし、何でも出来るすごい人たちなの。女の子はみんな憧れてるの」

紹介、してくれるよね――？

お願いの言葉はけれど、真実命令だった。香寿には酷薄に聞えるそれに背筋が空寒くなる。

「……はい」

頷く以外、なかった。

放課後の教室。いつものように男たちに嬲られ、彼女の前に引き出された。彼らは今も帰ることなく、この部屋の外で見張っている

のだろう。そんなことは幾度も繰り返された日常の一コマでしかない。
標葉たちがあの時助けてくれたとしても、その後話す時間が時々出来たことも、この日常に変化を与えない。二人と出会う前から行われてきた事は、身に染み付き、香寿に慣れさせた。暴力を振るわれ、脅される。逆らえない状態で笑顔を正面に実行する選択しか用意されない。そんな事は当たり前で……優しくされたことが辛かった。優しくされたからこそ、辛くなった。現状(いま)から逃げ出したくなった。そんな無理な願いをするから、こうなる。二人に迷惑をかける。
「今日は二人に紹介したい人がいるんだ」
「神前玲菜です。これからよろしく」
「香寿は趣味以外に疎いし気も回らないでしょ？だから心配だったの。新しい友達なんてそんなにすぐできるのかなって」
「二人がいい人で、ほんとによかった」
「……俺は香寿が気にいってるから心配ないよ」
標葉の言葉には棘がある。それはいつも無口な標葉が口を開いたことも、その不器用なものいいから来るものでもない。明らかな、棘。それはもしかしたら、気のせいなのかもしれなかったけれど、彼女はそれを感じ取ったはずだ。一瞬の硬直、貼り付けられた笑顔で言葉を返す。
「――そっか。豊くんも？」
「まだ、あんまり知らないから。どうとも」
濁す豊にふぅん？と意味深な感想を抱く。それは警戒と、愉悦。
そうして僕の日常は彼女に蹴散らされるだけだった心に安堵と平穏を、そして再びの曇天を得た。標葉と豊。二人の間に歪に入り込んだ自分と、その傷を広げるように入った玲菜。
――それがどのくらい続いたか。実際にはほんの少しの期間にしても香寿には長い時だったのは違いない。四人はそのまま納まって

いるかのように見え、どこか不調和だった。だからこそ、限界は――三ヶ月。
その後に、あの事件は起こった。

「関係ないよ」
標葉の言葉に回想へと向かっていた思考が現在へと切り替わる。

それは隠し事も嘘をついているようにも思えない声音。しかし、それが完全なる無関係だとも思えない。彼女の事件は必然と偶然の重なり合った――標葉の特異体質によって起きたもの。
彼女は豊を手に入れようとして、僕を無力化して、そしてその影で協力していた男。
「“魔術師”は？また、狙われてるの――その、標葉の」
「……魔力」
一瞬音が止んだ。

標葉は発言を悔やんだ。明確に口にすることの、その本当の意味。それは認めることだ。
「非、現実的。でも、それが本当のことだって、俺たちは知ってるんだ」
信じるよ、と豊は言った。どんなに荒唐無稽なことでも。
「僕たちの日常はとても脆く、壊れやすい」
そうだ、あの時、標葉は――知った。
現実は危うい。そのすぐ隣で、危険があることに気付かず皆生きている。
この学校の生徒たちは、知っているだろうか。ニュースを見て、テロが起こるようにそれが自分の身に降りかかることを。新聞に犯罪者が載って、それが自分の顔になる可能性を考えない。思考は停止し、自分との隔たりを造っている。

けれどそれは無意識なる逃走の果てであり、本能的な無理解だ。すぐ隣にある可能性を考えること、可能性でしかないことに怯えることのどこが幸せか、生か。だから人は直ぐに見落とす。そして標葉も、豊も、香寿もそうだった。

標葉は特別だった。けれどそのことに気付かず過ぎていた。けれど平和は砂上の上にしかない。突然やってきたそれは、壊していく。“魔術師”――そう名乗った嵐は、“魔力”を求め、標葉の元へ来た。

「そんなはず、ないのに――」

「標葉？」

標葉はいつのまにか俯いていた顔を上げた。

「俺――信じたくない。けど、否定も出来ないんだ」

泣き笑いのような顔で、途方に暮れた子供のように、そっと呟いた。

まるで大切なものなのに、認めたくはないというように。

香寿は手を伸ばす。握り締めた掌をそっと包み込む。

あの時、彼女から解放してくれたのは標葉だった。だから、今度は標葉を解放してあげたい。標葉を縛る、その現実や非現実から、救ってあげたい。

「しん――」

フッ――と薄くなる感触。確かにあったはずの体温が、けれど、目前で掻き消えた。存在がなくなってしまったかのように、さっき会えたばかりだというのに、その存在は希薄に、――標葉はいなくなった。またしても、突然。目の前で。

（手は、きちんと握り締めていたのに。ちゃんと、触っていたのに――！！）

第五夜（前）　静かなる夜に不整脈（前書き）

魔王登場！
サブタイトル：魔王さん訪問
ライバル登場？ユエ！頑張ってっ
エロになりきれているかどうか分からないエロが入ります。

第五夜（前）　静かなる夜に不整脈

「やあ！よく来てくれたねっ歓迎するよ！」
「――っ！？」
「いやぁーテンちゃんがいてくれてラッキーっす！これでいつでも標葉を確保できるっすよ」
「便利」
「うーん。座標が5ミリほどずれたぁ……」
「標葉だ！標葉の匂いだ！標葉の感触っ！」

なに、これ。ギャグ？
――このタイミングで？呼び戻された？誰に？
……そんなの決まってる。そんなことが出来るのは、
「神」
「うんうん、信じてくれたんだね！」
「マジ、ふざけんな？」
ちょっと怒りマークの標葉くんです。
あの声は聞こえなかった。つまり、死神が関与しているわけではない。
思わず溜息をつきたくなる。しかし、それは自らを痛めつけるかのような行為だ。幸せを半減させる。気を滅入らせる。更に気分が悪くなる。……そうとわかっているのにつきたくなるのが溜息というものだ。
「はぁ……」
あの場所に今すぐ戻れるのならば溜息ぐらいいくらでも吐こう。あのタイミングはない。絶対、狙っているとしか思えない。
「標葉！この城に留まらない？僕の恋人としてっ」
「なーに、こいつ。トチ来るってんね、標葉に馴れ馴れしい」

声の低いユエに顔を向ければ思った以上に至近距離で胸がどっきんこしたが、表には出さずに素直な心情を吐き出す。
「……お前も十分、初対面から馴れ馴れしかったぞ」
初対面からセクハラよりかは一目ぼれで告白の方が遥かにマシだと思われる。おちらにしろ、同性から受けるものではないと思うが、そんなことは向こうで慣れっこだ。香寿がすぐそばにいたからか、免疫がついた。己に降りかかることはなかったにしても、何故か俺を通して告白をしてくる奴が多かったのだ。勿論、そんな輩には丁寧に本人に言え、と送り返させていただきましたが。……体育館裏や放課後の空き教室に呼び出すなんてベタな例を見た。皆、考える事は一緒なんだ、と思わず関心。
ああ、いやしかし。ここにいるものたちならば常識なんてものはどこかに置き忘れた以上に「え、常識？なにそれ、食べ物？」という感じに行動はド直球に授業中の教室で「ねえ！いまから気持ちイイコトしようよ！」ぐらい言ってしまうかもしれない。いや、変態ならば「授業中に隠れて、ってシチュも萌えるよね」とか言って悪戯を仕掛けてきそうな気がする。
……うわっ！本当にありえそうで怖い。

背筋が寒くなって咄嗟に自らの身体を抱きしめるようにした。
そもそもなんで変態についての考察を述べているのだろう。そんなことの前にまず背中に張り付く物体をどうにかすることの方が先決だろう、己が思考回路よ。
しかし元気だ。ユエはつい先ほどまでいなかった標葉を捜すという作業を止めたのだろうか。あっちに居る時にはいつもアンテナを張っている、とかそういう記憶は間違いか？それとも向こうにいる時間が少なかったため？
……止みあがりだしなぁ。

――しかし、不自然なほどに向こうにいる時間が少なかった。

三時間もいただろうか。そもそもが可笑しい。コチラから向こうへ行く時に血を媒介に移動させられたというのに今のはまるで媒介がなかった。雨は降らず、血は茹らず、水溜りもなかった。あったのは、地面と空と友人と、話と、涙。……涙？

「『……涙なんて少量で媒介になるのか？そもそも俺は接触してもいなかったし』」

神が真似る。標葉の心を読むようにして、口に出した。

「神さまだからね！どんなに少量でも問題はないよ。ただ必要なのは“映す”ことだから。必要なのは水でも液体でもない。例を挙げれば鏡。――瞳」

ファンタジーやホラー小説によくある話だ。“異界”へと通じるには森と、水と、鏡というのが通じやすい。日本でも昔は水や鏡を神聖なものとして考えてきた。“そういう”もの。

「“異界”やどうたらでなく“移動”のための認識として送受信両側が見える場所でないといけない、ってことだけどね」

召喚の場に“何か”があったら、危険ということか。同じ場所に二つのものが同時には存在できない。だから、何もない場所と何もない場所でなくてはいけない。でないと身体の損失を招きかねない。身体から何かが突き出てたり部分的に身体が消去してたり、地面がなかったり。

……うわぁこわい。

ところで、標葉に無視されっぱなしの男はしょげていた。初対面の癖にスルーしてシカトして、存在無視な標葉も悪いが、初対面からあんなんなことを言う不審者も悪いと思われる。

黒髪黒目。……標葉には馴染みがあるものだ。ユエやカレルなんかより、よっぽど。

けれど、その美形さは類を見ない。一瞬だけしかみなかった、その顔がとんでもなく美しいくものだということは分かった。けれど皆

に批判されシカトされたためか、ウジウジとしょげ返って俯き、のの字を書いている。とんでもなく残念な人だ。標葉の周りにはとても残念な人が多いが、その中でも一番に上がるほどの残念な人だ。何故って、変態やなんかよりも、とっても“ウザイ”から。

「うわー辛口っすね」

「口に出てるよ、標葉」

あれ？……そうか。でも、まあ、いいか。別に親しい人でもない。他人だ。

“日本人”というわけでもなさそうな不審者に、親切にするほど標葉は優しくなかった。

「勇者御一行、話を進めませんか？魔王様も公務があることですし、お仕事しましょう？」

従者にあやされる“魔王様”。

彼は慣れているのだろう、焦る感じがない。どちらかと言えば、手馴れた、日常的な瑣末の事象のようにさっさと促す。

「コホンッ！――では、気を取り直して僕は魔王のベルファグラクト・リーナス・ブライ「長い」――リベルでいいよ」

（従者に突っ込まれたぞ！！魔王！）

通称を口にする魔王は立場が低い。いや、頭が上がらないのか？迷惑かけているから。

上下関係を無視していいのか、以前に名前の否定って酷くないか？俺たちが言うなら未だしも、自分の部下に言われるなんて。少なくとも、標葉は最後まで聞こうと思っていた。覚えられずとも、聞くだけ聞いとけばコレ誰だっけ。なんてことにはならないはずだ。しかし、他の皆はそうでもないらしい。元々が同族で、部下であるサキは知っているはずなので除外する。

しかしユエは自分のところの王様だろうに、聞いてない。標葉にへばりつき、匂いを嗅ぎ、頬をなすりつけ、腕で拘束してくる。……記憶がないので、加えてずっと寝ていたということで今代の魔王の名前を知っているわけないのに、だ。

カレルは聞き流していた。親善大使の癖に、勇者の癖に。ライバルの名乗りを互いに聞いてから切りかかるところだぞ？そして最後に「久しぶりに強い者が来た。覚えといてやろう。……違った形で会えたなら、よき友となっただろう」みたいなのが定番じゃないか？やられキャラは「俺は〇〇だ、次会う時まで覚えてろー！」「ふっ……もう忘れたさ」みたいなやり取りだろうが、どちらにしろカレルには当てはまらないようだ。

「この人が標葉で、ユエさんの契約者っす。サキの契約者でもあるっすよー」

なんて、簡単な紹介。

……俺だけか？俺だけの紹介なのか？

そもそも、魔王のいる場所に呼び出されたという事はそれ以前に彼らが自己紹介済みということもありえる。つまり、俺のためだけに紹介していたのか。

（正直に言おう。可哀想だ）

紹介が始まる前から無視していた俺へと自己紹介。しかも、名前は途中で打ち切られる。哀れだ……。頬に唇を近づけてくるユエに対して手を間に入れて防ぐ。頭をそのまま押さえつけて近づけない。そんな片手間に同情１００％で自分から紹介をする。本当は関わり合いになりたくないのだが、まあ、しかたがないだろう。

「あー標葉です。魔王さん？ハジメマシテ」

力強く手を押し返し、どころか掌に口付けようとしたユエの頭をグキッ！と横へ方向転換。

「はじめまして。それでね？カレルちゃんとの話し合いは決定までに日数が掛かりそうなので、滞在してもらうことになったんだ。僕はこれから公務だから案内できないけれど、アルファルトをつけるから、城も街も自由に見ていいから、ゆっくりしていってね」

「あ、はい。なんかありがとうございます」

アルファルトさんとはあの従者らしい。魔王が向ける先へ視線をやれば目が合った。一瞬後に目礼される。驚いているように見える

のは気のせいか。……なんだろう、この感じ。
――変な気分だ。久しく感じていなかった、嫌な視線。
驚かれる。遠巻きにされる。嫌われる。……そんな方程式がいつの間にか、標葉の中には出来ていた。二年前にはそれが決定的になって、けれどそれ以前から感じていたものだ。あの輝くような家族のうちに生れて、ずっと身近だった。
「標葉――また、嬉しい。こんなにすぐ会えるなんて」
満面の笑み。
天使の微笑みと言った方が近いかもしれないそれを間近に見たからか、呆けたような気分になってぼんやりとその美貌を見た。きっと、標葉の気持ちが沈んだことを機敏に察知したのだろう。この存在は契約しているから、以上に標葉に心が繋がっているような気がする。何故だろう、いつもタイミングがいい言葉を吐く。心の隙間に入り込んでくるようだ。精一杯、心を砕いてくれているのがわかる。
いつのまにかユエの顔が困ったような顔になっている。ずっとその顔を見ていたからだろうか、いつもならば目が合った瞬間にセクハラ発言盛りだくさんのはずなのに。
こんな時のユエは、いつものように変態じゃないし、優しく、暖かくて、落ち着く。コレが本当のユエなのか。人は二面性がある。けれど、それは魔物にも適応されること？ユエも、心のそこでは何か別のことを――俺なんかと契約したことを後悔したり、しているのか……？
「アルファルト、標葉のベッドは僕と一緒ね」
魔王の、リベルの言葉が耳に入り視線をズラした。黒髪の至上なる存在は周囲に華を撒くような微笑を浮べている。美形だ。ユエのような美女の雰囲気を持つ美形ではない。しかし、美人だ。ユエと並ぶと絵になる。
「ふふ。疲れてるだろうし、僕を待たずに寝ててもいいよ？」
「ずうずうしい。なに、こいつキモイ。標葉は俺と一緒なんだけど」

不機嫌な声とともに酷評と自分勝手な主張（決定事項）が上から降ってくる。頭の上に乗せられた。顎が動く振動が直に届いてなんだか変な気分だ。首は痛くないのだろうか、さきほどものすごい音が立ってしまったので心配したのだが、それも必要なかったみたいだ。

「いや、俺一人で寝れるし。お前らこそなんだよ。子ども扱い？男と床を一緒にする趣味なんて持ち合わせてないけど」

「二人、険悪。標葉、取り合ってる」

「標葉くんモテモテっすねー。うちも便乗するっす」

「つまんないなー！もっとドロドロがいいよねー」

サキが珍しく饒舌に、カレルと神はノリノリで、三人に言葉を下す。

「とりあえず、この後どうする？」

夕方が夕闇へと移り変わるように陽の色は混ざり合う。

窓から見える町は美しい様相を見せていた。標葉はもう血の様な赤に囚われることなく、そのグラデーションにただ美しいという感想を得る。

忌まわしい記憶も、香寿たちのことも忘れて、ただ現状に染まるのが精一杯だというように、それだけしか考えなかった。

「家族サービスならぬ契約者サービスっすよ」

こそっと耳元で囁くカレルを追い払った。

あの後、アルファルトに各自部屋を案内されたのだが、何故だか女子組は標葉の部屋に集まった。我が物顔で部屋を物色する神にベッドに横たわって猫のように丸まって寝転ぶサキ。そしてやたらとデカイ貸し与えられた自室にショックを受けながらソファに座り、考える人よろしく頭を深く垂れたのであった。

と、そんな標葉にカレルは近づき、言った。

「思うに深夜は触れ合いが足りないっす。愛がたりないっす！」

拳を握って力説するカレル。いつの間にか他に命の視線も釘付けだ。
しかし、あの状態のどこが触れ合いが足りないと見えるのだろう。四六時中、へばりついて。
……確かに、今はいないのだけれどもさ。風呂だ風呂。
長湯が好きだというユエは一人、露天へと走った。標葉を置いていくほどなのだから、それは相当な風呂好きなのだろう。標葉も誘われたのだが、女子たちに連れられ部屋へ連行。さすがのユエも反論できず、「待ってる」とだけ残して消えた。
……どれだけ待つつもりだろう。女子の話は長い。
「――このままじゃユエさん可愛そうっす」
いつの間にか話は進んでいたようだ。しかし、漢字がひどくサディスティックに感じるのはなんでだ。女子の変態さには加虐嗜好があるのかもしれない。サキもテン（神に名前がないと聞いてカレルが名付けたらしい）もいつのまにかカレルの意見に頷いている。
いやしかし、考えてみればそうかもしれない。ユエは最初の印象こそ強かったが、以後はおとなしい。他の奴らのキャラが立ちすぎてて薄いぐらいだ。見た目は派手なのに、精神的には案外大人なのかもしれない。記憶喪失のせいで時々不安になったりしている部分が感情を抑えない変態な行動へとなっているのだろう。
（寂しがり。セクハラは保護者に触れていたい甘え？“独占欲”か？）
「大丈夫っす、うちが完璧な計画を立てるっす！」
標葉が思考する様を同意と考え先に進めるカレル。サキも無表情ながら瞳をキラキラと輝かせ、いつもより感情のこもった声で主張する。
「雰囲気、重要」
「服は私が見繕ってあげるっ」
いつになく張り切る女性陣。たまにはいいか、と標葉は止めもせずに風呂の準備をしてさっさと部屋を出て行く。

その背後で怪しく笑う三人から寒い電波を受け取って標葉はタオルをギュッと抱えなおした。
「さっさと風呂言って温まろ」
背筋の凍る寒さに背を丸めて足早にユエの待つ露天へと向かった。

「魔王、明日公務。チャンス……」
部屋の中では本人もいないまま未だに会話が続けられている。
「ナイス案っす！」
「可愛く仕立ててあげるよっ」
「足が綺麗なんで出すっす！セクシー路線っす！」
決行は翌日。着々と案を練り上げていく。

「標葉？」
「ッ！！」
一瞬、声をかけてきたのがユエだと分からなかった。
銀髪の長い髪は濡れ、白く艶かしい首筋に滴を落としながら髪留めで結い上げられていた。細い身体は最初、後ろを向いていて、だから肩越しに振り返られて、外の空気が冷たいせいで余計に湯気が立ち上るその場で、ユエを女性と間違えた。
身体を向けようとしたその人物に対してクルリ、と後ろを向いてしまったのも当たり前だと思う。“不可抗力だ”とか頭の中で呟き視界を閉じてしまったのも極自然だろう。
そんな標葉の反応をわからなかったのはユエだけだと思う。湯船の中から立ち上がる音も、ヒタヒタと詰めたい石の上を歩く音が耳に大きい。標葉の顔は次第に赤くなる。
「標葉、どうしたの？」
声はユエと同じだったのでその人物がユエ本人だということもこの時には既にわかっていた。それでも、近づく気配に顔が赤くなる。羞恥と、もう一つの思いで。

「標葉？」
「い、いま近づくな！」
慌て気味に叫ぶ。すぐ真後ろで聞こえた声に思わずしゃがむ。
美人なのだ。それはもう、この世のものとは思えないほど、絶世の美女、傾国と呼んでいいほどの。そんな人物が、風呂場で、無防備に自分に近づく。
（猥褻物陳列罪――！！）
心の中で叫ぶ。裸なんて見れない。特定の部位を見たわけでもないのにこう思ってしまうのは必然だと思う。同性であるにしても、目の毒だ。男だと分かっているのに、それでもヤバイ。
（危険人物だ！！）
誰がって、ユエもそうだが、自分もだ。
普段から人に変態だ、セクハラだ、と訴えながらも今の自分はどうかしてると冷静な面で見るように、胸が忙しく動きまくっている。なんということなのだろう。ゆっくり風呂なんて浸かれない。静か過ぎる空間と雰囲気を作り出すこの場の問題もある。
「……標葉。その格好（ポーズ）、すごくそそる」
やっぱりユエは変態（ユエ）だった。

（一気に頭冷えた）
何をそんなに焦っていたんだろう、と思うぐらいに冷静を通り越して心は冷え冷えと極寒大陸となった。素早く、立ち上がる。その瞬間、声が掛かると共に全身に感触が伝わる。
「しーんや」
肉感がすごく、仔細に伝わる。密着する身体はユエに張り付かれたのだ。先ほどまでずっとそうしていたように、けれど今度は互いに裸同士で。
「――ッ！？」
絶句する。そして、同時に動けなくなった。全く、微動だにできない。

（興奮するんじゃねぇー！！！この、この、〜〜〜〜！！）
心の中でも言葉に出来ない。何故って、標葉の腰には布が一枚、巻かれている。けれど、それがどうにもユエにはないみたいだ。うすっぴろい布一枚を隔てた越しに伝わる、熱とソレ。
腰、というよりもその少し下、尻の谷間部分に押し当てられる固い感触。
「　っ」
首元を厚い吐息が掠め、小さな痛みがあった。
（吸い付かれてるっ！）
驚愕する。何故こんな事態になったのか。何故、こんな状況で自分は抵抗一つしないのか。
硬直した体は抵抗を望んでいる。けれど、何をされたわけでもないのに動かない。腕力で押さえつけられているわけでもない。拘束は腹に回った腕だけだ。それも押しのけられないほどのキツさではない。すぐ外れてしまうだろう、優しい拘束。
（変態だ。変態だ！こんなのっこんなところでっ！！）
思っても、体は抵抗しない。疑問しか流れない思考は疾うにパニック状態だ。
「へんたいめ……」
辛うじて言葉を出す。
「そうだよ。標葉には、変態になる」
なんということだろう。この生物はやはり、美しさを利用するただの変態だ。記憶喪失で甘えている、とか不安がっている、とかそんなんではない。
「好きなんだから。仕方ないでしょ？」
口調はいつも通りでも声音だけは真剣に。
腕が、下へと下がる。
腰布を外そうと、手が掛かる。
滴が、ユエの髪から標葉へと垂れ、それが肩から胸へ、そして腹と下がっていく。その感覚に標葉は震えた。何がなされようとして

いるのか、その先はわかる。知っている。標葉にとって未知の領域。けれど、知識自体はあるのだ。
好奇心なんてこれっぽっちもない。他人のできごとなら勝手にどうぞ、で済む。香寿と豊がそういう関係になる事は二人の友人として喜ばしいことだし、相談されれば出来る限りで真剣に返すと思う。けれど、それが自分の身に降りかかれば？――興味はなかった。今も、これからもそれは変わらない。けれど、抵抗が出来ない。恐怖でないものに縛られている。

「しっんや――！！いるかーぃ？」

突然の声に、体はビクリと震え、動いた。
自然に、肘を跳ね上げる。
「ぁぐっ！」
ユエの顎にぶち込み直撃。けれど構わず足は腹へと回し蹴りを決める。
カラカラカラ――

「なにしてるの……？」
その疑問はもっともだろう。
ユエは吹っ飛び、風呂の壁面へとめり込んでいた。裸で。
「なんでもないさ、リベル。変態を殲滅しただけだ」
「そ、そう？」
あわよくば、と狙っていた魔王（リベル）を恐怖させ、引きつらせる人間（しんや）。
真っ青になった顔は湯気で標葉にはよくわからなかったが。

第五夜（後）　行方は知らずにはいられない

「……あー、行くかユエ。――ユエ？」
「すごい、嬉しい」
どさくさに紛れて抱きついてくるのに、身体が硬直した。ユエも多分、気付いた。
いつも通りの行動を心がけていたのか、テンションは同じだ。けれど、今日に限っては素早く身を離した。けれど、標葉は離れた体温を追う様に、その手を握った。軽く、けれど確かに。
……今日は、こいつのための日なんだ。冬で寒いし、これぐらい、いい。
女子の計画通り、今日一日はユエと二人で過ごすことになった。冬なのに足を晒す短い口広・ローウェストのズボンに朱と紫の間のような色合いの膝上靴下。ロングブーツはテカテカとしながらも落ち着いた色合いの黒。上は重ね着をして若干モッサリした上にズボンより少し上ぐらいの長さのダッフルコート。そんな女子の用意した服を着てデートと相成っている現在。
（昨日あんなことがなければ、もっと、楽しめたかも）
不自然な沈黙が降り、けれど歩き出す。城から、町へ。

不自然なぐらいに明るく、町を観光しながら歩く。ユエが手を引いて、色んな店に顔を出していく。決して好奇心だけじゃない。標葉を、楽しませようとしているのだ。
考えてみりゃ、記憶喪失なんだ。不安でしかたないはずなのに微塵もそんな様子を見せないので忘れそうになる。思えば初対面、テンションが高かったのはそういうものが出ていたのかもしれない。誰も知らないなかで初めて会った人物。縋りつきたくなって、手綱をしめていてほしくて、堪らない孤独感に包まれていたのだろう。印象が九割、なんていうものはたいていが当たっているものだから、

そう接してきたけど、淋しかったはずだ。
　そういや、契約者を増やすのにすごい反対してたっけ。優しい奴だから最後には助けてくれた。あの後「見過ごせなかっただけ」とか言ってたっけ。俺の体にかかる負担を考えているんだろう、と解釈して「それでもいい！」とか考えなしに契約をしたけれど、ユエが抱えていたのは不安だったのだろう。自分の立場がなくなってしまうのが恐かったのだ。

「――居場所はきちんとあるから」

　まるで、尽すように行動するユエに告げる。
　この美しい魔物には帰る場所がない。だからこそ、今の居場所以外に、どこにも存在してはいけないような気分になる。そして、その場所ですら、いていいのかという不安が付きまとう。それは卑下の結果に付いて来たものだ。怯え、疑心暗鬼になる程に無限増殖する不安。
　だから、ここにいていいのだ、と示す。そしてこの場所だけが居場所じゃない、と教える。

「契約者が増えてもユエはユエじゃなきゃだめだ。代わりなんてないんだから」

　立場とか関係ない。
　俺とユエっていう関係以外に何もないから、
「吸血鬼も記憶喪失も関係ないただのユエだからこそ、隣にいてほしい」

「でも、標葉――」
「ここ、はいつでもお前の場所だ。永久保存。予約取りしたのはお

前だ、キャンセルなんてさせないからな」
　言いかけたユエに反論は許さない。そんな弱気な言葉なんて聞いても意味が無い。欲しいのは、ただバカみたいな笑顔。変態な行動でいいんだ。悲しみも苦しみもなくていいとはいわないけれど、できるだけ笑って、楽しくいてほしい。

――だから、離れても大丈夫なのだ。
　本心では、昨日のように標葉を置いて行動もする。それは偏に他に興味が向いたから、でもあるけれど、標葉は今、仲間と共にいる。そんな安心感。
　周囲に人がいるから自分の場所がなくなるんじゃないか、という独占と自己の過小評価。でも逆に標葉は自分がいなくても問題ない、という雛を養うような庇護下からの移行による絶対の安心。
「お礼の一つもいえないのかよ？」

「――うん。ありがとう、標葉」
　微笑に華が咲く。

「しかし、話はそう簡単にいくものではないだろう？」

「――神！？なんでこんなところに……」
「魔王の支配下にない魔物の群が近くに出てな。勇者が遊びに行った。それを連絡しにきた」
　何かが違う。
　違和感は雰囲気。いや、存在そのものだ。
　瞳に宿るのは好奇心に満ちながらも冷めた見方をする、熱に浮かされたような熱さの瞳じゃない。冷静で冷酷。慈悲深さもない、神というより断罪官。幼子の癖に異様な気配を纏う。
「わかっておる。口調も見た目も自由自在なのだ、この存在は。多重神格者じゃからな」

言って神は指を鳴らす。
「っ」
“書き換わった”――データが更新されたかのように、その姿は移り変わる。幼子から、少女に、少女から女性へ。そんな“ありえない”視界に瞬きすれば、そこにいたのは美女。
妖艶にして冷たい鋭さを持つ美女。傾国。この世のものじゃない。――いや、だからこそ神。
「“アレ”は死神を追うという役目を持ったものじゃ。表に出ていたのもまたそういう理由から。しかしまあ、今我が出ている事は例外じゃて。最優先は世の流れを見守る役目」
北欧神話を思い浮かべた。
ノルン三姉妹――未来を司るスクルド、現在を司るヴェルダンディ、過去を司るウルド。この神は差し詰め、“ウルド”……運命・宿命・死。
そう考えれば、繋がった。テンは“スクルド”――義務と未来。そして彼女はワルキューレでもある。ワルキューレは戦女神であるとともに、死者を選定し、導く。
「勇者一人、サキュバス一匹、魔王一人、ウルフ一匹。……現在動かせる戦力はコレだけじゃ。お前はこの戦、勝つと思うかぇ？」

ひた、と見据えられて。標葉は口を開いた。
「――勝つ。相手の戦力なんて知らない。けれど、一人でダメなら二人で。それがダメなら三人で。力を合わせればいい。諦めたら終わりだが、諦めなければどこまでも続く」
標葉はこの世界が夢でないことを、もうわかっている。痛みも苦しみも、命が消える事だってある。だから安易に“勝てる”とも“戦え”とも言わない。それがどういうことなのか、その恐怖は標葉自身にも身に覚えがあるからだ。
――何よりも怖いのは、自分が、力を扱いきれないこと。扱いきれずに敵を倒せないこと、扱いきれずに人々を守れないこと、扱い

きれずに……傷つけてしまうこと。怖いことだ、それは。身体が震え、恐怖に、そして恨まれることに……恐れを感じる。

「――“信じている”から？」

温度のない瞳に見つめられ、標葉は背筋が凍るような気がした。それでも、瞳は逸らさない。気持ちは変わらない。偽らない心だから。折れない気持ち。

「アホらしいな。……しかし、いい答えだ」

フッ――と微かな笑みが表情に浮ぶ。

それに幼子（テン）の面影が過ぎって、標葉は安心した。

「敵は少数。群と言っても数体だ、バカたれめ。勇者が、世界を動かす力の持ち主がそんなものに負けるはずもなかろう」

……“遊びに行った”と言ってたな、こいつ。

「――しかし、忘れるな。ここは、お前の識っている場所だ」

……知識として、現実として、視覚として。どの“しっている”場所なんだろう？

「地図を見れば、最初から分かっていたろうに……」

「標葉……」

ユエの心配の声が背中にかかる。

「ふざ――けんな。っだよそれ……！」

「認めたらよかろう。我は神じゃ、人間」

ふっ

小さい息を、生意気そうに、偉そうに、標葉が漏らす。

「上から目線だな。そんなに偉いのか、神は」

標葉は、キャラなど気にしない。元々、あの場所得ない限り、標葉は自分を破壊した。無口で、言いたいことだけを紡ぐ。周囲に向

ける興味や関心など、極少数で不快にならない限りは許容が広い。けれど、そんなものは幻想でしかないことを標葉は己自身に見ている。

臆病で、勇気がない。自分を変える一歩を踏み出すことさえも恐れて、噂話に疎いのではなく聞かないように。人と係わり合いになりたいと思って、でも躊躇って。

けれど、ここではそんな標葉を知らない。ここにいるのは、ありのままの標葉だ。

「偉いさ。人間が作った存在だ。願いが形になった存在でもある」

だからこそ、この場を壊す存在を許さない。平穏を揺るがすこの場は、けれど嫌いになれない。ここにはユエがいる。カレルもサキもいる。他にも色んな奴らが暮らして、笑いあって、そこに自分も混ざっていられるなら――何も考えず、ムコウとコチラを行き来しているだけなら、問題は何もないのに。……神は追ってきた。

そして真実を突きつける。

「人間を幸せにする義務がある。上に立つ存在は下にいる存在のために存在する」

微かに、寂しそうに笑い、彼女は指を鳴らした。

「あの子を連れ戻すことが目下、頭の中占領してますです」

幼子が一度現われ、けれど言葉を残して消える。困ったような顔だ。

「いつかきっと、姿を現すはずだからね、君の傍に」

一瞬にして姿が。瞬間移動？

それは憧れだ。そんなものがあったら嬉しい。学校に遅刻せずに行くためには必要なものだ。直前までゆっくりと寝られる。帰り道は、まあ、二人と帰る場合は歩いて、けれどそうでなければ出来る限り時間は短縮するために。どこでもドアではないけれど、某アニメの死神どもが使う瞬身という術やらなにやら。かっこいいじゃな

いか。何より、戦いにおいては有利に事を運ぶ。一撃離脱が戦闘では有効。少量でも時間をかければ倒せる。攻撃を受ける前に攻撃を。一を撃たれる前に二を。二を撃たれる前に十を。――素早さは必勝を生む。
「標葉」
ゆっくり、できるだけゆっくり、振り向いた。ユエの泣き笑いのような顔が見えた。
……俺も、そんな顔をしているのだろうか。
瞳は、覗き込めなかった。
（――そんな現実逃避をしても、今更、意味がない）

「二度と、口にするな。――怒るぞ」
「嘘じゃない」
低く、唸るように言えば素早く否定が帰ってくる。
「ここは現実だ。夢じゃないし、――異世界でもない」
そしてユエは“携帯”を取り出す。カチカチ、と二三の動作後、標葉のポケットが揺れた。
（“携帯”だ。受信している）
電話が掛かってきている。いつの間に登録されたのか、現代の、日本製の、携帯は『ユエ』と登録され、画面の中のアイコンが動き、鳴っている。
「……。ユエ」
何も考えず、受話ボタンを押す。耳に押し付け、流れる機械音声を聞いた。
「君が生きる世界。生き続けなければならない世界。隠されていただけの真実」
耳に入る声とユエの声は若干違う。けれど、同じ口調、同じ言葉。同じタイミング。
――話している。現代の携帯で、目の前にいるユエと、自分が。

「この世界には魔物がいて吸血鬼がいて、勇者がいて、魔族がいてハンターがいて、神がいて、魔王がいて、魔女がいて、死神がいる」
吸血鬼と契約した。巨大ムカデのような魔物に襲われた。勇者と友になった。魔族のサキュバスに会った。神に付きまとわれた。魔王にも謁見して、――死神と、約束した。

「そして、その中でも君は特別な存在」
契約者は限られる。
契約を出来る器を持っている必要がある。魔力の素養。
けれど、それだけならば稀なだけだ。けれど、高位の魔族は契約するのに、負担が大きい。死に掛けのサキュバスを養えるほどの魔力。高位魔族の中でも頂点の一族、吸血鬼に目覚めの血を与えるのにも――二人と契約するのも
（……尋常ではない）
「変わらない、事実」
電話を切ったユエが近づく。標葉の手を取った。

「――俺、キレるっつったよな」

「そうだね、正確には怒るだけど」
標葉は手の引かれるままに、ベンチへと歩みを進めた。

「……キレていいんだよな」

「うん、当然の権利だもの」
隣をポンポン、と叩き座るように標葉を促しながら、ニコニコと笑顔で、でも若干陰のある表情で、確認する標葉に同意する。

「　っ」

想いが、砕ける。

「声出せばいいよ、不満を言えないなら、態度に出せばいい」

掻き抱くように、縋りつくように、目の前のユエに腕を回した。胸元に顔を埋めた。力いっぱい、隙間をなくすように、ユエに、密着する。

――崩れていく。

目の前にあるものが、すべて。偽りのものだったと知る。

それがどんなに怖いことか、自分は知っていた。あの時、一年半前に体験した。

それでも、信じたくなくて、偽りに偽りを重ねて、どんどん圧迫されていったのに、それでも、自分は嘘を塗りこめていった。

「――本当は、知ってた」

認めていた。単に、受けいれたくなかったのだと、気付かされた。すべて、自分が引き起こした。自分が中心だった。自分が原因だった。

「俺さ、昔、大事な人を殺しかけたことがある。本当は生まれた時から不思議だったんだ」

本当は、分かっていたんだ。ずっと、昔から。

早いうちの方が、まだ対処も出来たかもしれない。そのほうが傷も浅かったかもしれない。こんな、こんな胸が張り裂けそうな思いになることはなかったのかもしれない。

それでも、幼かったから。

「何で俺は死なないのだろう――て」

何度も死にかけて、でも生きてた。それも今考えれば俺を殺しに

来てたのかもしれない。傷が付いてもすぐ治って、それはとても回復が早いなんてものじゃなかったし、掠り傷とかできたはずなのに無くなっていて、俺は俺が不気味で自分が恐かった。
俺が連れ去られそうになった時、傍にいた香寿が人質になって、豊は傷を負った。なのに、

「――あの二人は今でも、俺の傍にいてくれるんだよ。変わらないんだ、前も後も」

それがどれだけ嬉しかったことか。それがどれだけ悲しかったものか。痛みが胸を突く。

「最高の友達で大切な人たちなんだ、もう二度と傷つけさせないと思った」

――人を越える存在も、神の祝福も、多大な魔力も、俺はいらなかったのに……っ！

わかっていた。いつだて、ユエの手は優しかった。カレルは明るく笑って、サキは支えてくれた。――背に回る腕は、温かく、宥めるように重ねられている。

「なんで、奪い合う？」
こんなちっぽけな存在のために。
力をもつ責任なんて果たせない。力は利用するものだ。平等にもなれないし、好き嫌いも多い。怒るし憎む。感情に反応するのが魔力なら、それを衝動のままに使う。俺は俺の欲望のままに行使する。あの時、人殺しになって、自分を嫌悪した。

「でも後悔だけはしてないんだよ」
人の命奪っといて、何様だか。
もっと冷静にいられたら……もっとマシだったのかも、しれないけど。

「アメリカや中国、ロシア、カナダ、オーストラリア……ここはどこだ？」

「――日本はある？」

「……名もない国」

――認めたくない心が認めた現実に、ポツリと落ちる空の悲しみ。それは少し前に見たものと同じで、空は繋がっているのだというのが本当なのだと理解した。ようやく、理解した。

「少し、向こうで整理したい」
「うん。――テン」
「……聞こえてるよ」
声をかけて、ユエの背後に幼子が現われる。全知全能、という奴か。それとも千里眼か。

「行って来ます」
「うん、いってらっしゃい」
けれど、どちらが家でどちらが外なのか、帰る場所はどちらなのか、それは判然としない。

世界の重なるとき（前書き）

サブタイ：魔術師の強襲

二つの物語が合わさります。

世界の重なるとき

魔術師の強襲

「――や」
遠く、声がする。

「――んや」
それは呼び声だ。誰かを、求めるもの。

「――しんや」
それはいつしか明確な形へと変わる。

「あ……」
急激に意識が浮き上がった。

「うわっ」

「……顔を見て驚かれるなんて傷つく」
その美麗な御尊顔が間近にあり、標葉は小さく驚きの声でもって呼びかけに応じたのだが、それは不愉快な思いをさせたようだ。軽く溜息をして香寿は顔を遠ざけた。といっても、それほど遠くない。真上だ。その顔の横やらから見えるのは天井。室内。
そこに自分は転がっているらしい。しかも丁寧なことに頭の下には柔らかな弾力。
（――豊に自慢できる、の前に嫉妬されてそうだ）
香寿の膝枕を受けたまま視線を動かして、豊がこの場にいることを確認した。やけに固い笑顔で出迎えてくれている。しかし、それだけでもない。
二人の目前で姿を消すこと二度。しかもそのうちの一度は何の説明

も心構えもないまま、一度はその説明をしようとした矢先。計られたようなタイミングなのが厄介だ。それでは説明をしてよいのか、よくないのかわからない天運。標葉に選ぶ権限はないにしろ、今回ばかりは対処法も分かっている為になんとか説明が出来そうだ。……それがいいことか悪いことかまでは判断することは出来なくとも、今できることをする。それはそうだ、できないことはどんなに頑張ってもできないことなのだから。それこそ得体の知れない何ものかによって妨害を受けるように、物事は上手く行かない。

「まず、布団被っててい？」

――己の部屋。

今まで転移場所が行きと帰りが同じだったのに、どうして今回はここにいるのかは別として、話すことを待つように、沈黙する二人に述べた。

「標葉は眼を合わせて話すし、それが礼儀だけどね。――それが必要なら」

「うん、ありがと」

理解を示す香寿に感謝を述べ、体の下に引いてあった布団にぐむっと潜り込んだ。

これで、移動に於いての視界を一つ、減らしたわけである。多角的に視られる他者からの視線を失い、標葉を映す媒介となるものはこれで自身が気をつければいいことだけだ。天からの恵みもない、屋内なのだから。

「順を追って話す。――最初は夢だ。死神と会った」

死神と会ったのはあちらではなく、夢だ。完全に、それだけは言える。アレは現実にはない場所だと、ただっ広い上も下もないような色という感覚のない空間。

そして、そこで何かを交わした。言葉を交わし、契約を交わし、――けれどその中身は何も覚えていない。だからこそ、それだけならば標葉は夢だと思えた。現実に繋がるものなど何もない、と。けれど、――シャワー室で、あちらに落っこちて、ユエに会った。そ

こから今まで、経った六日間。けれどその中で、五人もの人と出会い、親しくなり、友人となった。かけがえのない、大事な存在。豊や香寿とは年月を経た分重みが違うけれども、それでも失いたくない存在となった。濃密な時間が、仲間と結びつける。

「――それは迷惑じゃないのかよ？標葉が望んだことなのか？」

深く、問いかける声が降ってくる。

「……最初は、意味分からんって感じで戸惑ったし、なんで自分なのかと思った」

でも、違う。標葉が選ばれたんじゃない。標葉がいて、だからこそこうなったのだと、今なら分かる。標葉だったからこその、物語だ。

（俺じゃなかったら、そしたら、確実にサキは死んでいた）

あの時、彼女を救えた事を誇りに思うから。だから、標葉はもう、自分を卑下したりしない。

“普通”でない自分を嫌ったりしない。“特別”だったからこそ、嫌な思いをしてきたが、“特別”だったからこそ、得たものがある。

――魔力があるから、普通じゃないから、死神は俺と契約を結びに来た。

そのことにはとっくの疾うに気づいていた。やっぱり始まりはそこなのだ。

「確かに、今回のことは全部、俺が魔力持ちだから起きたことだ。けど、俺はそれが良かったと思う。――守りたい人が、できたんだ」

それは優しく、強く、けれど酷く弱い。脆くて、支えてあげたいといつしか思うようになっていたのかもしれない。世話をかけてばかりで、情けない自分が、けれど彼の人物の心に大きく住まわっていることは自他共に認められる事実だ。だからこそ、

――ユエを一人にすることは出来ない。

手放せない。そんなことをしてしまえば愛しい魔物は哀れにも折れてしまう。心が、ぽっきりと、両断され引き裂かれ、……失われ

てしまう。
「危険は？ないの」
「あるよ」
標葉は即答する。脳裏には初夜に見た化け物。あの存在を思うと体が震える。
なにより、その暴力的で醜い姿よりも、一撃に伏したユエの姿ばかりが眼に映る。広がる血は夜目にも赤く、色づき、急速に温度が冷えていった。己を犠牲にして標葉を守った恩人が目の前で死に行く姿。化け物にどう対処するかという打算的な考えと、人の気配も感じられない場所に一人残される孤独感。そして何か大きなものを失ったかのような喪失感を抱えて、あの時の標葉は吸血鬼へと手を伸ばした。

「でも、それはあそこが少し裏側に近い場所だということで、今ここで生活している時と何ら変わりようがない」
同じ世界で起きている現象だから、変わらない。変わりようがない。場所が違えども存在はしている。ならば、あの“魔術師”のようにして、あの場所から危険がやってくるかもしれない。何処にいても結果は同じ。それでは知らないでいるよりも、“現実”を知ってよかった。
「それにさ、人よりも頑丈な身体になったって、言ったろ？これは大きなアドバンテージだ」
吸血鬼との相互契約。それは互いの血を飲むことで成就する。二人の力を共有しあう橋渡しである。サキとの契約は標葉側の一方的な給与契約――魔力を与えるということだけのものであるためにその力を利用することはできない。
しかし、標葉はユエによって頑丈な体を得て、不死身予備軍となっている。これでは襲われたとしても生き残る確立は一般人とは比べ物にならないほど格段にアップする。だからこそ、勇者の一撃を受けても服が切れたのみで肌に傷一つつけなかった。いくら練習の素

振りとはいえ、魔力を開放した状態の勇者――世界を揺るがす存在であるカレルの容赦ない一撃で、である。ならば、それに太刀打ちできるほどの貫通力を、実力を、標葉から魔力を奪いたいとまで思う者が持っているだろうか。そんなはずはない。

「標葉がそういうんだから、仕方ないよな……」

「豊！？」

納得したような豊に香寿が不満の声を上げるが、豊は苦笑して頭に手を乗せた。

「いいだしたら止まらない」

よしよーし、と子供にするみたいに大きく撫でてやればふくれ面な顔で恨めしげな瞳が下から上へと覗く。香寿は自覚していないが、それこそ上目遣いだ。それに顔を紅くする豊は力を強くして撫で、下を向かせる。

そんな二人の様子を布団から頭だけを出した状態の標葉は微笑ましい気持ちで見守る。けれど、これでよく付き合っていないなどという言葉が出てくるのかも不思議だった。同性という分はあれどもこの雰囲気は甘く蕩けていて、誰もが思わざるを得ない。この美形二人だからこその違和感無しなのだけれども。

「――けど、挨拶にも来ない奴へ嫁に出すわけには行かないな」

おや、と思う。標葉には余り向いて欲しくない話題の方向転換だ。

「……そうだね。会って見たいな、僕も」

標葉が好きになった人、と香寿に続けられ標葉は言葉に詰まった。

「それは――ちょっと、問題があるというか、会わせたくないというか……」

（変態だから）

会わせたくない。自分が変態をすきなのだと思われる事は、（例え事実だとしても）あまりよろしくない。更に、ユエの変態ぶりが

二人の前で晒される（しかも自分被害者で）のも大変よろしくない。というか、ダメだろう。友人や親しい人が目前でセクハラに会うことほど気まずく嫌なものは珍しいと思われる。
……カレルたちとはユエの変態があった上で知り合いになったからなぁ。
気にしない、以前に向こうが当たり前と思ってる節がある。
「――でも、そうだな。うん、会ってみればイイトオモウヨ」
何か得るものがあるはずだ。……主にセクハラの対処法とか、逃げ出すタイミングとか。
香寿よ、多くを学んでくれ。顔がいい奴に騙されるな、とか。
「カタコト？」
不自然に思ったらしい香寿に、ちょろっと顔を出す。
「――ところで、布団を被ったのはあの移動、鏡とか“映すもの”を媒介に行われるからさ……」
瞬間的に感じた違和感と寒気に言葉が途切れる。標葉は反射的に布団を跳ね上げ、二人に注意を促す。
「ッ！伏せろ――」
次の瞬間、室内にも関わらず風が通り過ぎ、冷たい痛みがすぐ横を駆け抜ける。そして、窓を透過してきたナニカに二人は捕らえられた。
「ぁぐっ」
「は、がっ」
「豊、香寿――！」
短い呼気が擦れて出る二人は空間に固定され、身体が圧迫されている。標葉を過ぎった風は頬に裂傷を与えていたがそんなことを気にしているほど悠長にはいられなかった。侵入者を振り返る。
「お前――」
言葉が出なかった。

「久方ぶりだなぁ、小僧ども」

「“魔術師”……！！！」

その者はかつて見た姿とは違っていた。以前は簡素ながらも清潔な着衣をし、自信に溢れたままにろくな抵抗もまともに出来ない標葉たちを嬲り、惨劇を起こした。けれど、今は豪奢な長衣でありながら、重く動きにくそうで、長年着ていたような汚れや埃などがそれを打ち消している。瞳は自信よりも妄執に取り付かれているようにギラギラとしている。何より、疲労によるものと思しき隈と皺がその容貌をがらりと変えて、老け込ましている。

一年半――その間にどうしてここまで変わったのかと思うほどの劇的な変化だ。

そのことに気付くと、標葉は背筋が寒くなった。

どうも、この“魔術師”の変容振りにも自分が関係しているような気がする。そして、あちらで聞いた、“支配者”のことを思い出した。

『え？魔王と勇者の協定についてっすか？』

『ああ。もともとが平和で、二人が対立していなかったならなんで今更協議のためだけに勇者が一人旅をしてまで魔王のところに行くのかな、って』

ちょっとした疑問だったそれに、カレルは思いのほか真剣に考え込む。

『――少し前まで、戦争があったんすよ。勿論、ウチ等じゃないっすよ。けどほら、標葉も魔物を見たんすよね？』

標葉が頷くのを見ると、さらに詳しい説明をしてくれる。

『魔王の統制外にいる魔物は多いっす。彼は魔物を従える魔族の統括者っすから、下の者までは管理が行き届かない、ということで、

人に危害を与えた魔物は勇者が真実かどうかを調査した後に判決を出し、狩人に始末をつけてもらう。それがルールっす』

『けど、近年の魔物被害は多くて、調査をしているうちに可笑しいって、誰かの指示に従っているんじゃないかって線が濃くなり、けどそんなことを協議してる間に――侵攻が始まった』

『侵攻――魔王のいる国と勇者のいる国の他に？』

無言のまま彼女は頷いた。

『“支配者”――最初はただの魔術師。研究に人生をかけているような、どこにでもいる化石化したおっさんすよ。でも、その頭脳は天才的だった。――魔力を吸い取る術を開発したっす』

『標葉も気をつけるっすよ――今は牢に繋がれてますけど、油断は出来ないっす』

「“支配者”」

「む？なぜお前がその名を――」

「っけぇ！」

単なる体当たり。けれど、魔術師は油断していた。ただの青年だと、何も出来ない小僧だと、標葉を勘違いしていた。確かに以前の標葉はただのガキだった。力の使い方も知らない、ただの子供（ガキ）だった。――けれど、今は違う。

とても一般人では出せない速度の速さで歩み寄り、その見えない物体を握りつぶす。ぶっ叩いて、手で引き千切り、二人を解放する。

「二人とも、逃げろ――っ」

掛け声をかけ、二人を背後に庇う。

今の標葉は短いながらも旅をして、色んなものに出会い、変わった。

今は――己の無力に嘆く必要はない。力を、得たのだ。

――けれど。

「そう易々と人質を逃すわけはないだろう？」

魔術師は緩やかに、攻撃を開始した。

透明だったものが、その迷彩を解いて襲い掛かる。あっという間だった。緑色の巨大植物の魔物は標葉の部屋を埋め尽くし、再び拘束した。

人よりも優れた身体能力を得た標葉でも、魔術師と魔物の両方を相手取る事は出来ない。また、標葉には友人が、――何の力も持たない、庇護されるべき一般人がいるのだ。回避など、できるものではなかった。

「コレは未だに有効な手だと見える。人は脆いなぁ小僧？」

万事休す――。

魔術師と吸血鬼と――死神。（前書き）

はいさ、死神ちゃんのことを詳しく書きましたです！
前回の続き。

魔術師と吸血鬼と――死神。

ドゴ――ッ！！！

「じゃまっすよ、おっさん」

非常識な登場の仕方をしやがった、あの痴女（バカ）。

「遅かったかな？」

くるくると回転しながら敵の頭に着地した上に踏んだ後から邪魔だと批判する勇者。そんな彼女とは反対にすたっと華麗なる着地を決め爽やかな笑顔を……同じく敵の上で振りまく魔王。

リベルは自らの下の存在に気付いたのか、早々と横に逸れる。しかし、

「まだ、間に合ってるっすよね？」

確認しながら踏み出すカレル。

「へばってないし、勝手に殺すな」

これでも、半人外だ。

しかし、それは標葉の話である。

たった今まで敵対していた相手が生きているのかどうかは、まあ、生きているだろうが……。

その所在をジト目で見つめていれば、カレルは無言の視線の先に目を向けて、

「うわっ！鼻血っすか？いくら若いこのパンツ見たいからって下に潜り込むのは変態すよ」

……思わず味方に対して常識のないものを見る目を向けてしまった。

「ん？標葉も見たいっすか？もう、言ってくれればいくらでもサービスで見せてあげるっすよ」

標葉はとくべつー。とかのたまう仲間、のはずの痴女になんと言おうか。

頭上から降ってきた痴女(へんたい)に踏まれて変態扱いの批難を受けた魔術師は最終的にドロドロと血を流しながらムクッと身を起こした。咄嗟に標葉は敵味方を忘れて同情の生暖かい目を向けてしまった。しかしまあ、狙っての行動じゃなかった、ということに驚きだ。

追い詰められた標葉のこの状況に、雰囲気から払拭するような登場をしたというのは変態に対して期待のしすぎである。リベルはどこ吹く風、と標葉の隣に来ては植物の魔物を倒し、豊と香寿を颯爽と人質状態から解放してくれた。のだが、――カレルには飛行系の術がないので彼が飛ばしていたのだろう。つまりはカレルが魔術師の真上に着いたのはリベルの策というわけだ。……少なくとも、リベルは狙っての登場。爽やかなくせに案外腹黒だ。魔王だからか？

ここまで話をしていて、待っていても二人の他に人は来そうにない。

「ユエは？サキも……」

「サキは向こうで足止めをしてるっす。ユエさんは――少し用で外してるんすよ」

サキの能力で敵を多く引き付けているのだろう。しかし、彼女自身に戦闘能力はない。味方が脇から倒していくことこそがその戦法なのだ。ユエがそこにはいると思った。

けれど、いないのだ、とカレルは述べる。

「……一人残してきたのか？」

「アルファルトも一緒だよ。動かせる戦力は動かしてきた」

魔王の従者だ。それなりに能力は強いのだろう。それこそ、魔王を叱れるほどの存在なのである、信頼も厚い。……けれど、不安は拭えそうもない。

標葉はアルファルトの実力なんて見たこともないし、信用があるかといえばない。顔見知り程度で話したのも数回。信頼は出来ても信用ができるほど濃密な時間は過ごしていないからだ。それを言っ

てしまえばリベルも同じなのだけれど、戦況を任せてくるのと隣にいるのとでは掛ける信用の度合いが違うのだ。嫌いなわけではない。けれど、好きというほどに知っているわけではないのだ、彼を。
　それにサキは――自らの身体に気を配らない。無理して倒れるようなことがなければいい。けれど、魔力の供給を受けなければ倒れてしまうような特性のサキュバスはいくら契約をしているとしても、契約者がこんな離れた場所にいればその供給も十分とは言い難い。しかも先日倒れたばかりなのだ、そう楽観できるほどに体調は回復できていないと見ていいだろう。

「向こうで騒ぎを起こして自らは本命に乗り出すか……利巧、というより狡賢いね、君」
　リベルは一歩、標葉の前に踏み出し牽制するように魔術師を鋭く観察する。
「以前は怯えて前線にも出ずに逃げ回って、増やした僕で消耗戦を仕掛けてきたっけ」
主旨が変わったね、とにこやかに微笑むのだが、何分言葉は皮肉が入りまくっている。王子様のような白く爽やかな笑顔が毒々しい。
「そうさなぁ。それは貴様らも同じではないか？万が一はあってはならぬ、と我の前には一度たりとも姿を見せなんだ。魔王も勇者も仲が宜しい様で」
　ふぁふぁふぁ。と好々爺と笑う魔術師。しかし、その笑みは毒と皮肉を含み、敵意と混ざり合って見るに耐えないほど醜いものだ。
標葉はぞっとして、背後にいるだろう香寿を思う。

＊＊＊　　＊＊＊　　＊＊＊

香寿は標葉の予想通り震えていた。あの時の恐怖を思い出し、豊

にしがみ付いていた。刷り込まれた恐怖はどれだけ気丈に振舞ったとしても身体が拒絶する。震える体は、先ほどよりも大きい。――豊から手を放すことを恐れていた。

始めから、関わらなければよかったのだ、と思う。ただ足手まといになるだけならば、首を突っ込まなければ良かったのだ、と。前の場合は巻き込まれたと同時にそれが起こる原因ともなった。だから、仕方ない。……けれど今回は、香寿自身には全く関係のないところで起きていた。ならば、標葉へと近づきすぎなければ、話すのを躊躇う彼に強要するように話を向けたのは他ならぬ自分だからこそ、思う。けど、

（違う。そうじゃない。踏み込みすぎた、なんてそんなものは防衛のためだけの欺瞞だ）

自分の心を守るために都合のいい理由を作って……そうして友人が巻き込まれていることに、悩みに、無視していてよいはずがない。

――自分が彼女を二人に紹介したことで起きたことなのだ。

標葉のストーカーとなった玲菜は相手にされないことに苛立ち、香寿への態度は徐々に目に余るほどのものになっていた。意志とは逆に、標葉に疎まれるようになった――その腹癒せに、彼女は“魔術師”の甘言に乗った。そして、陥れたのだ。

その時点で、彼女は魔術師の目的を知らなかったに違いない。ただ、利用されていた。しかし計画の一部に組み込まれていた。

――まず、香寿をいつものように嬲り、豊を誘き寄せ、捉えた。そして二人を人質に、一人になった標葉を魔術師は捕らえた。人質で人質を作る。そんな下地を作って彼女がやりたかったのは――結局、嘲笑うことだった。

「魔王も勇者も世界に発生する存在だ。僕らがいなくても、本当は、大丈夫」

「だから安心して自己犠牲もできる。身の危険なんて考えてたら戦いに勝利はないままですよ」

怯むことなく、標葉たちの前に立ちはだかる二人の助っ人。けれど、この時点で二人は無傷ではなかった。特に少女の方は腹部と背に大きく傷を負っていた。
「っ」
「……その傷――！？」
小さく、殺しきれなかった息に標葉が傷の深さに仰天した。抑えた患部からドロッとした液体が流れるのを見て、止血もしていないのだと知る。旅の途中、暇があれば手入れをされていた彼女の愛剣は純白の縁取りがされた蒼白の刀身を誇っていたが、今ではその影も零さない。赤というよりは黒に塗れていて、切れ味が相当鈍くなっていることも伺い知れた。
「大丈夫。勇者の回復力なら大した傷じゃない。それより、今は戦いに集中してください標葉」
敵から視線を外さないカレル。勇者の驚異的な回復力は幾度か見かけたことがあったが、けれどそれをもってしても未だ治癒できないこの傷はかなりの深手――傷は癒えても血が足りないのはどうしようもないはずである。また、戦闘となれば傷が癒える暇はない。

ごく――っと息を飲む。
深呼吸をして、目を瞑り、集中する。己の感覚のみに頼り、朧気なそれを掌に集め――
「――魔力を扱うか、小僧」
ひくっ――と喉が音を出し、集中は途切れた。
緊張にジワリと汗が滲む。掌に集めた欠片ほどの魔力の塊を逃さないように意識を集中するが、けれど
「できるのか、本当に？また、同じ失敗を繰り返すつもりではなかろう？」
不安を煽るような声に、過去を思い出す。――無意識に集めた魔力を暴発させてしまったときのことを。

（神前玲菜――）
香寿が友をつくる事を許さず、また自分を軽んじる標葉への復讐に起こした事件。
彼女は三人がどうなろうと関係がなく、豊が殴られ続けるのを見て、香寿が男たちに踏み敷かれることに愉悦を感じ、そんな二人を盾に標葉が魔術師に従うことを、――殺されそうになるのを笑って見ていた。
香寿の危機に豊が反抗し、重症を負った。香寿は悲鳴をあげて叫び、――その時、標葉は己の罪を知ったのだ。

＊＊＊　＊＊＊　＊＊＊

――魔力を奪われる事はいい。
そのせいで誰かが不幸になるのかもしれない、その力が誰かを不幸にするのかもしれない。けれど、そうは思ってもそんなものはただの幻想だ、と。そんなもののために二人が傷付くぐらいなら、拒むことなく明け渡した方が、二人を解放できると思った。
魔力も魔術も、当時の標葉にはどれも現実的でなく、遠い世界でのことだった。その妄言に付き合うことでこの状況が改善されるなら……そう、思ったのだ。
けれど、そんな場面を見て、死にゆく友と嘆き悲しむ友を見て――標葉は、暴走した。
残ったのは、廃墟。
抉り取られた地面が、事実をつきつけてきた。
死んだと、思ったのだ。何もかも。

神前玲菜も、魔術師も――豊も。

「命を救おうと思うなら、その対価を差し出せ」
その声は、ただ標葉の心の中に届いた。
「私は死神だ。命を持っていく役目がある。けれど、――それを曲げさせるならば、それほどの意志があるのならば、教えてやろう」
厳然とした声。冷たい声なのに、どこか温かみの感じられるような気がしたのはその時の標葉の心のほうが寒かったからかもしれない。失ってしまった命に対する絶望――。

「死の予言だけならば影響は大してない。当てても当てなくてもそれはコチラには関係のない出来事だからな」
わけのわからないことを、声は続けた。そして「だが」と続けた。
「運命を捻曲げ、命を救おうとするなら、それは重いぞ。……それは理に触れる行為だ」
命を救おうとする――その言葉に、標葉はのろのろと頭を動かす。少女だ。黒い衣服を重そうに引き摺っている少女が、大きな鎌を持ってそこにいた。――死神。
その言葉も、その時には信じられるような気がした。魔術師がいて、自分に魔力があるといった。そして、その結果自分はそれを暴走させ、この場を“こんなふう”にしたのだ。だから、この少女が死神だと言って大きな鎌を持ち歩いていても、どれもが現実感のない世界でならば信じられた。
「繋がりは深く、やがてこちらへと引き寄せられ戻れなくなる。死ぬのだ」
「代償は魂？」
標葉は自分でもわからないままに渦巻く疑問を投げかけていた。
神様仏様、どうして自分はこんなにも罪深いのでしょう――？どうして後から出なくちゃ解らないんだろう――？

ぼんやりとした思考で考える物事は酷く愚鈍で、その上仮想的だ。
「そうだな。私がもらうことになるよ」
一人の命は一人の命で補う。それがルールだ、と少女は言う。だから標葉は
「じゃあ、いい」
否定した。重い罪を、けれどその方法で償うことを拒絶した。
失った命が一つでないのならば、己の命一つで取り戻すことが出来ない命はどうなるのか。そのことに思い至ったからだ。そんな優劣をつけていいわけがなく、また死ぬことで贖うなどということは、死者に対する冒涜だ。今まで失われた命、全てに対する侮辱である。
そんな軽い罪ではないのだ。生きて、罪を償うべきだ。一つでも命を救うべく――。
「そうか、面白い奴だ。――また会えるなら、会いたいものだ」
そう、言って少女は姿を消した。

そして茫然自失となった標葉の前に、傷を負った豊と香寿がいたのだ。不自然に軽い傷を負った二人が。――軽度の打撲しかなかった香寿と、大きな擦傷がついただけの豊の手当をして、警察とかが来る前にその場を後にして……と忙しくなって、忘れていた少女の存在。

＊＊＊　　＊＊＊　　＊＊＊

「ああ、――あの時から、始まっていたのか」
標葉は口に出し、笑みを浮べた。
あの時、標葉は少女と契約を交わすことは無かった。けれど――再び出会った死神に、その頼みに、標葉は頷き、契約した。
だから、あの出会いは、この魔術師は、実は意味があったのだ。

この魔術師がいなければ、死神に会うことはなく、今回もまた死神に会うことはなかっただろう。そして、カレルにもサキにも、テンにも、リベルにも、アルファルトにも――ユエにも、会わなかった。
そのことには、感謝した。今だけは感謝する。

標葉は手を伸ばした。青い空へ、昼の月へ、手を繋ぐように。
「――ユエ」
名を紡ぐ。標葉が名付けた、その大切な名前を。

そして、繋がった。感覚の触手で、心で、その手で、繋がる。
「標葉――」
優しく、強い、そして美しい声が標葉の名を呼んだ。

「ああん！！さみしかったよぉー！」

「うぐっ」
抱きつく、変態。
そのままグリグリと頭を標葉の胸へと押し付け、その華奢な長い腕を背に回し、細さに似合わない怪力でぎりぎりと締め付ける。そして手はそのまま身体をまさぐる。

「昨日ぶりの標葉。ああっ標葉の匂いっ！この肌触りに感触――たまらないっ！！」
「――っどこ触ってやがる変態！！」
ぎょっとする。
服の中にいきなり手を突っ込まれたらそうせざるを得ないだろう。
標葉は恒例となりつつあるセクハラに鉄拳を打ち込んだ。

「アイタタタタ――酷いな、もうちょっと優しくしてよ」
何故こんなギャグに？

「でもこの痛みも標葉が与えてくれたのだと考えると……ふふふ。癖になりそう――」
そんなもの、コイツが変態だからだ。
「さぁ、本領発揮と行くかな――今日は調子がいいし」
ユエは月色の髪をさらっと背に流し、昼の月を背後に携え壮絶な笑顔を浮べた。
――それはやっぱり、月に似る、優しくて冷たい、鋭く残酷な月。

「……そうか。吸血鬼一族の特性――満月。今夜はしかし、望月ではないが？」
一瞬でユエを吸血鬼と断定する魔術師の審美眼は優れている。しかし、
「――新月だよ」
満月の日は魔力の高まる時。それは魔の属性を持つものならば共通の事項。
けれど、昼の月にも魔力を溜められるのはそれなりの“実力”というものが必要で、――契約持ちは他との差が大きい。新月は、ユエにのみ、その威力を発揮する。
「なるほどのぉ？――しかし、それだけでどうやって我に勝つと」
魔力の量で競うならば、人と魔族は魔族の方が多い。また、耐性もある。
だからといって、“魔術師”は人であって人ではない。他者の魔力を己のものとする術を身につけた者だ。――その貯蓄がどの程度のものかはわからない。しかし、その量は一般の魔族すらも凌ぐ。でなければ戦いを仕掛けてなど来ない。牢に繋ぎ、長い時を過ごすことで身体ともにすり減らしてきただろうに、その魔力は底知れない。

「帰ってきたっていうことは、――大丈夫っす」
凛とした、カレルの声が魔術師の余裕ある言葉を遮る。その口調はいつもの調子を取り戻している。――戦闘時の、冷たく通る声ではない。いつもの、どこか余裕のある勇者の声だ。
「時間稼ぎは僕らに任せて」
そう、リベルは言うと、カレルと眼を合わせ魔術師と対峙した。代わりにカレルが標葉達の守りに入る。ウジャウジャと己を食べて増殖していく植物の魔物を高速で切り落とす。
「これ以上、彼らに近づけさせないっす」

「俺も――」
「待って。標葉、――俺たちは、俺たちのやることがあるよ」
リベルとカレルの様子に戦いに身を投じようとする標葉の腕をユエは掴んで引きとめ、言った。――やるべきこと。それは二人にしか出来ない。
「記憶のないままでは、十分に戦えないから。だから、行ってきた――魔女の館に」

魔女の館？と首を傾げる標葉にユエは告げた。
「標葉。記憶、取り戻してきたよ」
「――え？」

「言葉を紡いで。同じように、ゆっくり慎重に。でも緊張はしないままで――謡おう、一緒に」
手を繋ぐ。促されたままに、標葉は古の魔術を、唱える。
「「血の絆は強く濃く　流れるは星の導きありて　誓いは暖かに、力を求め　示すは繋がり」」

カレルが触手を阻む。長い祝詞に強大な力を持つ術だと知った魔術師をリベルが阻む。
「「名付けは刻む　命と魂は名の下に　古より個より深き誘いに我ら　求めしは契約の起源」」
勇者が守り、魔王が攻撃する。敵はただ一人、――魔術師。天分を越えし者。
「「重なりはいつしか同じに　同一はいつしか個別に　深き絆は血と魂、心によって繋がる」」
ユエと標葉の鼓動は重なった。呼吸は掌を繋がって、魔力を編み出し、それを形成した。
「「――契約を履行する」」

光が、眩く、標葉はそれを見る事はできなかった。けれど、途轍もなく大きなものが身体の中を通りぬけ、世界を揺るがした。

目の前、魔術師は光の縄で拘束されていた。
「どうやって牢から抜け出したのかはしらないけど、もう、逃がさない」
いつのまにか、標葉の手とユエの手は離れている。その手には血色の大剣が握られ、魔術師の上に振りかざされていた。
「標葉の危険は今ここで、消す――」
「ゆ、」
「そこまで――ぇ！！」

「……」
「ちょ、そこ止まってよっ！僕を無視するなぁー！！」
ユエの温もりを求め、そしてその手を血で汚して惜しくなくて伸ばした手は届くことなく、言葉は届くことなく――そのことに胸が締め付けられそうになった、その時。声が乱入する。
幼子の、場違いに元気の良い声。――テンだ。
「僕の役割を知ってるくせにっ標葉のばか！！」
場違い、という言葉を読んだらしきテンは場の凍った雰囲気に、それまでの殺伐とした雰囲気に不満をぶつけ、ついでに標葉を批判した。子供の癇癪だ。
「神様だぞっ僕は！」

「戦いには口を出さないのではなかったのですか、――神」
リベルが冷静に問いかける。
魔術師を殺す意は国を荒らされた魔王も勇者もユエと同じだ。こんな存在をのさばらしても、決していいことになるわけがない。――そして神は基本的に人の世には干渉しない。
……例外として標葉には関わっているだが。
そのことを鑑みて、現在の原因となった魔術師にも過干渉を行うというのだろうか。

「うん、そうだけどね？そうなんだけど、結果は見えたでしょ？終わったでしょ？――だから、命を刈り取るかどうかは、僕が決める」
運命の三姉妹神の末としての義務。――死者の選定。

「罪深き人の子。業深き、神信者。――“魔術師”」
その声は幼子にもかかわらずその場を満たし、威圧した。

「己が欲に塗れ、領分を越え、力量を超える力を望むか」
魔術師はその選定を待つように、深く頭を垂れている。

「――その罪は深き闇にて償え。かつての望みのままに絶望に染まり行く道を歩み続けよ」
声が答えを出した時、神を前に逃れる事はできぬとしていた魔術師はグリンと頭を上げ、大きく目を見開き、罵った。神を、侮辱し、汚らしく蔑んだ。けれど神は人を、感情のない目で見下ろし、頭に手をあて、――全てを終えた。

「力なき自らを呪い、己が天分を恨み、永獄を味わうが良い」
翻す。――神はそのまま姿を消した。

＊＊＊　　＊＊＊　　＊＊＊

「魔力も持たないただ人となった彼は、不運と不遇に悩まされ続けるのだろうね。命の期限を延ばそうとしていた彼だからこそ、その恵みは深い感銘でもあり、絶望でもある」
神に魔力を奪われた男は暫く牢に繋ぎ、その後解放するとの決定だった。
しかし、男には帰る場所も行く場所もない。魔王と勇者の名の轟く地では男は入国さえ許されない存在となったのだ。――それこそ、今までとは全く別の、表の世界でしか生きていけない存在、となったのだ。魔力も魔術も魔物も勇者も魔族も魔王も、――関係のない、平凡な道。
けれど、神に見放された男はそれさえも険しく、不運と不遇にまみれていると決められた。
男は長い時を生きることを望んでいた。
だからこそ、それが適うようになって、でも神に見放されたこれか

らの地獄に、その夢自体が間違いであると、絶望するのだろう。最初から、全ての意味が無くなる。根本から、覆されることになる。

「標葉――」

香寿の声がする。そうだ、忘れていたが問題はそれだけじゃない。べたべたとくっついてくる変態を引き剥がして、コホンと息をつく。

「あー。えっと、……こいつが俺の守りたい奴です」

なんだか照れくさかった。

死神との絆の世界（前書き）

さぶたい⇒死神との再会

魔女登場！死神登場！

死神との絆の世界

「古の記憶？」
「そう。あの歌がそれに該当する」
ユエが苦笑した。

魔術師の突撃訪問に対し、カレルやらリベルやらユエ……神まで出てしまって、けれど事情を詳しく話すほどには標葉自身が事態を把握していなかったので、その説明をば――と言いたかったのだが、その前にサキたちの様子見に、心配が重なり、行って。
けれど、どうにも敵は倒しても相当の傷を負っていた。
だから一旦、休ませよう、ということになった。魔王城に連れて行くカレルとリベル。
そして標葉とユエはというと、医者を連れてくることになったのだ。大陸一の技術だが引きこもりの、凄腕――魔女。そして現在に繋がる。
魔女の館は城の後ろに広がる広大な森（以前、標葉がいた森とはまた別）の奥に館を建ててひっそりと薬草など摘んだり実験したりで過ごしているらしい。

案外簡単に案内されて、引きこもりの主人とは正反対に社交的な遣い魔に用意されたお茶を飲みつつ魔女の出てくるまでの間をユエと話して過ごす。――その内容は主に、ユエがここに来たことで得た、記憶について。
「吸血鬼は生れ方が幾つもあって、吸血鬼同士の子である純潔種と吸血鬼が同族として人を吸血鬼に作った混合種と、純潔種から記憶を受け継ぎ代替わりした――吸血鬼を移された人造種があってね、俺はその最後の奴」

「元は人間だったのか？」
「そう。でも、その場合は人の時の記憶がなくなり、吸血鬼としての記憶のみ受け継がれていく。――だからさ、元から俺には記憶がなかったんだよ」
そう、言った時のユエは儚く、折れてしまいそうで、その手をぎゅっと握った。柔らかく握り返されるのに、それが何だか元気がないように感じた。
時々、ユエから感じるこの落ち着きはその記憶があってのものなのかもしれない。でも、それが何もない、からっぽの存在だからこその、諦念に感じられて、どうしようもないほど胸が苦しくなる。――心細いだろうに。
「記憶を移してからすぐ眠りに入ったらしくてね、知識以外のものが何もない状態はそのせい」
失った記憶を、自分を捜してここに来て、それでも、見つからなかった自分というもの。
「……別にいいだろ。昔なんて。今があるんだし」
「――嬉しいね。ツンデレな標葉がそんなこと言ってくれるなんて」
「ツンデレじゃない」
「でも隣はずっと俺のものなんでしょう？」
ふふふ、と幸せそうに笑うユエをどつきたい。こそばゆい気持ちに、でも耐えた。今、この瞬間を壊してしまうことが怖い。今にも消えてしまいそうなユエに心無い言葉を吐くことは出来ない。とても繊細なユエだからこそ、今は不安定で――標葉はこの美しいまものを突き放せない。大切に、そっと触らなければならないのだと、感じさせられる。
「ちょっと、人の家でそんな甘ったるい空気出さないでくれる？」
真紅の髪に漆黒の衣を羽織った女性が出てくる。その手には簡易にまとめられた荷物が在り、出かける準備は万端、といういでたちだ。そして、漸く標葉はこの場にいる理由を思い出した。

「あ、と――魔王から遣わされて来ました。急ぎ、登城して欲しく……」
「患者ね。容態は？」
「重症者が二名。一人は魔力疲労と、その能力の使いすぎで。一人は全身に裂傷、血が止まらない様子で……」
「それは見ればわかるからいい。そうなった状況は？毒とかは？」
矢継ぎ早に尋ねられて標葉は状況を目前で見ていない自分から言えるだけの、知らされた事項をあげつらえて行く。
「数時間前、国境沿いの町で魔物の大群が押し寄せてきて、その収集に当たった者たちです。魔物の種類は――」

「治療完了。――じゃ」
「ちょっと待て、アン」
魔女――アンは城に着くなり、案内もなく標葉たちを置いてたったと素早く患者の寝かされている部屋を探り当て、誰かが何か言う前に治療に当たった。そしてそれが終わるなり、「帰る」の一言である。それに呆気に取られる周囲を他所に、いつの間に着たのかリベルは彼女を呼び止める。
「何よ」
そっけなく返す彼女にリベルは苦笑した。以前と全く様子が変わりない彼女は、実は魔族と同じ寿命を持つ人間である。若々しい見た目は標葉よりも少し上、二十台を過ぎたばかりに見えるが、その実は既に何十年もこの姿のままだ。それは魔王になりたてであるリベルも同じなのだが、二人は幼馴染なのだ。成長速度が更に緩くなるリベルとは違い魔女の彼女自身はそれまでの速度で年を経る。それはこれからの二人を引き裂く差となるのだが、その時のリベルは彼女に変わりがないことを、心の底から喜んだ。――彼女は変わらない。リベルが魔王となっても、変わらない。そんな存在はアルファルトの他には彼女以外いなかったのだ。

「もう少し、ゆっくりしていかないか？久しぶりの登城なんだし」
「嫌。実験があるの」
「じゃあ、命令だな」
「変態の命令なんて聞くバカはいないわ。私はあなたの臣下じゃない」
「そう、幼馴染だ。だから変態なんていわないよね？ちょっとぐらいお茶に付き合うよね？」
どこまでも強気な彼女にリベルは常にはない強気で対応する。
「陛下は変なところで頑固ですから、諦めたらどうですか？」
もう一人の幼馴染（現在は患者の癖に）がリベルに加勢したので、アンは仕方なく、仕方なく……お茶に付き合うことにする。ただし、道づれは必要だ。
「あんたたちもどう？」

「ふーん。あんた、ただの魔力タンクじゃなかったのね」
ユエとカレルとリベルとアルファルトと意識の回復したサキと魔女のアン。いつのまにか混入していたテン。現在、この7人と標葉はお茶を飲んでる。重症のアルファルトが給仕を買って出て、それを止められて結局は城で働くほかの人（騎士だとか）に持ってきてもらって、比較的元気な標葉が行っていた。隣でアルファルトがお小言のように口出しをしてきたので、多少疲れはしたがおいしいお茶が入れられて、楽しめる時間を過ごしている――はずだ。
けれどなんだろう、この肩身の狭さ。
「その言い方って酷くない？契約者って言ってよ。恋人でも良いけどさぁ」
「友だち。物じゃ、ない」
「うちは契約してないっすー。人間っすよー」
「あからさまにわかるようなことは言わなくていいんじゃないかな

？」
「僕は見てのとーり神様だから！契約しないよー。他に頼るほど弱くないもん。弱点は野菜だけだもん」
ユエ、サキ、カレル、リベル、テンが順繰りに標葉との関係性を言う。

「……妙な団体ね、あんたたちって」
「俺もそう思う」
魔女に同情されてしまったが、もう仕方がない。諦めた。
訂正もする気はない。気力がない。
そんなことをしたところで、話題の変更は認められないだろう。
……何せ、ずっと標葉の話が繰り広げられているのだ。無言でお茶を飲むアルファルトの真似をするしかない。恥ずかしくてたまらない、を通り過ごして痛い会話に無心になろうとひたすら努力をして、けれど出来ないと解った時から標葉は白く灰になった。

「ちょっと、席外すぞ」
盛り上がる話題についていけず、小さく声をかけて席を立ち上がる。アンは何だかんだと、ユエたちの会話に強制的に引きずり込まれている。アルファルトだけが目で標葉を見送った。

「はぁ……」
廊下に出て、溜息をする。どこか一人になれる場所があればいい、と出てきたのだ。少し歩いてみる。――城の中は普通に豪勢だ。一夜を過ごした場所ではあるし、案内も適度にされたが、その時はそれほど余裕を持って見渡したことがなかったために、道が複数入りくねっていることも、城にいる人がそれほど多くないことも知らなかった。見かければ挨拶を返してくれるここで働いている者たちは、けれど身分など考えているような人たちではなさそうだった。作法は身についているようだが奢りもなく気安い。――それだけでリベ

ルの人柄が見えてくるようだった。ここに居る人達は魔族でありながら、温かい。魔力もあるだろうに、普通の人と同じだ。町には人と魔族が一緒に住んでいる。小説や何かであるような魔界とは違うと感じた。

――現実にある。

それが心にじんわりと伝わる。ユエはここが名前のない国だと言った。

どこか開拓されていないような島か、地図上にはあっても国として認められていない土地なのか――結界か何かで隠された土地にあるのか。

「やっと、会えた」

「――死神」

いつの間にか立ちどまっていた標葉は振り返った。

「友だちが、ほしかった」

少女は言った。

「巻き込みたくはなかった。だが、そっとしておいても何かが起きるのなら、と巻き込んだ」

謝る少女はあの時と変わらない。その言葉は表裏がない。嘘もない。

あの時、会った時に彼女はもう既に魔術師の行動を読んでいたのだろうか。神に追いかけられることは解っていて、その逃亡に標葉を巻き込むことがわかっていてもそうしたのは――魔術師の存在があったから、そのために標葉に力を与えたのだろうか。――再会の約束とともに。

（いや、そんなことはどうでもいいか）

今必要なのは、友達がほしかった、という少女に言葉を返すことだけだ。思考などいらない、本心からの言葉。

「友だちだ。――皆で一緒に旅してきただろう？」

少女は一瞬小さく驚くと、はにかむように笑んだ。
「名前を、教えてくれないか――そして、皆のところへ行こう？」
「私の名は……ないんだ。つけて、ほしい」
「――キズナ。みんなの架け橋となった存在だから、“絆”だ」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2210n/

死神との絆の世界

2011年2月28日13時10分発行